

第4節 6区⑥の調査

1. 調査の経過

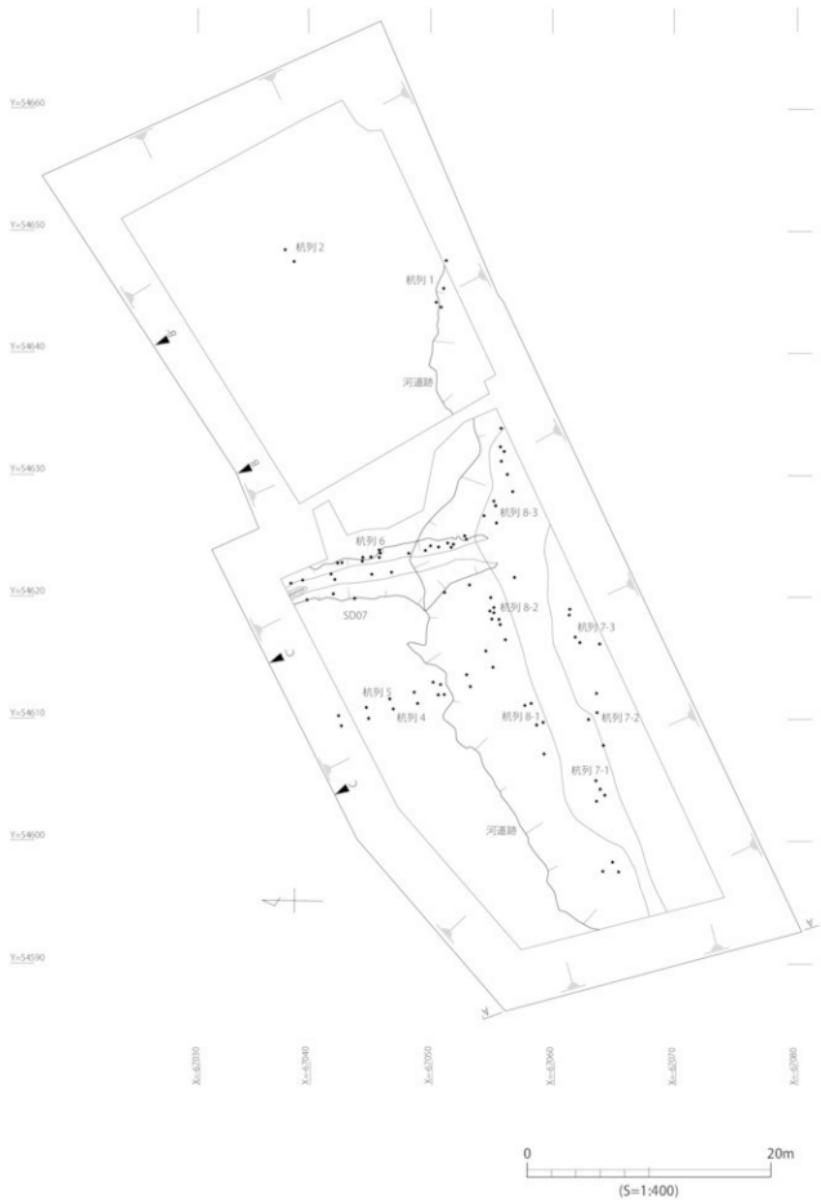
6区⑥は、6区①・⑤の南側で、6区③・⑦の東側に位置しており、平成22年度に調査を実施した。発掘調査面積は2,060m²である。

排土処理の面から、調査区全面を一度に発掘するのは困難であったため、調査区を東西に2分し、東側の発掘時には西側を排土置き場とし、東側の調査終了後、天地返しをして西側を発掘した。

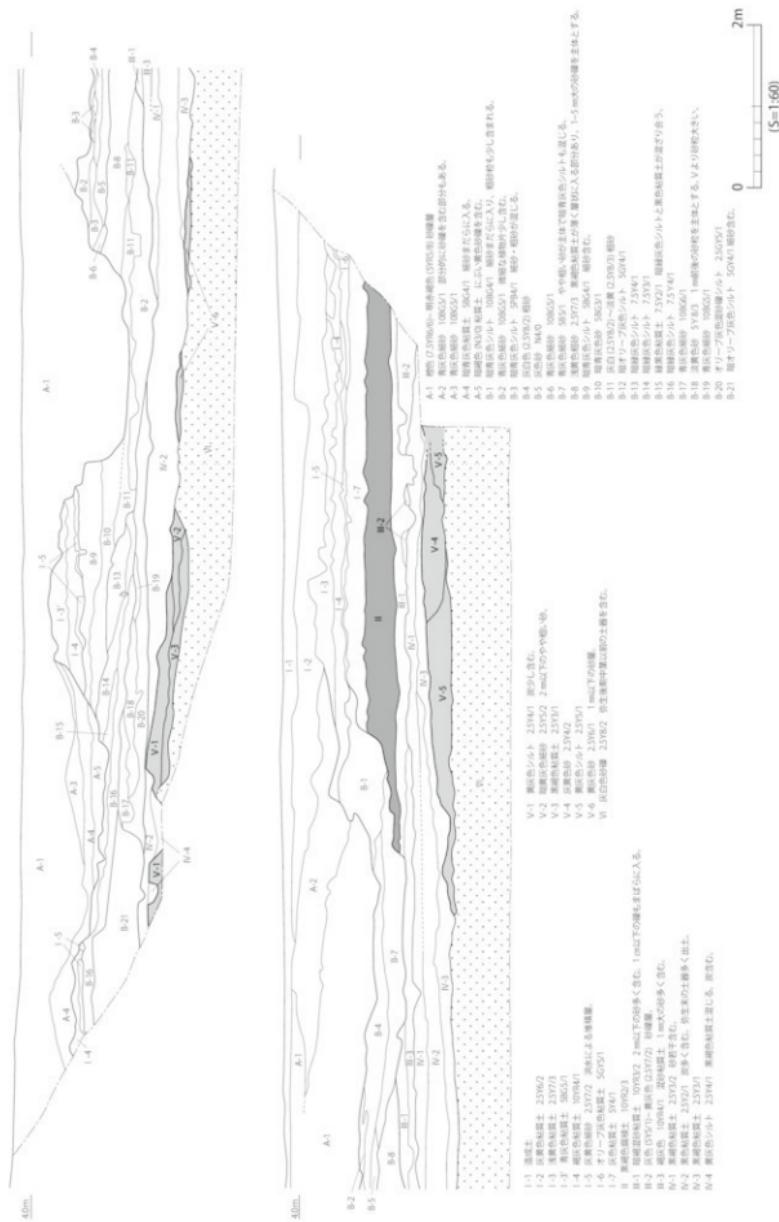
平成22年5月17日から東側で重機による表土掘削を開始し、近世以降の水田耕作土や造成土などを除去し、5月24日から人力により黒色腐植土層の掘削を始めた。6月10日頃から黒色腐植土層下層の暗灰色粘質土を掘削しており、その下面（黒色粘質土上面）では土器群や、建物跡（SB01）の柱根を検出している。遺物包含層の調査を進めるとともに、SB01の掘り方を確認するため柱根の一部に沿ってサブトレチングを掘り下げたところ、柱の下に抉りを入れて礎盤を組み合わせるという特殊な基礎構造を持つ建物跡であることがわかった。7月22日には島根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏より発掘調査の方法や建物跡について調査指導を受けた。8月上旬には、灰色シルト層上面で遺構検出作業を行い、SB01のほかにもう1棟の建物跡と溝、土坑などを確認し、これ以後、遺構の掘削を行った。この時点で調査区内では湧水が激しく、遺構壁面や土層観察用のベルトが崩れたり、遺構の底面の確認が困難になるなど調査は難航した。8月11日には奈良文化財研究所建造物研究室長の島田敏男氏より建物跡について調査指導を受けた。8月20日にラジコンヘリコプターによる調査区の空中写真撮影を実施した。8月22日には現地説明会を開催し、約150人の参加があった。9月3日までに調査区の大部分において、遺構の調査や記録など終えている。9月6日にベルトコンベアの土台として残していた調査区の南東隅部分を掘削し、SD06を検出したが、この日のうちに完掘・記録して、東側の調査を終了した。

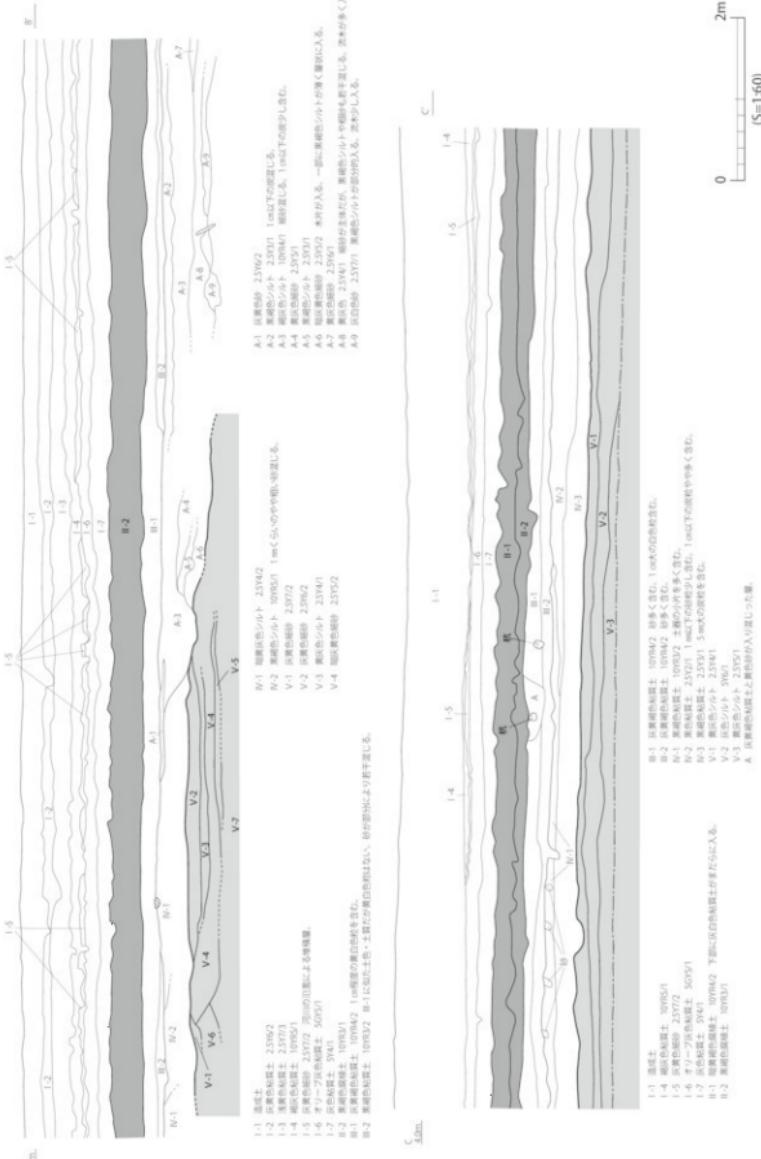
9月7日から東側の埋め戻しを始め、続けて西側の表土掘削を重機で行い、9月24日から西側の発掘作業を開始した。まず、黒色腐植土層を切るかたちで中世後半～近世の河道跡とSD07が確認できたため、これらの調査をした。河道跡からは木製品や鉄製品のほか、人骨・獣骨も出土しており、中にはほぼ完全な状態で残っている人の頭蓋骨もあった。11月17日に上井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長の松下孝幸氏より出土人骨について調査指導を受けた。10月下旬以降、黒色腐植土層以下の発掘を行い、11月下旬ごろから黒色粘質土で弥生時代後期末頃を主体とする遺物が多量に出土するようになった。中には西部瀬戸内系もしくは北部九州系の土器や、朝鮮半島系の三韓土器も含まれていた。また、黒色粘質土の掘削中に建物跡（SB03）の柱根が検出されたため、掘り方の確認を目的として、これらを結ぶかたちで上層観察用のベルトを残して遺物包含層の掘り下げを行った。23年1月から灰色シルト層上面で遺構検出作業を行い、西側調査区では建物跡3棟、溝、土坑などを確認した。1月14日には田中義昭氏より遺跡の性格について調査指導を受けた。1月24日まで遺構の調査・記録を行い、現地調査を終了した。

なお、23年度には整理作業・報告書作成業務を行っており、整理の過程で、6月2日に建築部材について奈良文化財研究所遺構研究室長の箱崎和久氏から、9月5日に西部瀬戸内系及び北部九州系土器について山口大学学術情報機構助教の田畠直彦氏から、11月22日に朝鮮半島系土器について大阪歴史博物館学芸員の寺井誠氏から調査指導を受けた。



第33図 6区⑥Ⅱ層上面～Ⅲ層上面検出遺構図





第35図 6区⑥北壁(B-B') 土層断面図

2. 基本層序（第34・35図）

調査区の基本層序は大きく見て6つに大別した。

I層は、水田耕作土など近世以降に堆積したと考えられる層である。このうち第34・35図のI・5層は河川の氾濫による堆積層と考えられるもので、他の調査区でも同様の層が認められる。

II層は、未分解の植物質のものが堆積した黒色系の腐植土層で、「オモカス層」とも呼ばれる。他の調査区でも同様の層が認められる。堆積時期は中世頃と推定される。本調査区では、II層から人力で掘削を行っている。

III層は、IV層と比べやや灰色みを帯びた粘質土を主体とする層で、径1cm大の白色～黄褐色の砂質土粒塊を含む層や、砂が混じる層も見られる。古代の耕作土と考えられる層で、須恵器片など古代の遺物が少量ながら出土している。

IV層は黒色系の粘質土層で、弥生時代後期後葉～古代の遺物を含むが、特に弥生時代後期末頃のものが多く出土している。

V層は灰色シルト系堆積層で、前述したようにこの上面で遺構を検出している。本調査区では遺物はほとんど含んでいない。なお、調査区の南側の一部にV層の堆積がない地点もあった。

VI層は灰白色砂礫層で、斐伊川の堆積作用によるものと考えられる。縄文時代～弥生時代後期中葉までの遺物が出土している。6区①・③・⑤・⑦などでも同様の堆積層が確認されている。

3. II層上面～IV層上面の調査（第33図）

（1）II層上面の検出遺構

本調査区では、前述したようにI層は重機で除去し、II層から人力で発掘を行っている。II層上面では河道路と溝（SD07）を検出した。また、河道路やSD07の埋土を発掘する過程で、これらに伴う杭列を確認した。

河道跡（第34・36～39図）

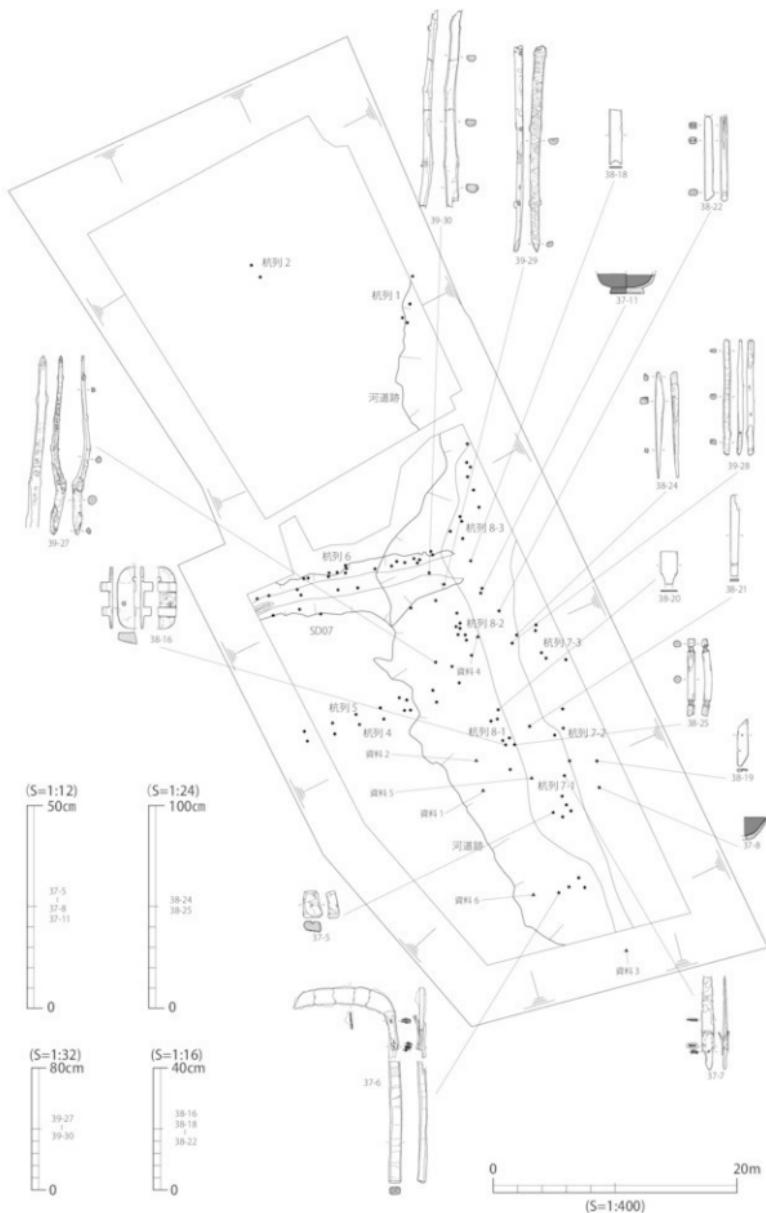
検出状況及び土層堆積状況 II層上面で、調査区西辺から南辺東側にかけて東西方向にのびるかたちで検出したが、調査区西壁の土層（第34図）を見れば、河道路の堆積段階は大きく2つに分けることができる。

新段階の堆積はA-1～5層で、これらはI-3層を切っており、最も低い部分の標高は約2.8mである。これに対し古段階のB-1～21層は、I-5層よりも下のI-7層を切ってはじまつており、西壁で最も低い部分は標高約2.5mである。なお、新段階・古段階とも細かく見れば、さらに複数の小段階に分けることが可能であり、幾度も流れを変えながら堆積を繰り返した様子がうかがわれる。

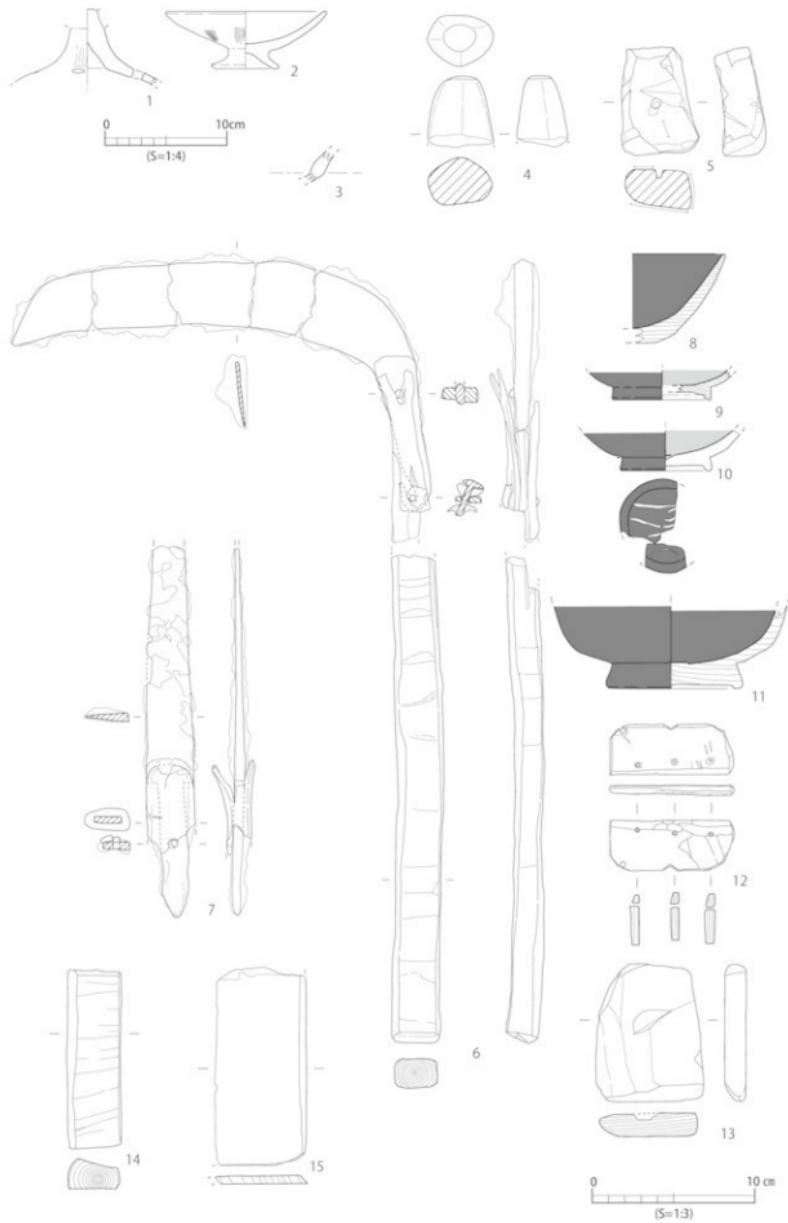
調査区内で確認した河道路については堆積段階を区別せずに発掘したが、検出時の上端の標高がおよそ2.7～3.0mで、底面の標高が約2.5mであることから、一部に新段階の堆積を含む可能性があるが、中心となるのは古段階の堆積であったと考えられる。

出土遺物（第36～39図） 土器・磁器・石製品・金属製品・木製品が出土している。

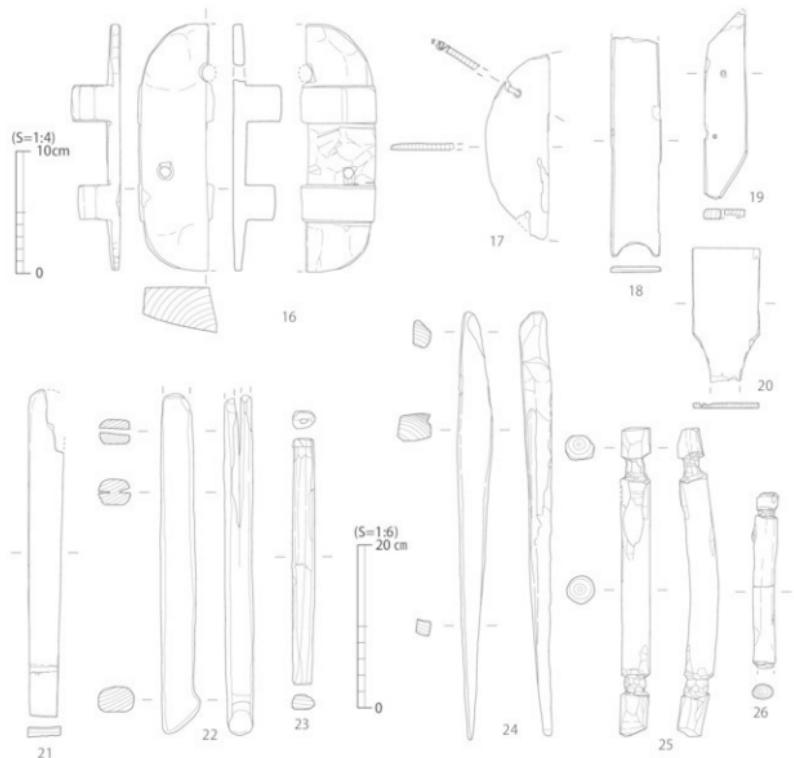
1・2は古式土器である。1は脚裾部が大きく開く高环で、脚部には円形の透孔を持つ。2は低脚环である。このほかにも土器片が出土しているが、摩滅したものが多く、もともと下層の遺物包含層に含まれていたものが水流によって攪拌されたと考えられる。



第36図 6区⑥河道跡遺物出土状態



第37図 6区⑥河道跡出土遺物（1）



第38図 6区⑥河道跡出土遺物（2）

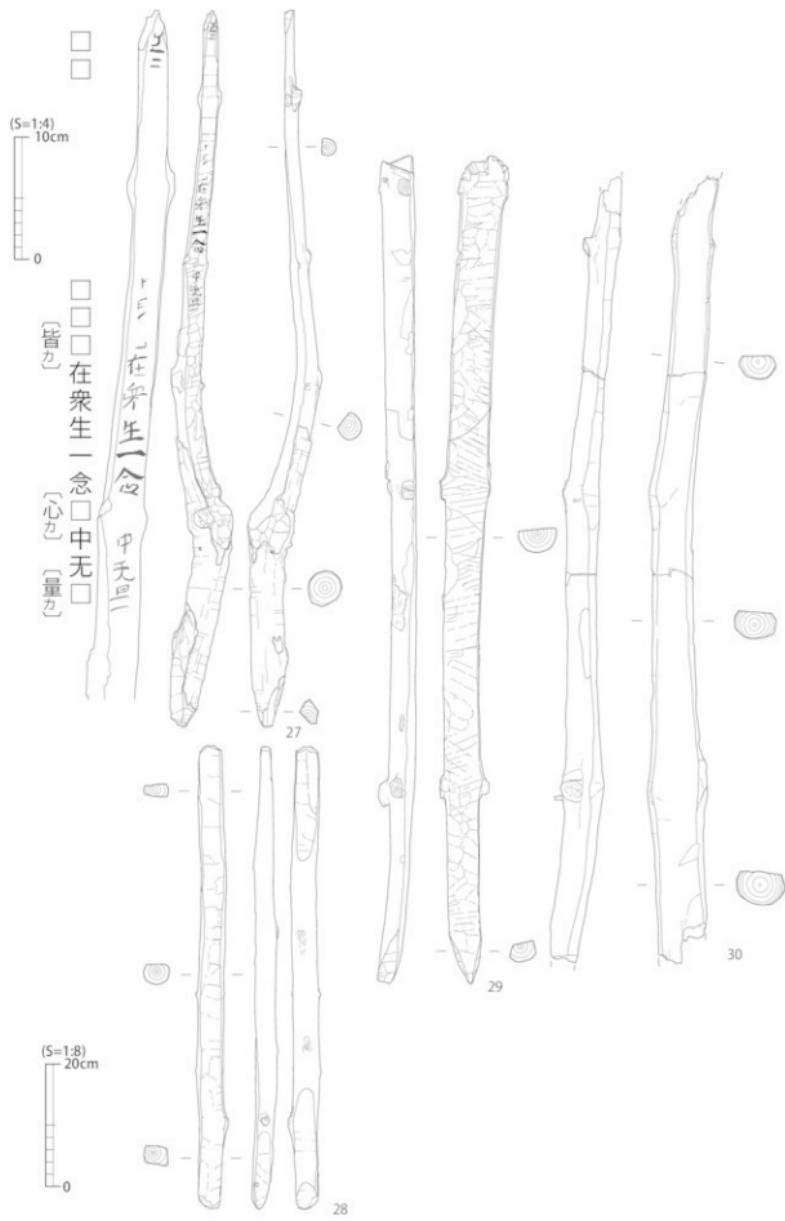
3は青磁の稜花皿で、15世紀後葉～16世紀前葉に位置付けられる（續1995）。

4・5は石製品である。4は叩石で、図上側の端部は敲打によって平坦面が形成されている。5は砥石で、3面に砥面がみられる。図の正面には、径5mm、深さ5mmの孔が穿たれている。

6・7は鉄製品である。6は鎌で、木柄に装着された状態で出土した。茎の端部は鉤状になり、ここに柄と固定するために鉄製の目釘が通っている。また、茎端部から7.2cm上にも目釘孔があり、鉄製の目釘が入っている。柄は長さ39.5cm、幅2.9cm、厚さ1.8cmで、断面形が長方形のものである。7は短刀で、木柄が残存している。刀身は両刃のもので、茎は先端がすぼまり、丸く收まる。茎端部から4.5cmの部分には目釘孔があり、木質の目釘が入る。柄は呑口式のものである。

8～30は木製品である。8～11は漆器椀で、8・11は内外面に黒漆が、9・10は外面に黒漆が、内面には赤漆が塗布されている。10の高台の内側には弧状の線刻が入れられている。

12は用途不明の板状の木製品で、一方の長側縁は直線的であるが、もう一方の長側縁は隅が丸く切り取られ、中央にも抉りが入れられている。13はヘラ状の木製品で、手前側の端部は斜め方向の面を持っている。14は丸太状の材を加工したものである。15は折敷の底板と思われるもので、



第39図 6区⑥河道跡出土遺物（3）

隅が丸く加工されている。16は一本作りの連歯下駄で、鼻緒の孔から左足に履いたものと分かる。17は曲物の底板で、周縁には側板と接続するために桜の樹皮を通した孔が開けられている。18～20は用途不明の板状木製品で、18は端部が半円形の抉られたもので、19は両端が切り出し状になり、2か所に穿孔を持つもの、20は羽子板形のものである。21は、上側の端部が丸く作られ、下側の端部は方形状になる板材で、上端から下端に向かって少し幅が狭くなる。下端から3～4cmの位置に板状のものがあたっていた痕跡があり、結桶の側板の可能性が考えられる。22は鎌柄で、先端部側は刃部をはじめ込んだ切り込みが入る。23は何らかの道具の柄と考えられるもので、卵形の断面形を持ち、先端部には道具を装着するための孔が穿たれている。24は楔状の木製品で、25・26は両端に抉りが入れられた有頭棒である。

27は卒塔婆である。枝分かれした丸太材を加工したもので、全体として折れ曲がったかたちになっている。上端は側面を削って三角状にし、下端部は周囲を削って杭のように尖らせている。上部の枝分かれした側の一方に面取りをしており、この部分に墨書きが確認できた。文字の残りが薄く、判読は困難であるが、最上部には梵字風の文字があり、面取りされた中ほどに「□□□〔皆知〕在衆生一念□〔心知〕中无□〔量知〕」と記されている。28～30も長い丸太状の材を面取りしており、卒塔婆の可能性を持つものであるが、赤外線カメラを用いて観察したが、文字は確認できなかつた。28は上下両端で面取りされた側の裏面にも加工が見られる。29は、片側の端部は側面を削って三角状に尖らせているが、もう一方は複数の切り込みが入れられ、形が整えられていない。30は上下両端を欠いている。27～30はいずれも横たわった状態で出土しており、上流側から流されたものと考えられる。

このほかに人骨・獣骨が出土している。人骨は2個体分の頭蓋骨があり、そのうち1個体についてはほぼ完全なかたちで残存していた。墓壙などこれらの人骨に伴う遺構は確認していない。獣骨は7点出土しており、ウマ1点、シカ5点、不明1点と同定されている。これらの詳細な鑑定結果については第7章第2節に掲載した。

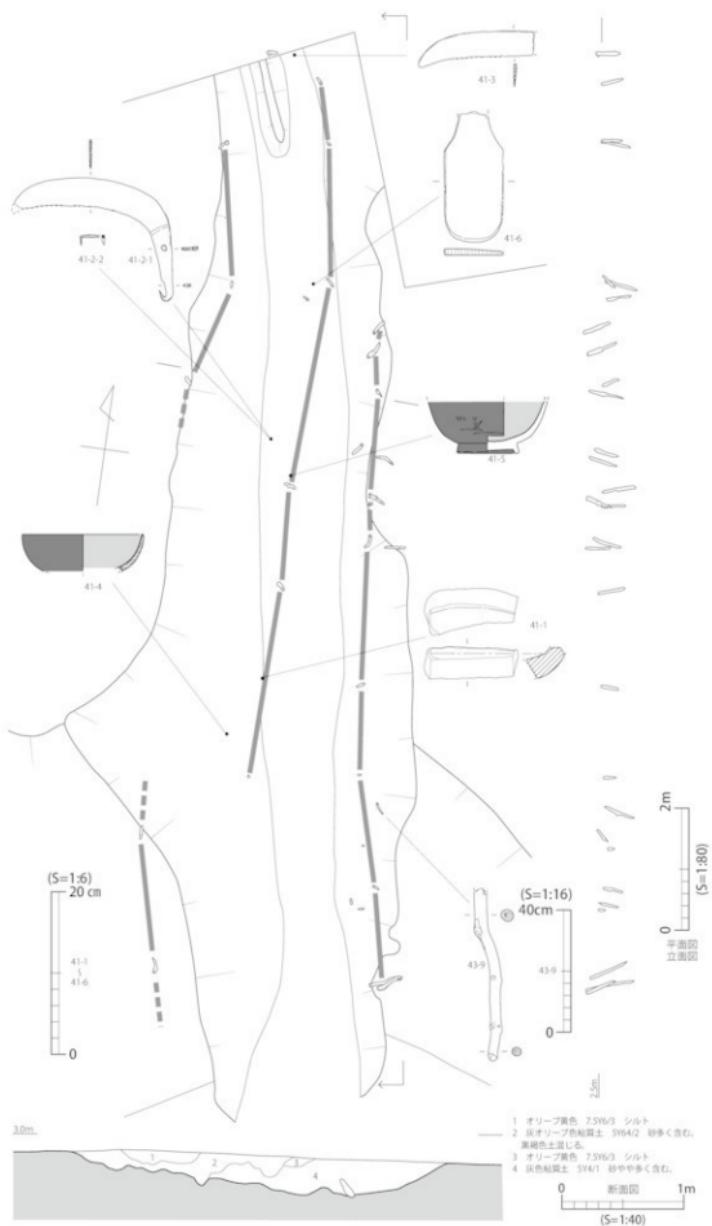
杭列1・7・8（第42・43図） これらは河道跡の中、あるいはその付近で検出したもので、杭の並びが河道跡の方向と揃うことから、河道跡に伴う可能性が高いものと考えた。

杭列1は、調査区東側で河道跡の北岸上端付近で検出したもので、東西方向に約3.5mの長さで杭が立ち並んでいた。第43図1・2は杭列1に伴う杭である。1は、一方の面に幅3cmの段を残して、面取りしたもので、卒塔婆として立てられていたのかもしれない。

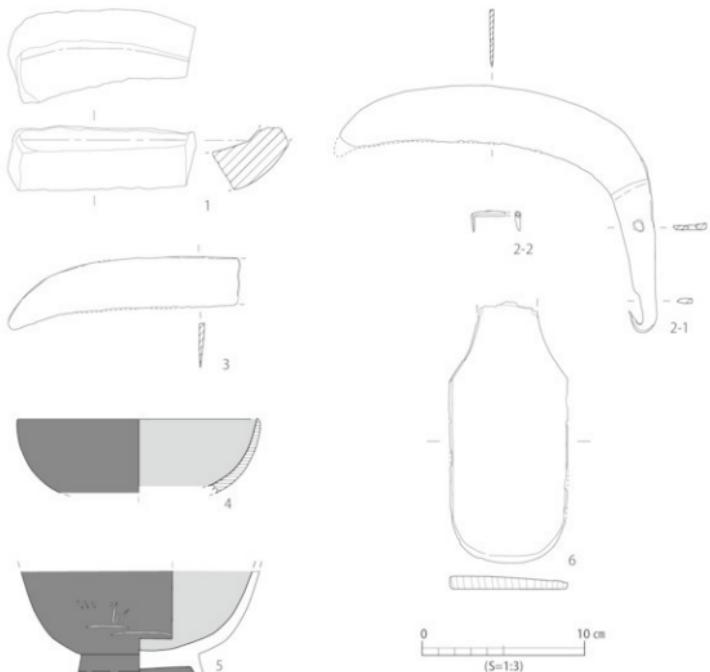
杭列7は、調査区西側で河道底面から南岸下端付近で検出したもので、東西方向に約16mの長さで杭が立ち並んでいた。杭の並びは直線的ではなく、間隔も一定していないため、これらが一連のものであるかは不明であるが、杭のまとまりから、杭列7-1～3に分けることもできそうである。

杭列8は、調査区西側で河道底面から北岸下端付近で検出したもので、東西方向に約27mの長さで杭が立ち並んでいた。杭の並びは直線的ではなく、間隔も一定していないため、これらが一連のものであるかは不明であるが、杭のまとまりから、杭列8-1～3に分けることもできそうである。第43図8は杭列8に伴うもので、径4cmの丸太材の先端を削って尖らせたもので、他の杭もこれとほぼ同様のものであった。

河道跡の性格・時期 この河道跡に対応する堆積層は、6区③・④・⑦、4区②でも確認されてお



第40図 6区⑥ SD07・杭列6



第 41 図 6 区⑥ SD07 出土遺物

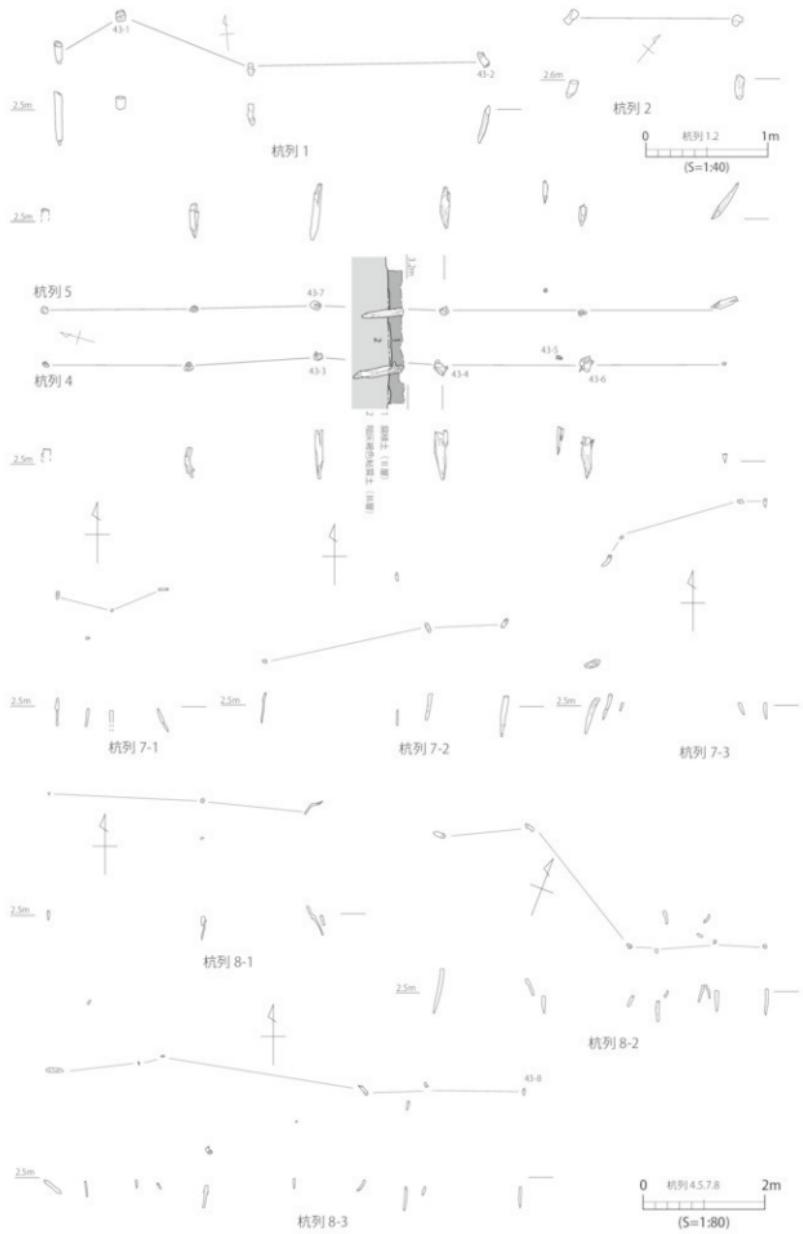
り、現在自然堤防上の高まりとなっている市道に沿って流路があったものと想定できる。この地点の北東に位置する伊努谷から流れ出る「伊努谷川」の旧河道であった可能性が考えられる。なお、河道路跡から人骨や卒塔婆が出土しているが、これらは河道の周辺で葬送儀礼が行われていたことを示すものといえよう。

河道路跡の年代を示す遺物はほとんどないが、15世紀後葉～16世紀前葉の青磁稜花皿が1点出土している。また、河道路跡に伴う杭列8の杭（第43図8）の放射性炭素年代測定では、補正¹⁴C年代で 350 ± 20 yrBP（曆年較正年代で1459AD～1530AD、1540AD～1635AD）というデータが得られた。次に土層から検討してみると、2区の調査では、17世紀末～18世紀と16世紀～17世紀前半の2時期に発生した洪水砂層が確認されている。本調査区で確認できた洪水砂層（I・5層）は2区の洪水砂層のいずれかと対応するものと考えられ、古段階の河道路跡は少なくとも18世紀以前であることは確実である。以上を総合すると、古段階は中世後半～近世初頭に属すると推定できる。

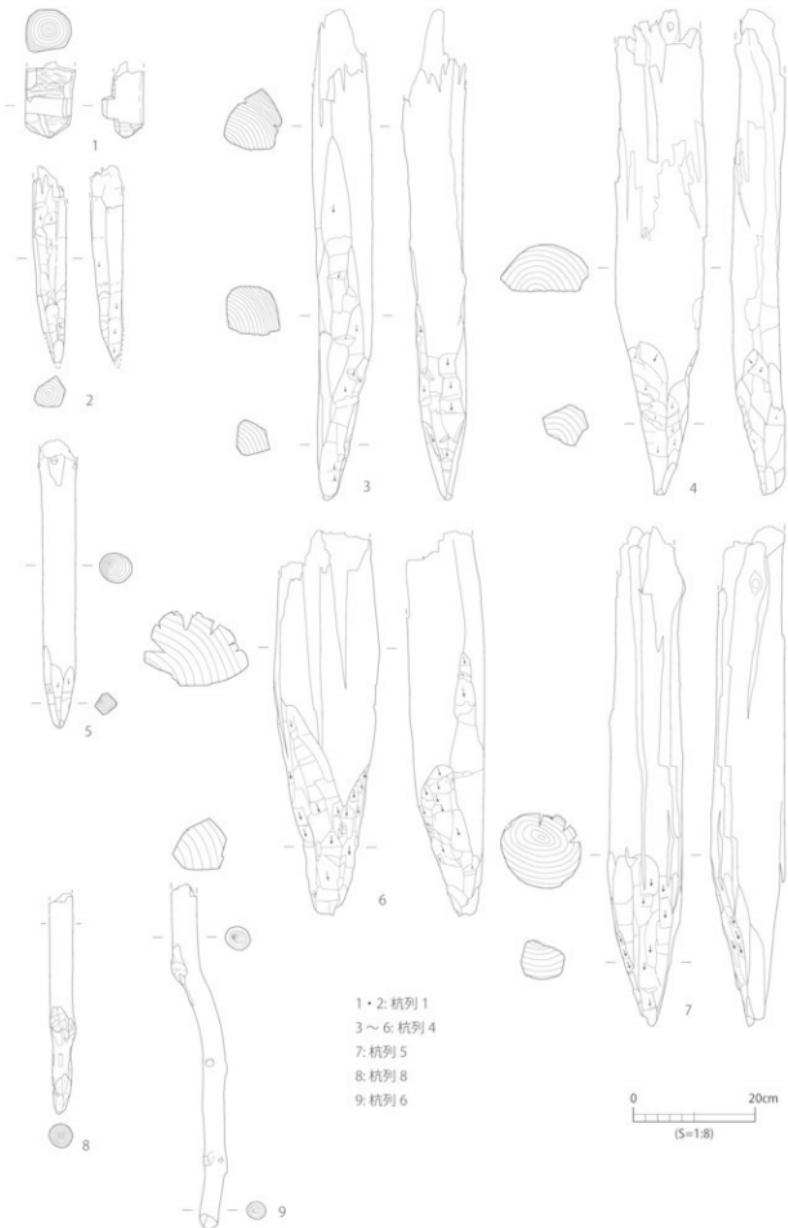
SD07（第40・41・43図）

検出状況 SD07は調査区中央部を南北方向にのびており、南側は河道路跡によって切られている。平面的には検出したのはII層上面であるが、調査区北壁の土層断面のI・7層上面からはじまるこ

² 第7章第1節を参照。なお、隣接する6区⑦の河道路跡出土木製品の放射性炭素年代もこれと近い値を示している。



第42図 6区⑥杭列1・2・4・5・7・8



第 43 図 6 区⑥ 桁列 1・4・5・6・8 出土遺物

とを確認している。現状の幅は2.4～5.6mで、深さは0.3mであるが、本来の深さは0.7m程度あつたと考えられる。埋土にはシルト質の土層や砂混じりの粘質土が見られるが、堆積状況から水が流れていたかどうかは判断できなかった。

出土遺物（第41図） 1は石臼と考えられるもので、受皿部の破片であろう。2-1は鉄鑓で、刃部は弧状を呈し、茎先端は鈎状に曲がる。茎に目釘孔が1か所あり、2-2の止め釘が入っていた。3は鉄鎌刃部の破片である。4・5は漆器椀で、外面に黒漆が、内面には黒漆のち赤漆が重ね塗りされている。5は外面に赤漆で草花文が描かれている。6は杓文字形の木製品である。

杭列6 SD07に伴うと考えられる杭列を、溝の中や東西両岸で検出しており、まとめて杭列6とした。ただし、詳細に検討すると、溝の東岸、溝の底面、溝の西岸にそれぞれ1条の杭列が存在するようみえる。第43図9は、東岸で検出した杭である。径4cm程度の丸太状の材の先端を尖らせたもので、他の杭もほぼ同様のものであった。

遺構の性格・時期 埋土から水流の有無について判断することはできなかったが、遺構の位置から水田等に伴う水路跡の可能性があるものと考える。

遺構の時期は、洪水砂層（I・5層）よりも下で、中世の黒色腐植土層であるII層よりも上から掘り込まれていることから、中世後半～近世前半の間に収まると考えられる。なお、杭列6に伴う杭の放射性炭素年代測定では、補正¹⁴C年代で350±30yrBP（曆年較正年代は1465AD～1636AD）という結果が得られ、上記の調査所見とも矛盾していない。

（2）II・III層の調査

II層の掘削中に杭列2・4・5を検出している。遺物は、II層で少量の木製品が、III層では須恵器・土師器など古代～中世前半のものが出土した。

なお、隣接する6区①・⑤ではIII層上面及び下面に相当する面で、畦状の道路遺構や、連続ピット状の道路遺構が検出されているが、本調査区ではそうした遺構は見られず、道路上に伴うような硬化面も確認できなかった。ただし、第35図C-C'では、III層上面から掘り込まれたA層や、IV層に嵌入している砂層が観察され、これらが道路遺構の名残なのかもしれない。

①II層掘削段階の検出遺構

杭列2（第42・43図） 調査区の東側、K11グリッドに位置しており、II層のほぼ下面で杭の上部を検出した。1.4mの間隔で2本の杭が打ち込まれている。杭は、直徑7cm前後の丸太材を削って先端を尖らせたものであった。杭の打ち込み面は不明である。

杭列4・5（第42・43図） 調査区の中央部からやや南寄りに位置する。2条の平行する杭列が南北方向にのびており、西側を杭列4、東側を杭列5と呼ぶこととした。これら杭の上部はII層の掘削中に検出できた。杭列4・5はともに調査区北壁から約11mの長さまで確認しているが、そこから南側には続かず、河道跡によって失われた可能性がある。杭4・5の間隔は0.8～1mで、両者の杭は対応する位置に打ち込まれていることから、2条の杭列は一連のものとして配置されたと判断できる。なお、これらの杭列に伴う盛土や、そのほかの遺構は検出できなかった。

第43図3～7は、杭列4・5に用いられた杭である。丸太状の材を用いたもの（7）や、丸太材を半蔵したものの（4）、丸太材をミカン割りしたもの（3・6）があるが、総じて太く長いものが用いられており、5のように細いものは少ない。

本調査区北側の6区⑤では、盛土とそれを補強する杭列で構築された道路遺構が存在し、杭列4・

5はこの道路遺構と連続する位置にあることから、道路上に伴うものと考えられる。ただし、本調査区では道路の盛土は認められず、何らかの原因で削平・流失されたか、道路の構築中に放棄された可能性が想定できるが、いかなる理由によるものか特定はできない。

遺構の時期については、道路遺構がII層下面で検出されていることから、古代末～中世前半と考えられる。なお、杭列4に伴う杭の放射性炭素年代測定では、補正¹⁴C年代で1,040±40(曆年較正年代で902AD～915AD、969AD～1029AD)というデータが得られた。

② II層出土遺物（第44図）

1は板状の木製品である。表面は平滑で、整った短冊形をしていることから、木簡になる可能性を考えて赤外線カメラで観察したが、文字は確認できなかった。2は鎌柄である。上端には刃部を装着した切り込みや、目釘孔の一部が残っている。3は板状の木製品で、上端部には切断面が見られる。4は模状の木製品で、手前側に向かって薄く作られている。

③ III層出土遺物（第45図）

1～6は須恵器である。1・2は壺蓋で、1は口縁端部を外面からナデ押ししたもので、2は口縁端部を折り出して外面にナデを入れたものである。3は高台付壺で、岡田編年の出雲III期頃のものと考えられる。4・5は長頸壺とみられるもので、底部に高台を持つ。4は体部が丸みを持ち、底部の切り離しは静止糸切りでされている。5は4と比べて体部の立ち上がりが直線的である。6は甕の胴部片で、外面には平行タタキ目とカキ目が、内面に同心円当具痕が残る。

7～10は土師器で、7・8は内外面が赤色塗彩された壺、9は高台付壺で、内面は黒色処理されている。10は体部がやや内湾気味で、廣江編年の2段階、11世紀頃に位置付けられよう。

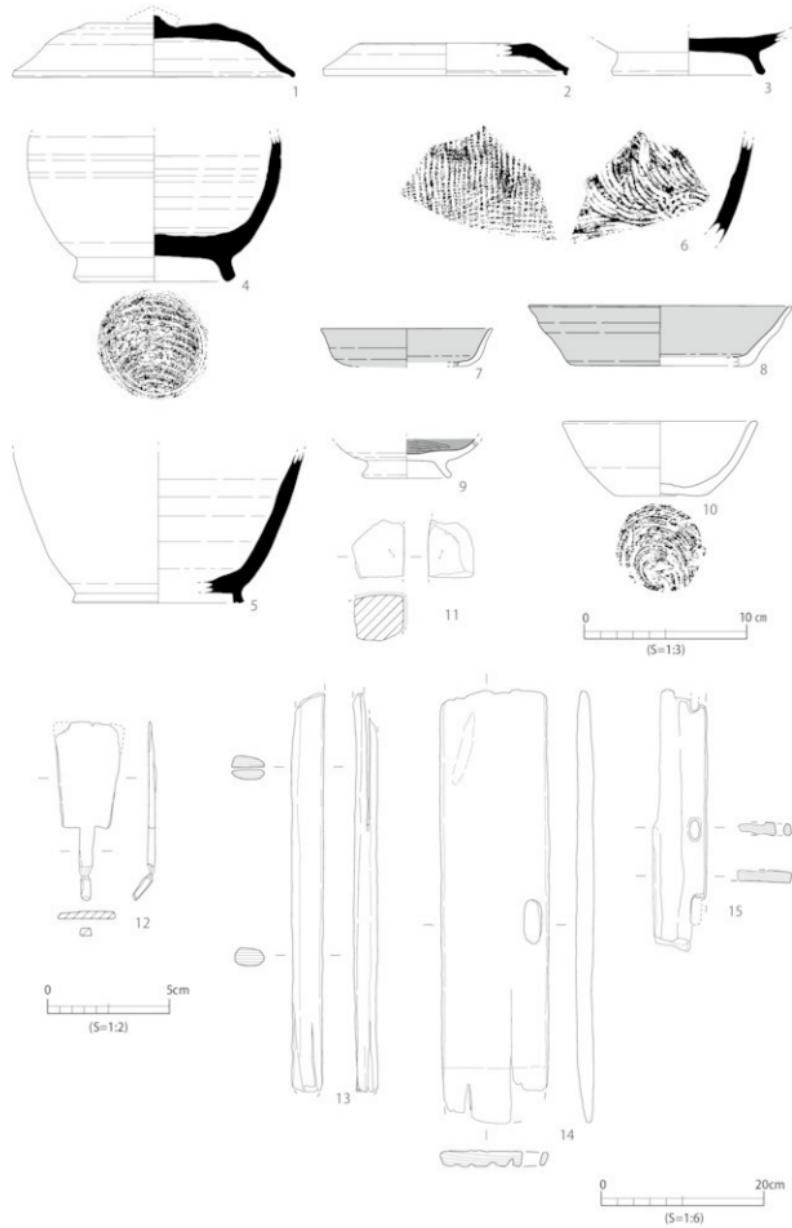
11は砥石で、2面に砥面を持つ。

12は鉄鎌で、方頭状の鎌身部に、断面が長方形の細長い茎が付くものである。

13～15は木製品である。13は断面が梢円形の棒状木製品で、先端には刃部を装着したとみられる切り込みがあり、鎌などの柄と考えられる。14・15は板状の木製品で、長梢円形の穿孔を持つものである。14は図の手前側で厚みが小さくなるように加工されている。



第44図 6区⑥ II層出土遺物



第45図 6区⑥III層出土遺物

4. IV層～V層上面の調査

IV層では弥生時代後期末頃を中心とする遺物が多量に出土している。また、この層を掘削中に建物跡の柱根も検出しており、IV層中から遺構の掘り込みがなされたと考えられるが、遺構埋土と基盤層の判別は困難であり、ほとんどの遺構はV層上面で検出している。

(1) 検出遺構

IV層掘削中からV層上面で検出した遺構は、掘立柱建物跡5棟、溝、土坑などがあり、このほか土器が集中して出土した地点を土器群とし、その出土状態を記録している。

①掘立柱建物跡

SB01（第47～51図）

検出状況 東調査区の北西隅付近、J9・J10グリッドに位置する。IV層掘削中に6本の柱根を検出しており、この段階では柱1と柱4を結ぶライン（第47図C-C'）に東調査区の西壁があった。遺構の掘り込み面を確認するため、柱を結ぶかたちで土層観察用のベルトを残しながらIV層を掘り下げ、V層上面で平面的に柱掘り方の検出を行った。また、調査区西壁で建物跡の掘り込み面を確認した後に、西側に調査区を拡張し、建物跡全体を検出することとした。土層の記録後、土層ベルトを取り外して遺構埋土の掘削を行ったが、湧水が著しく、土層を記録する以前に一部の土層ベルトが崩れたり、遺構の底面が確認できなくなったりしている。柱根に伴い礎盤が検出されたため、遺構の掘削と並行しながらこれらの記録をした。

柱の掘り方は、土層断面の観察からIV層の途中から掘り込まれていることが明らかになった。第47図C-C'の土層でみると、掘り込みは17層上面からはじまっており、この標高は2.2mである。これに対し、柱根上端の標高は2.35～2.5mで、掘り込み面よりもかなり高いことから、建物の構築・廃絶からそれほど間を置かないうちに新たな堆積があったものと推測する。なお、後述するが、SB01の北側にある土器群1の検出面は標高約2.4mで、柱根上端の標高とほぼ等しい。

IV層掘削中に北掘り方に切られた焼土面を検出している。このことからSB01以前にも何らかの人間の活動があったことが分かる。

規模と形状 梁行き1間（2.5m）×桁行き2間（5.3m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はN-73°Eである。建物の桁行きに沿って2条の溝状の柱掘り方を持つ布垣建物跡である。北掘り方は長さ6.9m、幅1.3～1.7mで、南掘り方は長さ7.3m、幅1.2～1.8mであった。掘り方底面は湧水のため確認できなかったが、それぞれ深さ0.6～0.7m程度であったと推測される。

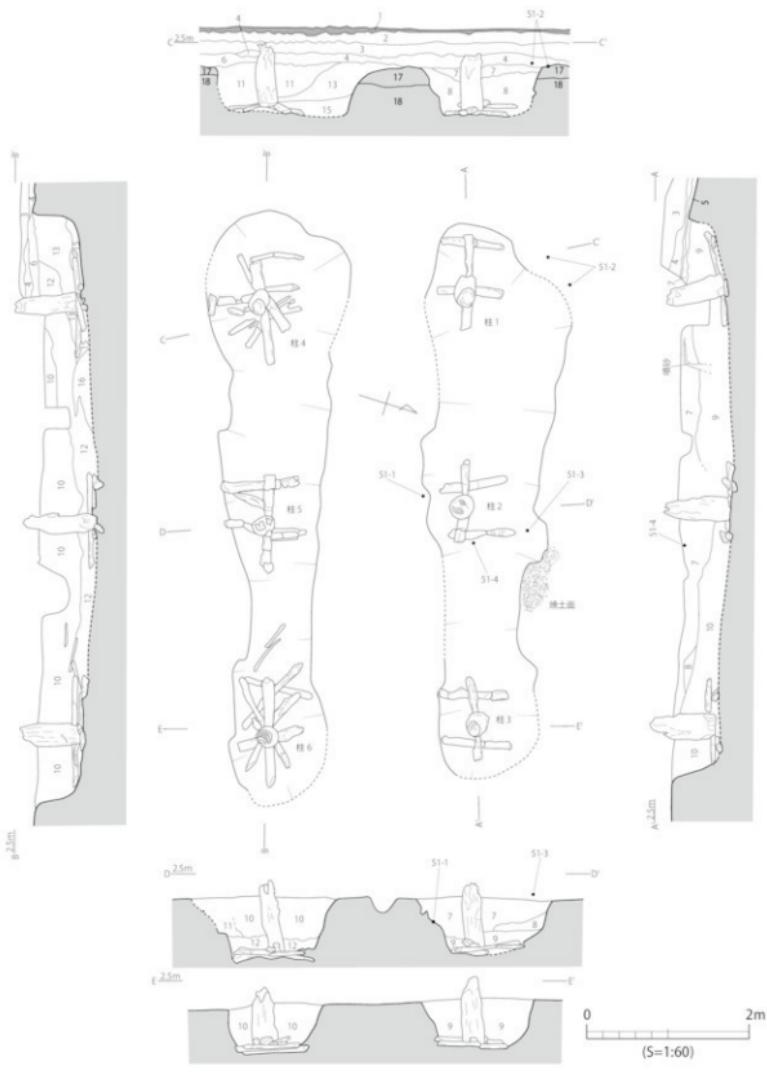
柱根・礎盤（第48～50図） 柱根は6本すべてが残存しており、それぞれ下部に建物の沈下を防ぐため礎盤を伴っていた。柱根はいずれも下部に抉りが入っており、そこに棒状の礎盤材を横方向に（掘り方の長軸方向に合わせて）組み合わせており（この材を以下、横木と呼ぶ）、さらにその下には枕木状の木材（以下、枕木と呼ぶ）を敷いている。枕木は、柱1～3・5は横木に対して垂直方向に配置し、全体としてH字状になるようにしているが、柱4・6は横木に対して斜め方向に、柱根を中心にして放射状になるように敷かれていた。

柱1は東側にかなり傾いており、柱6もやや東に傾くが、他の柱はほぼ直立していた。

柱根は（第49・50図）はいずれもカヤ属の芯持材を用いており、残存長が67.5～90cm、直径が22～30cm超とかなり大型のものである。側面は手斧により面取りされており、下面には縦斧によるものとみられる工具痕が、礎盤と組み合わせた抉り部にはノミ状の工具痕が残る。2・5・

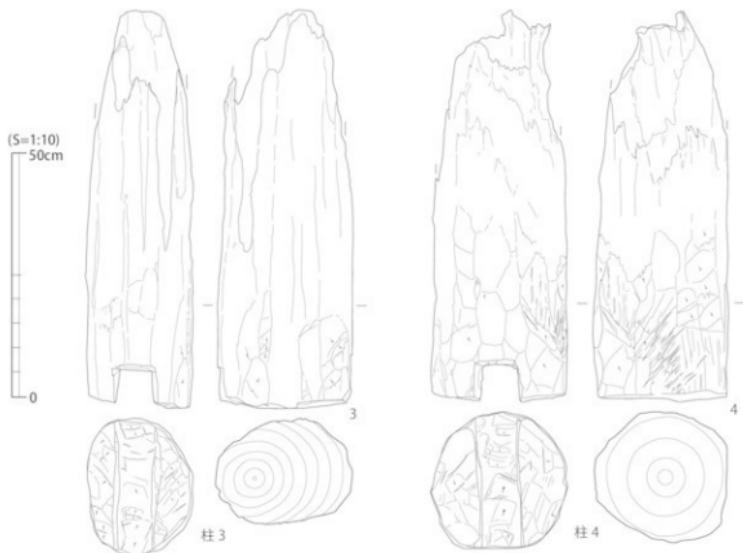
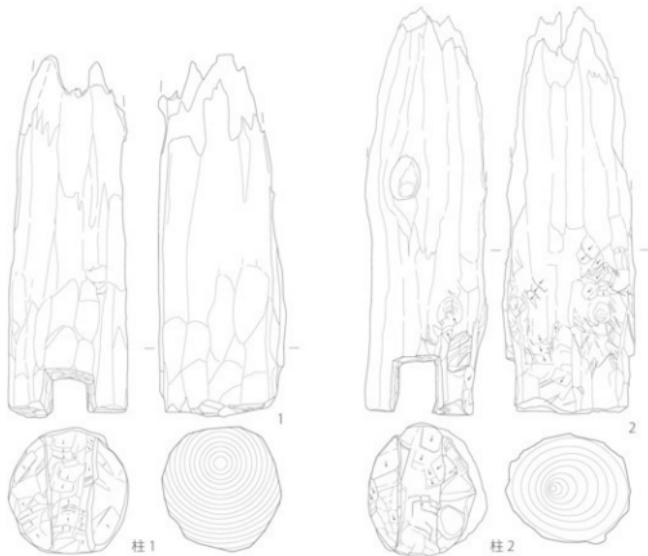


第 46 図 6 区 ⑥ V 層上面検出遺構図

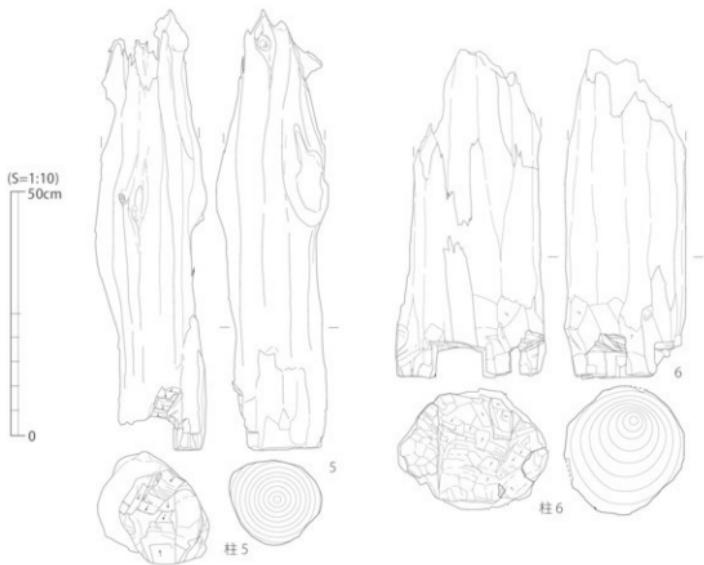


- 1 黑褐色細粒土 10YR3/1 基本層Ⅱ層
 2 黑黃褐色細粒土 10YR4/2 1cm以下の黄白色粒を含む。基本層ⅡⅢ層
 3 黑褐色細粒土 10YR3/1 黄色が黄白色に書き替わる。やや淀じる。基本層ⅢⅣ層
 4 棒状根付粘土 23Y4/2 黄色が黄白色に書き替わる。もしくは下層との間に薄い分離層がある。基本層ⅣⅤ層
 5 黑褐色砂 25Y6/2 基本層ⅤⅥ層
 6 黑褐色粘土質土 23Y4/1 基本層ⅥⅦ層
 7 黑褐色粘土質土 23Y3/1 黑褐色細粒が少し入る。
 8 黑褐色粘土質土 23Y3/1 にロック状の灰黑色鉄錆が多く混じた層。
 9 黑褐色粘土質土 23Y4/1 黑褐色細粒がまだらに入る。シルト質の層。
- 10 黑黃褐色細粒土少し含む。
 11 黑褐色粘土質土 23Y2/1 砂を含まない。
 12 黑褐色細粒土 23Y2/1 从黄色地でかまだらに入る。(10より砂多く含む)
 13 黑褐色細粒土質土 10Y6/2 黑褐色細粒がブロック状に多く入り。(12より砂多く含む)
 14 黑褐色粘土 23Y2/2 黑褐色細粒質土が少し混じる。
 15 黑褐色粘土 23Y4/1
 16 黑褐色粘土質土 23Y4/2 黑褐色細粒が花崗岩上に混ざりあった層。
 17 黑褐色粘土 23Y2/1 基本層ⅣⅤ層
 18 黑褐色細粒土 5Y6/1 基本層ⅤⅥ層

第47図 6区⑥ SB01



第48図 6区⑥ SB01柱根(1)



第49図 6区⑥SB01柱根（2）

6には、柱の運搬時の縛掛け穴と考えられるものが残っており、それを切るかたちで抉りが彫り込まれている。

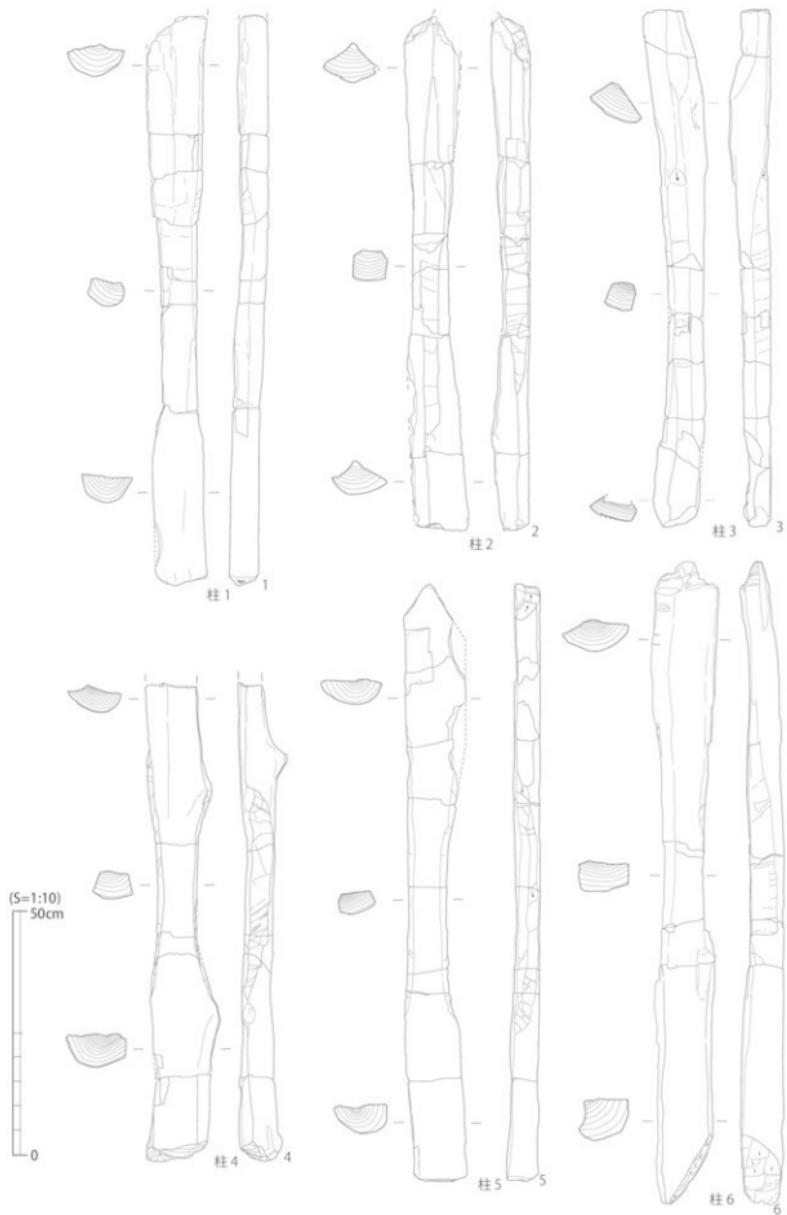
1・2・5・6は、木の節の方向から、枝が柱の上方から下方にのびていたこと、すなわち柱が本来の木の立ち方とは逆方向に立てられていたことが分かる。

横木（第50図）は、丸太状の木材を半截したもの（1・4～6）やミカン割りしたもの（2・3）が用いられている。上面を平坦にし、柱と組み合わせる中央部は側面も加工して、断面が方形になるようにしている。樹種は、1・4～6はアカガシ亜属、2はハンノキ属、3はシイノキ属である。

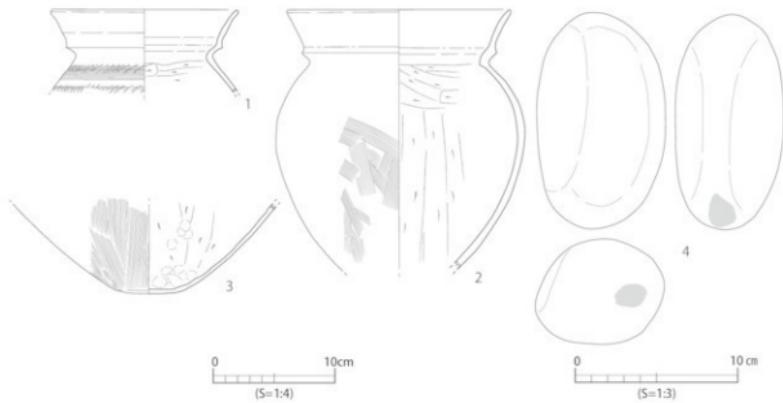
枕木には丸太状の材が多く見られ、特に目立った加工をしているものはなかった。

出土遺物（第51図） 1～3は古式土師器の甕である。1は北掘り方の埋土中で、第47図D-D'の土層ベルトから出土したものである。口縁部は緩やかに外反し、端部が丸く收められ、肩部には貝殻刺突が密な間隔で巡る。2は北掘り方の北西の上端付近で、建物の掘り込み面とほぼ同じレベルで出土したものである。この遺構に直接伴うものではないかもしれないが、関連する遺物としてここに掲載した。口縁部はゆるく外反しながらび、端部はすばまり気味である。3は掘り方と重なる地点で出土したもので、掘り込み面のレベルと大差ないことから、掘り方埋土内の上部にあったものか、建物構築後でも間もない段階のものと考えられる。平底の甕で、外面は底面を含め全体にハケ目調整され、内面はケズリのち底部に指頭圧痕が入るものである。1～3はおおむね草田4期頃に位置付けられよう。

4は端部に水銀朱の付着した礎で、水銀朱の精製に用いた石杵の可能性もあるが、明確な使用



第50図 6区⑥SB01 磁盤材



第51図 6区⑥SB01出土遺物

痕は認められない。柱2付近の埋土上部で出土しており、建物構築時に地鎮等の祭祀行為で置かれたものかもしれない。

遺構の時期と性格 柱掘り方埋土や建物跡付近から出土した遺物から、建物の時期は弥生時代後期末頃と考えられる。なお、柱1 础盤材の放射性炭素年代測定では、補正¹⁴C年代で1,810±30yrBP（曆年較正年代で130AD～256AD、302AD～316AD）という結果が得られている。

この建物跡は、かなり太い柱を持つこと、建物の沈下を防ぐために礎盤を設けていることに特徴を持つ。こうした構造は、建物そのものに加えて、建物内部の積載物の負荷に対する耐久性を意図したものであろう。こうした点から、建物は倉庫として機能したものと推測する。

建物の上部構造については、通柱式の建物ではなく、束柱式の建物の可能性が高いと考える。

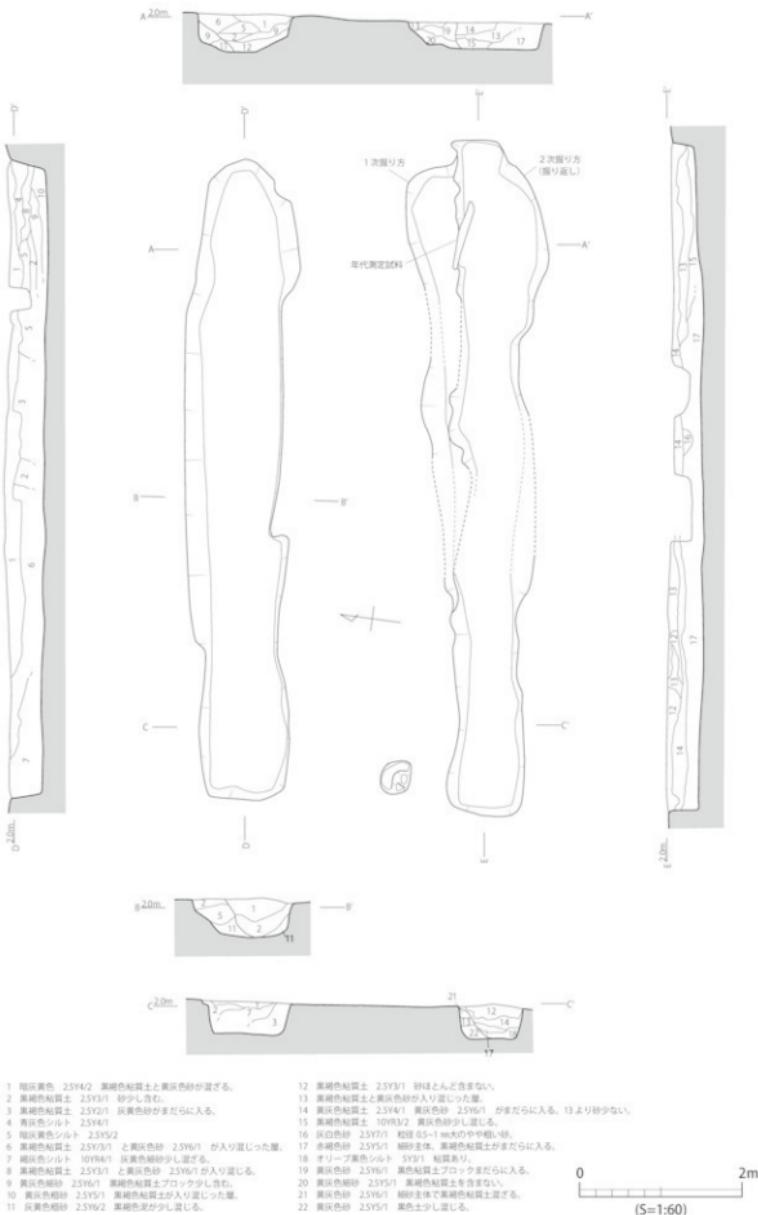
その理由の1つは、西側の柱1・4は傾いた状態で立っていたが、ほかの柱は直立していたことである。通柱式の建物の場合は地面から屋根まで柱が通り、他の材とも連結しているため、1本の柱が傾けば他の柱も連動して傾きが生ずると考えられる。しかし、束柱式の建物であれば、それぞれの柱は床までしかつながっておらず、しかも柱の長さに対し地下に埋まっている割合が大きいため、他の柱の影響は受けにくい。

もう1つの理由は、天地逆に柱材を用いたものがあることである。通柱式のものであれば、柱の基部と上端では太さの差が大きくなり、太い方が上になれば建物の重心はそれだけ不安定になる。これに対し束柱式の建物ならば、柱が短いため上下の太さの違いはさほど大きくなく、通柱式ほど問題にはならないであろう。

なお、この建物跡の柱根はすべてカヤ属のものである。全ての柱で同一樹種が用いられるのは珍しいこととされ、建物の構造だけでなく、用材にも特殊性が認められる。こうした点から、この建物が通常の掘立柱建物とは異なる特殊な性格を持つものであったことも想定される。

SB02（第52・53図）

検出状況 調査区東側のJ 11・K 11グリッドに位置し、SB01から約4m東にある。V層上面で布掘建物跡の柱掘り方を検出したが、本来の掘り込み面はこれより高い位置にあった可能性が



第 52 図 6 区⑥ SB02

ある。土層ベルトを残しながら埋土の掘削をしたが、湧水が激しく、部分的に遺構を断ち割つて排水溝を掘ったが、それでも水は抜けなかつた。南北の掘り方とも土層観察用の壁面が崩れたために、縦断下部の土層は記録できなかつた。

規模と形状 建物の桁行きに沿つて2条の溝状の柱掘り方を持つ布掘建物跡で、主軸方向はN-81.5°-Eである。北掘り方は長さ7.9m、幅1.1m、深さ0.4mで、南掘り方は長さ8.3m、幅0.8~1.7mの規模を持ち、両掘り方の中軸線の間隔から推定される梁行きは2.9mである。

横断の土層断面から、南北両方の掘り方で、掘り直しがされていたことが分かる。南掘り方では、北半分の埋土を若干掘り下げた段階で、掘り直しの跡（2次掘り方）を平面的に検出することができた。南北いずれの掘り方においても、柱根や礎盤など柱痕跡は確認していないが、掘り直しの際に抜き取られた可能性が高いと考える。

出土遺物（第53図） 1~3は板状の木製品で、いずれも片側の端部が楔状に狭まるかたちに加工されている。1・2は南掘り方から、3は北掘り方から出土した。

遺構の時期と性格 時期を特定できる遺物を作わないため不明確であるが、調査区内における遺物の出土状況から、弥生時代後期末頃のものと考える。なお、南掘り方の検出面で出土した木片について放射性炭素年代測定を実施しており、補正¹⁴C年代で1,840±40yrBP（曆年較正年代で85AD~244AD）というデータが得られた。

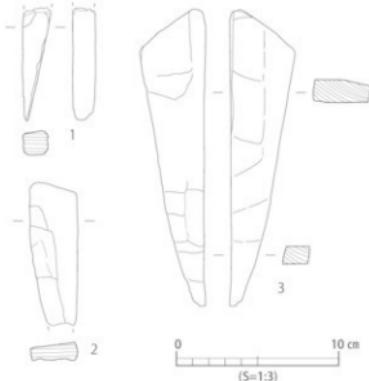
遺構の性格については、掘り方からみて、SB01と同規模かもしくはそれよりもやや大型の布掘建物であり、倉庫として機能したものと考えられるが、特殊な性格の建物であったという可能性も想定もできる。

SB03・SK23（第54・55図）

検出状況 調査区のほぼ中央、I 9グリッドに位置する。IV層掘削中に柱1~4の柱根上部を検出した。この段階では柱穴が認識できなかったため、柱根を結ぶかたちで土層観察用のベルトを設定し、柱穴が平面的に検出できるまで掘り下げることとした。この過程で、土層ベルトの東側の延長上で柱5・6があることが分かり、柱5について柱根が残っていること、柱穴が建物跡とは別に存在した土坑（SK23）を切っていることが確認できた。柱穴の平面形はV層上面で検出した。柱穴の土層を記録した後、土層ベルトを取りはずして柱穴を完掘し、柱根を取り上げた。

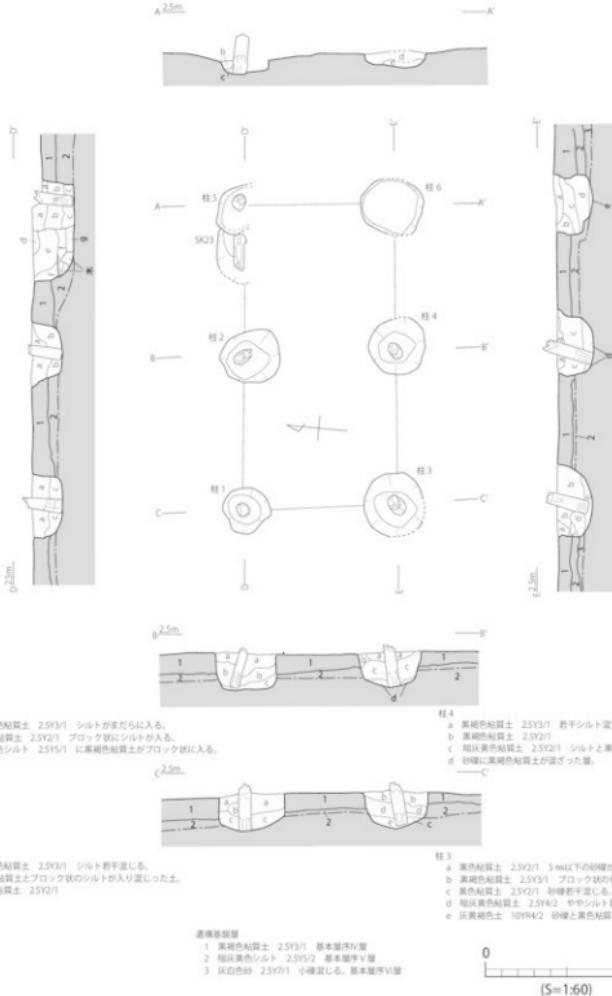
規模と形状 梁行き1間（1.9m）×桁行き2間（3.8m）の掘立柱建物跡で、主軸方向はN-85°-Eである。柱穴は平面形が円形もしくは梢円形のもので、直径約0.6~0.8mの規模を持つ。土層ベルト上面（標高2.25~2.2m）よりも高い位置から掘り込まれており、深さは少なくとも0.35~0.5m程度はあったことが分かる。

柱根 柱1~5は柱根を伴っていたが、柱6では柱根が認められず、抜き取られた可能性が高い。なお、いずれの柱穴においても、礎盤やその痕跡は確認できなかつた。

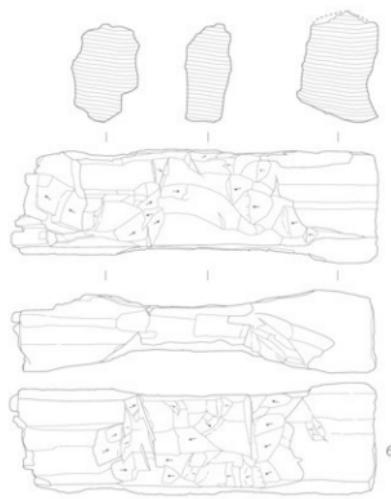
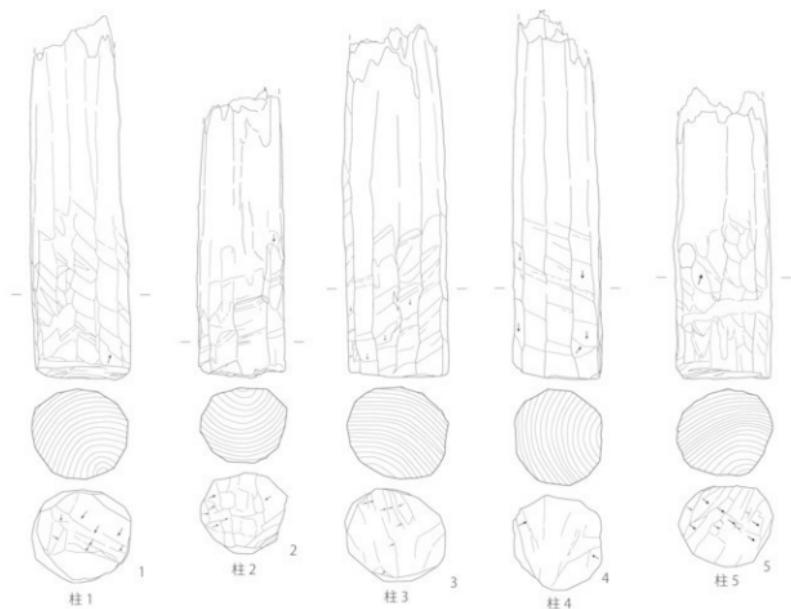


第53図 6区⑥ SB02 出土遺物

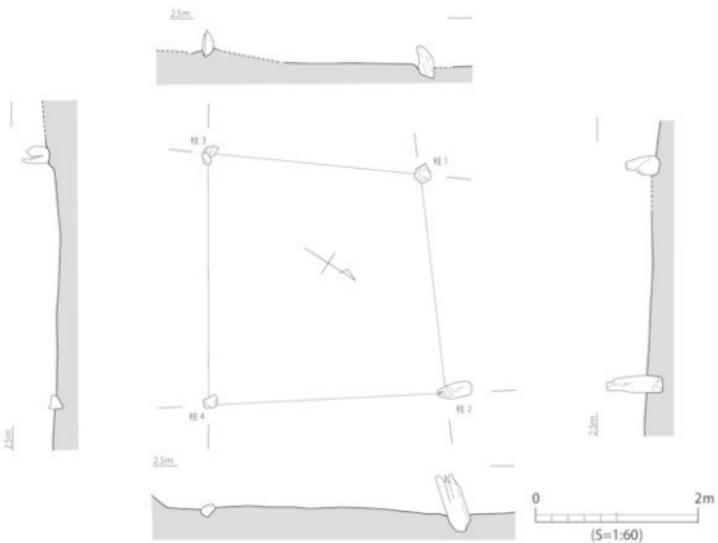
- 柱5・SG2
 a 黒褐色粘質土 2.5Y3/1 黄灰色シルト若干混ざる。
 b 黒褐色粘質土と黄灰色シルトが入り混じった層。
 c 黑褐色粘質土 2.5Y2/1
 d 黑褐色粘質土 2.5Y4/1 下面に泥が混入する。
 e 黄灰色粘質土 2.5Y4/1 シルト・砂が混ざり合う。
 f 雨刷リーフ粘質土 2.5Y3/1
 g 黑褐色粘質土 2.5Y3/2 シルトが混ざる。



第 54 図 6 区⑥ SB03



第55図 6区⑥ SB03 柱根、SK23 出土遺物



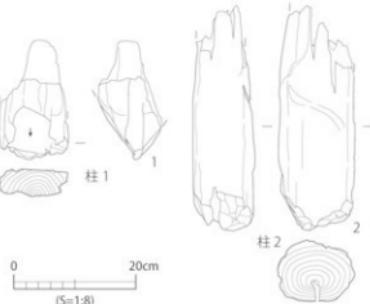
第56図 6区⑥SB04

柱根は、残存長が45.5～60.0cm、太さが直径13～16cmのもので、いずれもスギ材を用いている。大径の丸太材を4つ程度に分割し、それらの断面が円形に近いかたちになるように整形して、柱の加工がなされている。側面は手斧によって面取りされており、下面には縦斧によるものとみられる工具痕が残る。

遺構の時期と性格 時期を示すような遺物を伴わないため、不明確であるが、調査区内における遺物の出土状況などから弥生時代後半頃のものと推測する。SB03の主軸方向は、約2m北側にある弥生時代後半頃の溝、SD01とほぼ平行しており、両者が同時期に存在した可能性も考えられる。なお、柱3柱根の放射性炭素年代測定では、補正¹⁴C年代で1,940±40（歴年較正年代で3AD～129AD）というデータが得られている。遺構の性格は、1間×2間の掘立柱建物跡ということから倉庫跡と推測する。

SK23 SB03柱5の柱穴に東側を切られており、南側は土層確認のために掘ったサブトレンチで失われている。現状で確認できる規模は東西0.6m、深さ0.5mである。埋土は粘質土と砂やシルトが混ざり合ったもので、人為的に埋め戻されたようである。遺構の底面から、上下面の中央を窪ませるように加工した木製品（第55図6）が出土した。全体的に粗く加工痕が残るもので、何

3 分析した柱根は、樹木の外縁部が加工で削かれている。建物の年代はこの測定結果よりも新しく考えるべきであろう。



第57図 6区⑥SB04柱根

かの未成品の可能性がある。

SB04（第 56・57 図）

検出状況 調査区の北西隅、I 6 グリッドに位置する。V 層上面で 4 本の柱根を検出した。なお、柱の周囲の精査を行うとともに、柱根に沿って断ち割りを入れて柱穴の検出を試みたが、確認できなかった。柱がちょうど収まる大きさに柱穴が掘られたのか、柱は柱穴を伴わず上方から打ち込んで立てられたものと考える。

規模と形状 1 間四方の建物跡で、柱間距離は、柱 1・柱 2 が 1.35m、柱 2・柱 4 が 1.5m、柱 4・柱 3 が 1.5m、柱 3・柱 1 が 1.5m で、平面形は不整形になる。主軸方向は N -58° - E である。

柱根（第 57 図） 4 本の柱根を確認したが、全体として腐蝕が著しく、柱 1・2 のみ実測した。1 は残存長が 19.2cm、太さ 11.2cm で、下端は表裏両面から切り込まれており、側面形は合掌形を呈している。2 は残存長が 36.8cm、太さ 12.5cm で、こちらも下端部が合掌形に加工されている。柱材の樹種は、柱 1・3・4 はシノキ属、柱 2 はクワ属が用いられている。

遺構の時期と性格 時期の特定できる遺物を伴わないため、不明確であるが、調査区における遺物出土状況から弥生時代後期末頃のものと推測する。なお、柱 2 柱根の放射性炭素年代測定では、補正¹⁴C 年代で 1,700 ± 30（暦年較正年代で 256AD ~ 303AD、313AD ~ 415AD）というデータが得られている。

遺構の性格については、1 間四方の建物跡であることから、竪穴建物もしくは平地式建物の可能性も想定されるが、そういったものとしては柱間距離が狭い感がする。小屋や物置のような建物と考えるのが妥当かもしれない。

SB05（第 58 ~ 60 図）

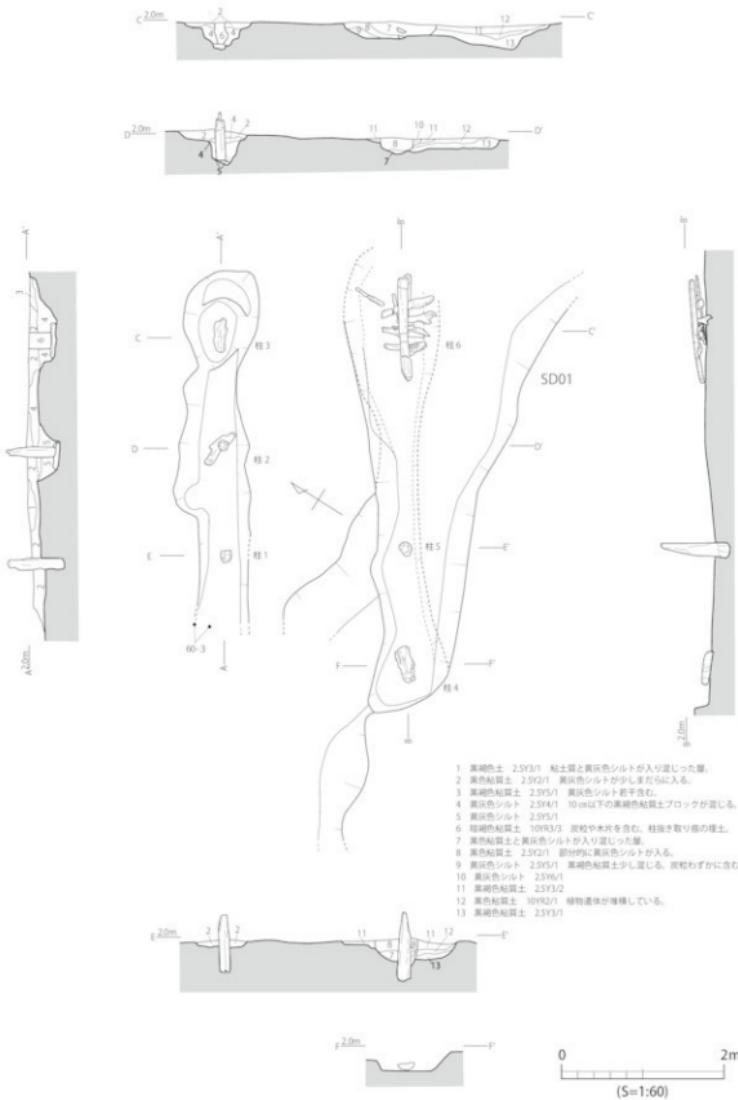
検出状況 調査区のほぼ中央、J 9 グリッドに位置する。この遺構の東には SB01 が、南には SB03 が存在する。

V 層掘削中に柱 1・2・5 の柱根上部を確認しているが、この段階では建物跡との確証を持つおらず、V 層上面で柱掘り方の検出作業を行った。北側では柱 1・2 を伴う溝状の掘り方が確認できたが、南側では柱掘り方が SD01 と重複しており、平面的には両者の埋土が判別できなかつたため、土層観察用のベルトを残しながらこれらの遺構埋土を掘削した。土層から、SB05 の南掘り方は SD01 の埋土を切るかたちで掘り込まれていること、すなわち SB05 は SD01 よりも新しいことが確認できた。

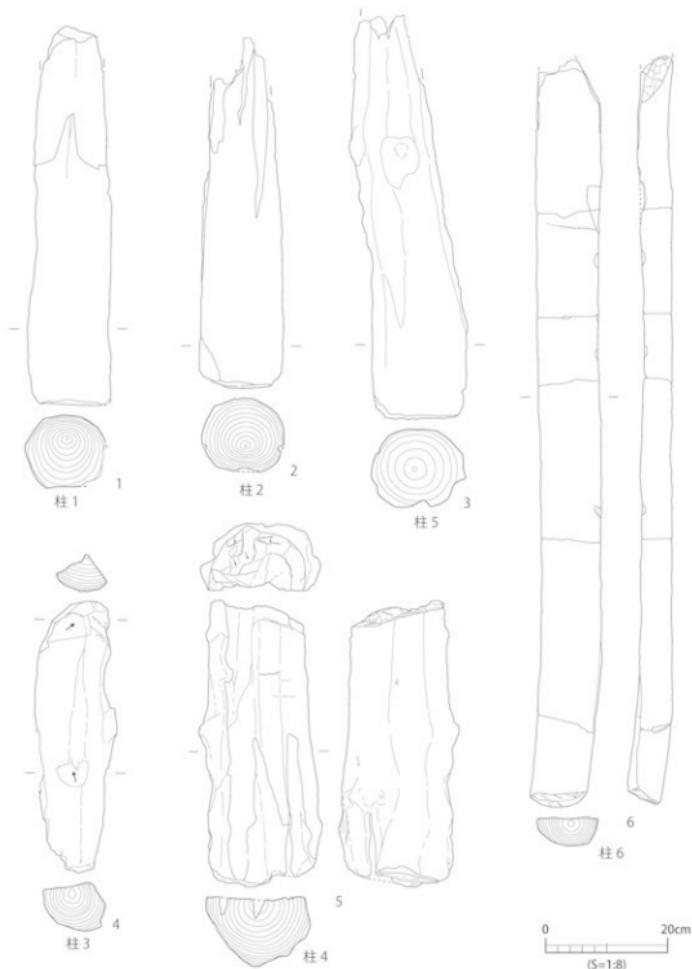
掘り方の発掘過程で、北掘り方では柱 1~3、南掘り方では柱 4~6 の柱根や礎盤を伴うことが明らかになった。柱 2 との対応から、本来は柱 5 と柱 6 の中間にも柱が存在したと考えられるが、柱根や礎盤等の柱の痕跡は確認しておらず、抜き取られた可能性が高い。

なお、北掘り方の西端は検出以前に排水溝を掘っていたため確認できなかった。排水溝掘削時に板状の木製品（第 60 図 3）が出土しており、礎盤であった可能性も考えられるが、おおよその地点を計測するのみで取り上げてしまった。また、南掘り方については SD01 との重複や調査時の掘りすぎのために正確な形状を把握することができなかった。

規模と形状 衍行きに沿って 2 条の溝状の掘り方を持つ布掘建物跡で、現状の柱配置から推定される建物の規模は、梁行き 1 間 (2.2m) × 衍行き 3 間 (4.0m) である。主軸は N -56.5° - E を向く。北掘り方は長さが 4.3m 以上で、幅は 0.9m、南掘り方は長さ 8m 以上で、幅 1.1m である。



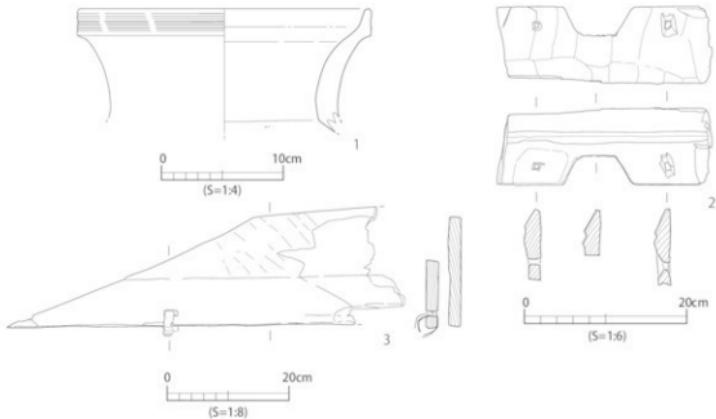
第 58 図 6 区⑥ SB05



第59図 6区⑥SB05柱根・礎盤材

柱根・礎盤（第59図） 柱1・5には柱根が、柱2には柱根と礎盤が、柱4・6には礎盤のみが残存していた。柱2・3は掘り方底面よりも一段深く掘り込んだ位置に礎盤が設置されており、柱1・5については柱根の下面が周囲よりも低い位置にあったが、平面や土層では明確な掘り込みを認識できなかった。

柱根は、残存長が57.5～66.0cm、太さは13～16cmのもので、材は柱1はカキノキ属、柱2・5はクスノキ属のものが用いられている。風化・腐蝕のためか加工痕はほとんど見られない。柱3は節の方向から本来の天地とは逆方向に柱が立てられていたことが分かる。



第60図 6区⑥ SB05出土遺物

礎盤は、丸太状の材を半裁もしくはミカン割りしたものを柱の下に敷いたもので、柱2～4では礎盤材を1つだけ置いているのに対し、柱6では細長い半裁材の下に横方向に枕木状の材を敷き、さらにその下に縦方向に棒状の材を敷いていた。礎盤材の樹種は、柱2・3はクワ属、柱4はエノキ属、柱6の上部の材（第59図6）はハンノキ属である。

出土遺物（第60図） 1は弥生土器の壺で、南掘り方から出土した。V-1様式のもので、建物跡に伴うものではなく、掘り方の掘削・埋め戻し時に混入したものであろう。

2は板状の木製品で、南掘り方から出土した。片側の長側縁に台形状の抉りが入り、左右両側に方形の孔が穿たれている。3は、北掘り方の西端にあたる部分で出土したもので、礎盤材として使用された可能性もある。左側縁が上下側縁に対し大きく斜行しており、本来は建物妻側の壁板材に用いられたものと推測する。下側縁側に長方形の孔が穿たれ、桜の樹皮が通っている。また、左側縁の下側にも抉りがあり、ここに樹皮等を巻き他の材とつなぎ合わせたのである。

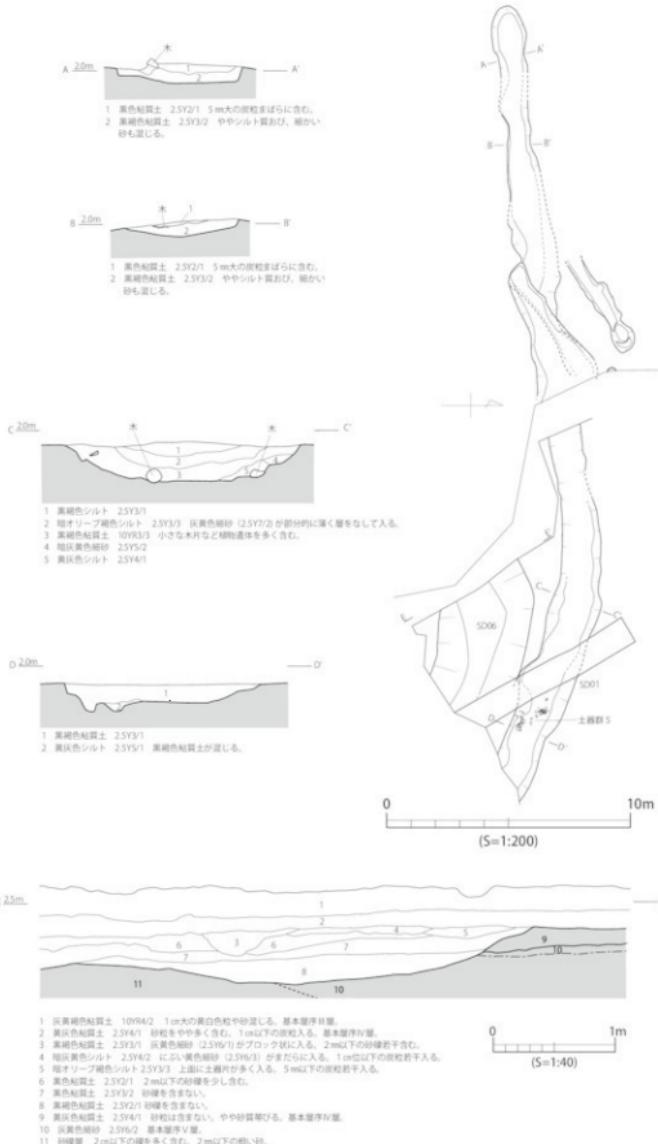
遺構の時期と性格 切り合い関係からSD01よりは新しい遺構であることが分かる。このほかに時期を示す遺物がないため、不明確であるが、調査区内の遺物出土状況や遺構配置から弥生時代後期末頃のものと考える。なお、柱6礎盤材の放射性炭素年代測定では、補正¹⁴C年代で1,880土30（曆年較正年代で70AD～220AD）というデータが得られている。

遺構の性格は、規模や形状、それに礎盤を伴う点から、倉庫跡とみるのが妥当であろう。なお、天地が逆方向に立てられた柱があることから、東柱式の建物であった可能性が高いと考える。

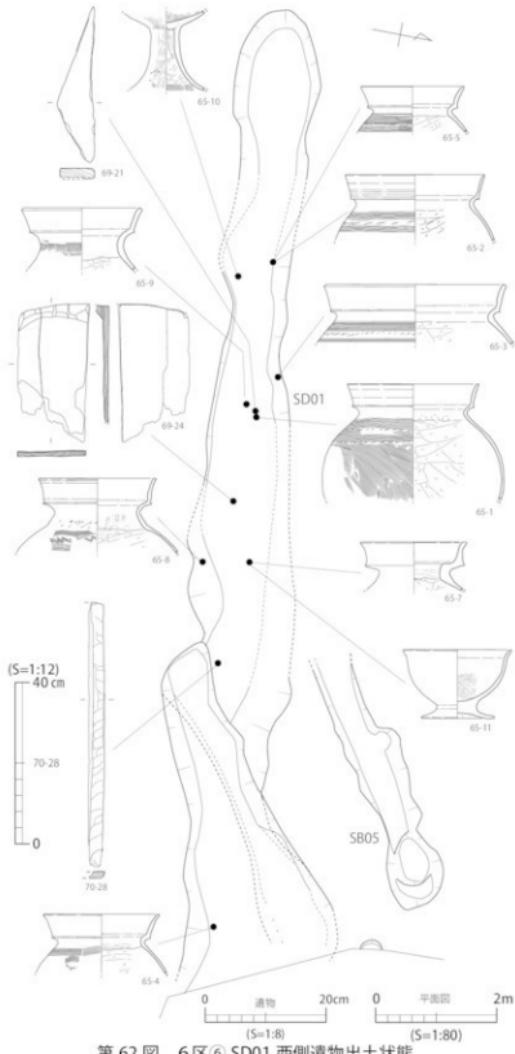
②溝

SD01（第61～71図）

検出状況と規模・形状 調査区のほぼ中央に位置し、西はI8・J8グリッドからはじまって東北東方向へ直線的にのび、J10グリッドで東南東方向に曲がって、調査区外へ続いている。SB05の南掘り方に切られている。平面形はV層上面で検出したが、本来の掘り込み面はこれよりも高くなる可能性もある。なお、IV層掘削中にSD01と重複する位置で土器群5が出土しており、検出レベルは異なるがこの遺構に伴うものかもしれない。



第61図 6区⑥ SD01・06



第 62 図 6区⑥ SD01 西側遺物出土状態

1～11は古式土師器で、このうち埋土中に伴うものは1・4・6・7・11で、4・6は標高1.8m～1.9mのレベルで、1・7・11は検出面とほぼ同じ高さで出土している。他はSD01と重複する位置で、遺構検出面よりも高いレベルで出土したものであるが、遺構に伴う可能性があると考え、ここに図示した。

1～6は甕で、1は口縁端部にゆるい面を持つもの、2は口縁端部が丸みを持つもの、3は大

現状で確認できた長さは約32mで、幅は0.9～2mである。底面の標高は第61図A-A'及びB-B'で1.9m、C-C'で1.6m、D-D'で1.7mと全体的に東に向かって深くなる傾向がみてとれる。

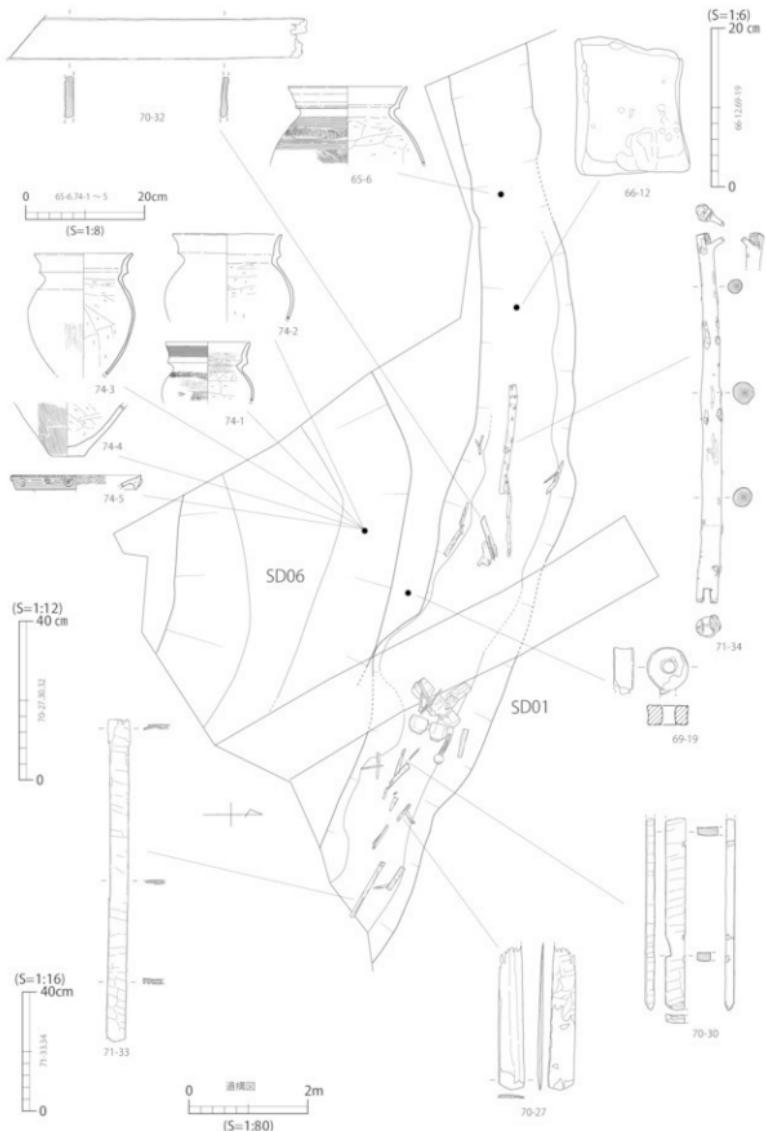
なお、東側調査区の西壁付近は湧水がはげしく底面が確認できなかった。また、西側調査区でSB05よりも西側では、遺構検出以前に排水溝を掘ったため遺構の残存していない部分もある。

木器未成品集積地点(第64図)

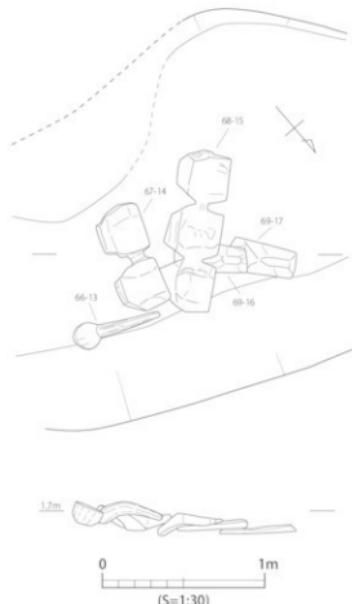
SD11の東側、J10グリッドの南東隅にあたる地点で、溝底面から木器が1か所でまとまって出土した。これらはいずれも未完成品で、内訳は約子1点、泥除2点、鍤2点で、泥除は2連作のものと3連作のものがあった。木器下面の標高は1.55mで、周囲の底面と比べて低いことから、溝底をさらに掘り窪め、そこに製作途中の木器を水漬状態にして保管していたと推測される。遺物の詳細については後述する。

出土遺物(第62～71図)

古式土師器、石製品、木製品が出土している。



第63図 6区⑥ SD01 東側・SD06 遺物出土状態



第64図 6区⑥ SD01 木器未成品出土状態

め方向に柄がつく。身の外形は楕形に加工されているが、内側の削り込みはされず、上面は平坦である。柄は弧状の側面形を持ち、断面形は加工途中で面取りされたままの状態である。樹種はヤマグワである。14・15は泥除の未成品で、14は2連作、15は3連作のものである。上部が台形状につくられ、背面がくの字形、腹面はノ字状の断面形を持つ。背面の広い面は周囲から中央へ削り込まれ、腹面は中央から左右に削るかたちで加工されている。樹種はアカガシ亜属である。『木器集成図録』(奈良国立文化財研究所 1993)の泥除IV式に相当するものであろう。16・17は直柄鍼の未成品で、平面形は、下端に向かって少し広がるがほぼ縦長の長方形である。一方の面は平坦で、もう一方の面は上部の中央が緩やかに隆起している。樹種はアカガシ亜属である。

18・22は楔状の木製品で、18は方柱状、22は板状の断面形を持つ。19は、中央に孔のある円形の頭部に棒状部が取り付くものとみられる。山持遺跡 Vol. 1 で類似したものが報告されている。樹種はシイ属である。20は刀形の木製品で、切先状の先端は刃部を意識したかのように削りが入れられている。23・24は容器の底板とみられるもので、24には下面の外周に高台状の突出が付く。材は、23はヒノキが、24はスギが用いられている。25は上面の両端部付近に紐かけ状の抉りが入り、下面是平坦に仕上げられており、緊縛具とされるものである。樹種はスギである。26～30・33は板状の木製品である。26は下端が斜め方向に切断された面を持ち、27は下端を刃のように薄く尖らせている。29は欠損しているため不明確であるが、両端に小さな抉り、もしくは穿孔があるように見える。30は下端の側面形が合掌形になるもので、一方の長側面に

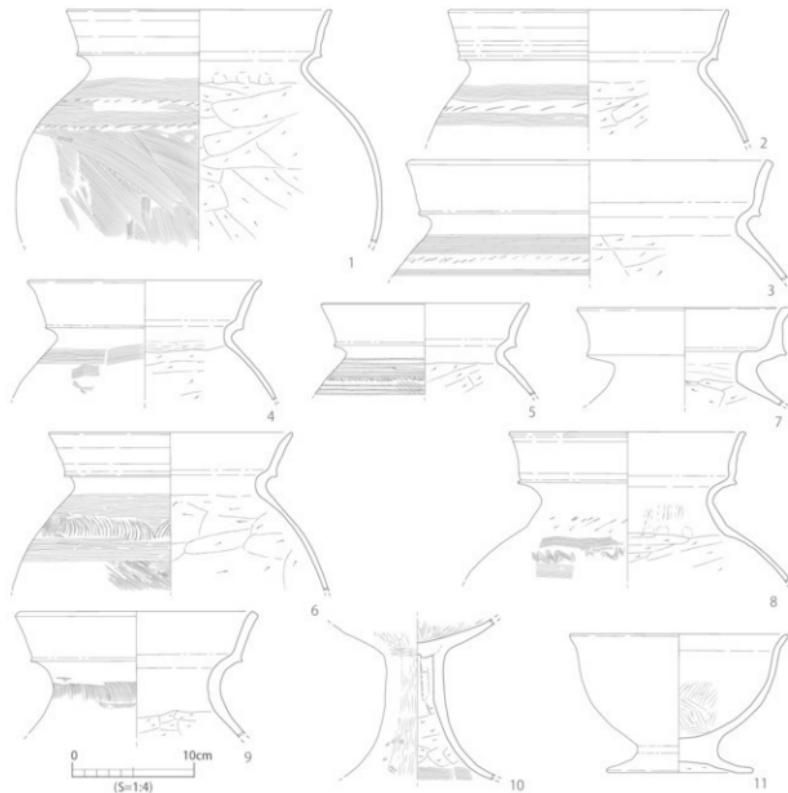
型で口縁部に面を持つもの、4～6は口縁部が外反し、端部がすぼまるものである。7～9は壺で、7は口縁部が厚みを持ち外反するもの、8は口縁端部が引き出されたもの、9は全体的に厚手で、口縁端部に面を持つものである。10は高环で、环部と脚部の接合は円盤充填技法でなされている。11は脚付鉢で、口縁部はやや外反している。

これらの時期については、4～7は草田4期、2は草田5期、1は草田5～6期、8は草田6期に属し、9は草田7期まで下る可能性がある。

12は砥石で、溝のほぼ底面に近いレベルで出土している。図上側を除く5面は砥面である。表面に見られる丸いくぼみは海生生物の棲痕とみられ、石材は海岸部から搬入されたものと推測される。

13～34は木製品である。19は遺構検出面より若干高いレベルで、SD01 から若干それた地点で出土したものであるが、この遺構に伴う可能性があるものとして図示した。その他のものは、埋土中から底面にかけて出土している。

13～17は前述した木器未成品集積地点から出土したものである。13は杓子の未成品で、身から斜



第65図 6区⑥ SD01出土遺物（1）

は抉りが入る。もう一方の側面は破面のようであるが、穿孔もしくは抉りの痕が3か所に見られる。31は丸太状の材を先端に向かって細くなるように加工したもので、杭の可能性があるが、上部と先端は欠損している。32は上下の側縁に対し左側縁が斜行する板状の木製品で、建物の妻壁板の可能性がある。34は柱材で、溝のほぼ底面で出土したものである。上端は二股に分かれしており、ここで桁材を受けたと考えられる。下端は方形の抉りが入っているが、これは礎盤材との組み合わせを意図したものであろう。全体的に風化があまり見られないことから、掘立柱建物ではなく、平地式建物や竪穴建物など屋内の柱として用いられた可能性が高いと考えられる。

土器群5（第72・73図） IV層掘削中にSD01の東側と重複する地点で古式土師器がまとった状態で出土しており、これらを土器群5として記録して、取り上げた。土器は東西1.8m、南北0.75mの範囲に分布しており、検出面の標高は約2.2mで、SD01のそれよりも0.3～0.4m程度高い位置にある。

1～4は甕で、1は底部が平底で、口縁端部は丸みを持つもの、2は口縁端部が先すぼまりに

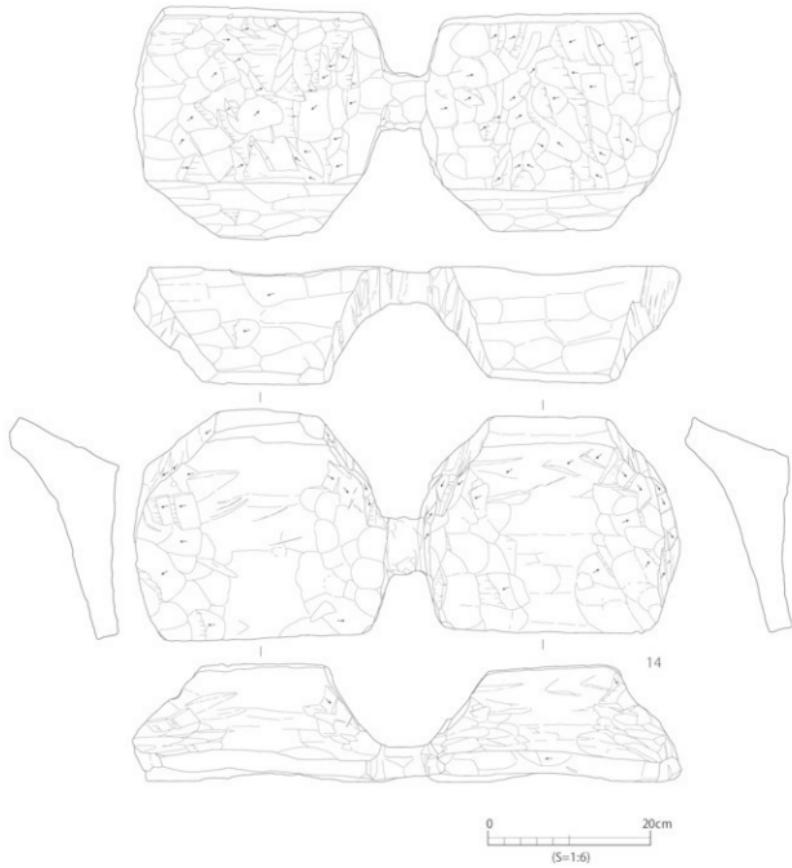


0 10 cm
(S=1:3)



0 20cm
(S=1:6)

第66図 6区⑥ SD01出土遺物（2）

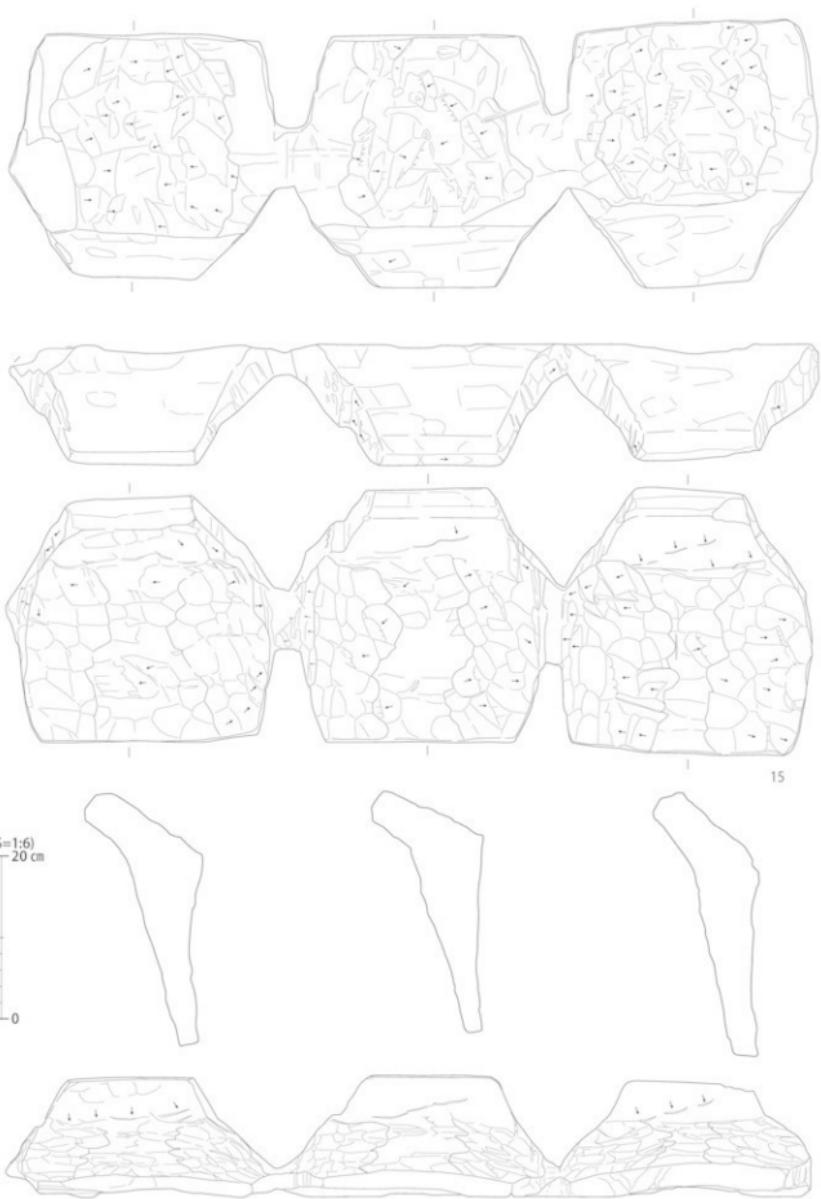


第67図 6区⑥ SD01出土遺物（3）

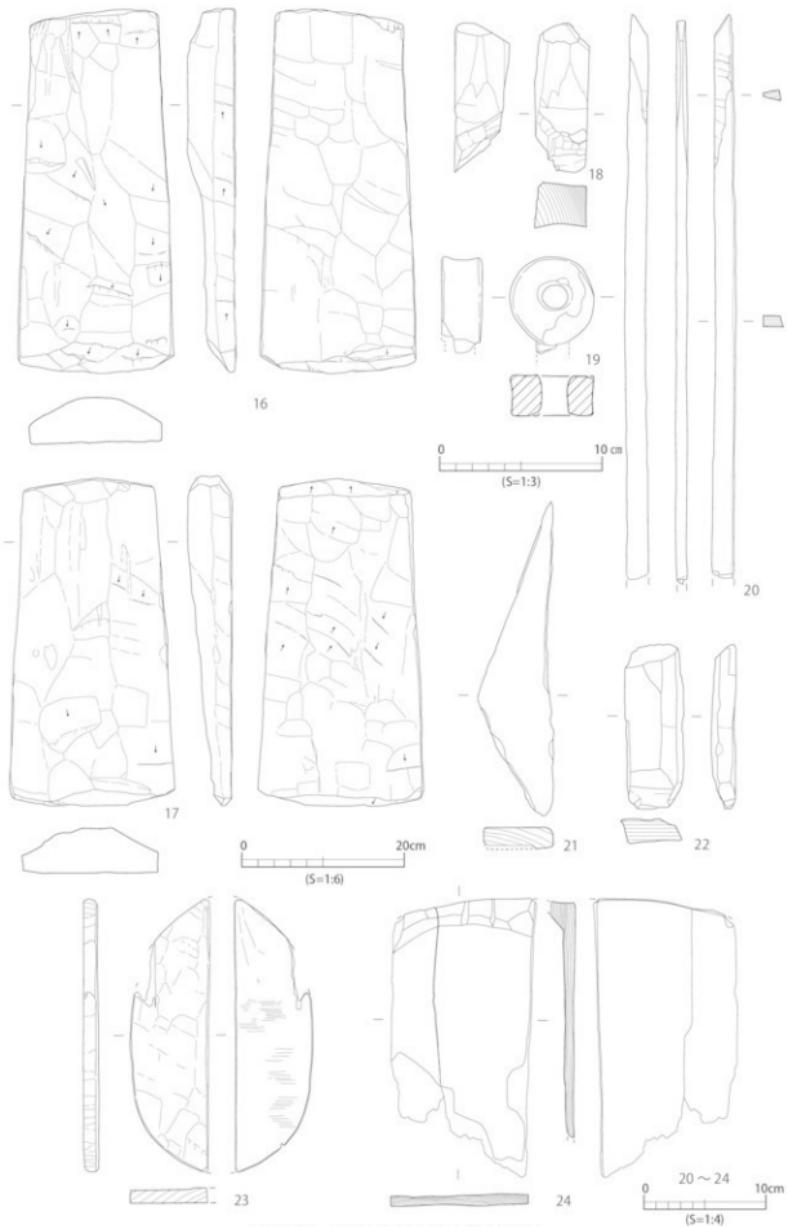
なるもの、3は口縁端部が外側に面を持つもの、4は口縁部が強く外反し、口縁段部の稜は斜め下方に突出する。5は壺で、口縁端部は外側に向けて面を持つ。6～8は低脚環で、6・7は環部が大きく広がるもの、8は口径の小さいものである。6・7は外面に煤が付着しており、蓋としても使用されたようである。

遺物の時期は、2・4は草田4期、1は草田5期、3・5は草田6期とばらつきがあり、これらは一括性を持つものではなく、偶然近くに廃棄されたということも考えられる。

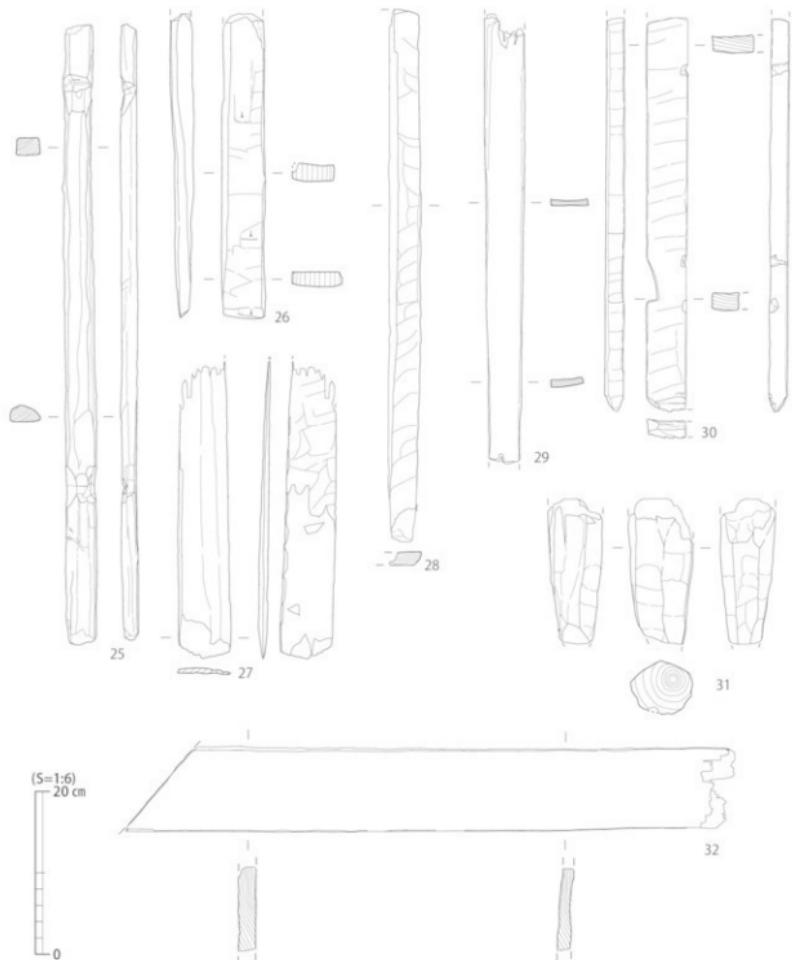
遺構の時期と性格 SD01の時期は、出土遺物から弥生時代後期末頃と考えられる。検出面よりも低いレベルでは草田4期の土器が出土し、検出面よりも上部で出土したものや土器群5には草田6期のものが含まれていることからすると、草田4期に掘削され、6期頃に埋没したという推測



第68図 6区⑥ SD01出土遺物（4）



第69図 6区⑥ SD01出土遺物（5）



第 70 図 6 区⑥ SD01 出土遺物（6）

することも可能であろう。なお、溝の埋土中から採取した植物種子について放射性炭素年代測定を実施しており、補正¹⁴C 年代で $1,880 \pm 30$ （曆年較正年代で 70AD ~ 218AD）というデータが得られた。

この遺構の性格については、木器未成品を水漬にして保管していたことから、當時一定量の水を湛えていたもので、水路としての機能を想定できる。また、この溝の南北で遺構の分布状況が異なることから、集落内の区画も兼ねていたと考えられる。

SD06 (第 61・63・74 図)

検出状況と規模・形状 前半に発掘した調査区東側の南西隅で、I 10・J 10 グリッドに位置している。この地点は調査区の排土を搬出するためベルトコンベアの上台を設置していた部分で、東側の他の部分の調査が終わり、ベルコンベアを撤去してから発掘した。

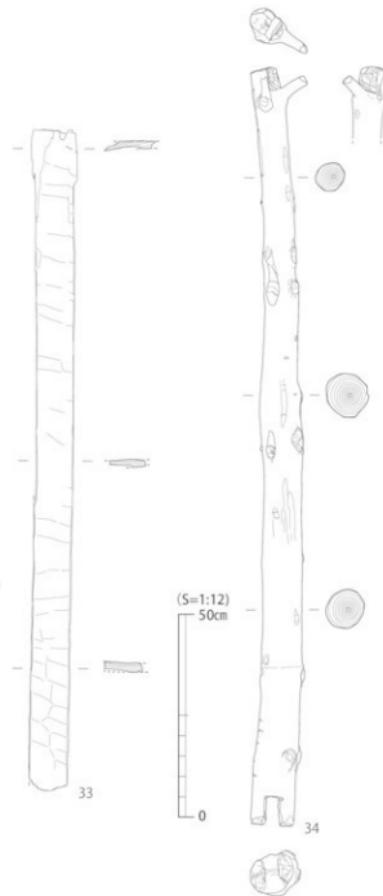
平面プランの検出はV層上面で行つたが、第61図D-D'から基本層序IV層下半（図の9層上面）に北側の溝肩があったことが分かる。東西方向に弧を描くかたちでのびており、東側は調査区外に続いており、西側は肩が不明瞭になり、形状を把握できなかった。溝の幅は3.6mで、土層図からみた溝の深さは0.5mである。

出土遺物（第63・74図） 1～5は平面プランを検出する以前に標高約2mで出土したもので、土層図の北側の溝肩よりも低い位置にあることから、この溝に伴うものと考えた。なお、平面プラン検出後の遺構埋土（土層図の8層に相当）には遺物は全く含まれていなかった。

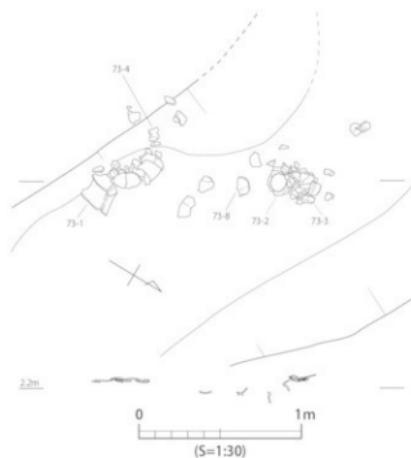
1～3は弥生土器の甕で、1は口縁部に平行直線文が、肩部には貝殻の刺突による羽状文が巡る。V-3様式のものである。2・3は無文のもので、口縁部は外反し、端部はすぼまっている。口縁部内面の段は不明瞭で、器壁は厚みがあり、シャープさを欠いたつくりのものであり、中国山地系のものとみられる。V-3～4様式に相当するものであろうか。4は甕もしくは甕で、厚みのある平底を持つ。5は甕もしくは器台で、粘土を垂下させるように貼り付けて口縁部が作られている。端部には刺突が、外面には平行直線文が巡り、その上にS字状の渦巻浮文が付けられている。在地には見られない器形で、搬入品の可能性があるが、産地は不明である。

遺構の時期と性格 出土遺物から弥生時代後期後葉頃に属するものと推定する。肩はあまり明確でなく、下層には全く遺物を含んでいないことから、人為的に掘られたものではなく、自然地形

4 中国山地系の土器については、伊藤実氏より御教示を得た。



第71図 6区⑥ SD01 出土遺物(7)



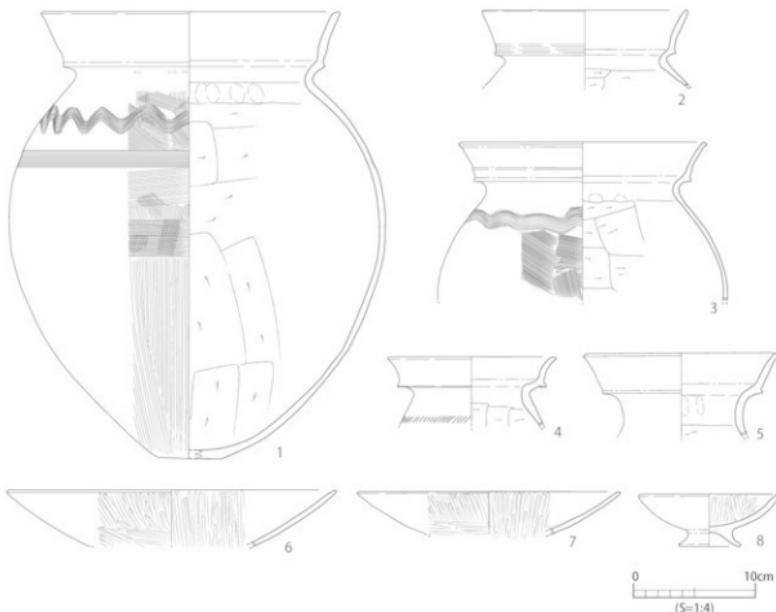
第 72 図 6 区⑥土器群 5

の落ち込みの可能性も考えられる。

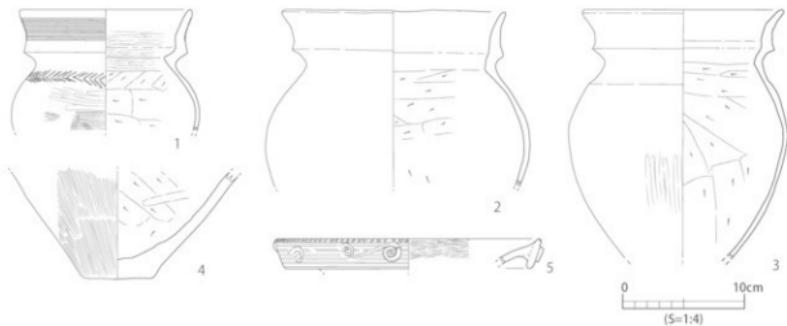
SD02 (第 75 図)

検出状況と規模・形状 調査区の東側で、K11・K12 グリッドに位置する。南側には SBO2 が、北側には SD03 がある。V 層上面で検出した。長さ 6.8m、幅 0.5m の東西方向に直線的にのびる溝で、西端部付近で小さく南に曲がっている。深さは 0.05 ~ 0.2m で、西側の方が深くなっている。

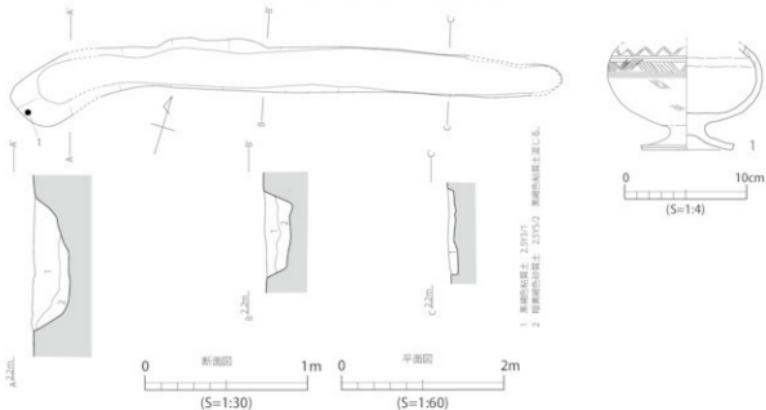
出土遺物 1 は、西端部で検出面よりも高い位置から出土したものであるが、この構成に伴う可能性があると考えここに掲載した。古式土師器の脚付壺で、横方向に丸く張り出した胴部には沈線文や刺突文、刺突による鋸歯文が巡る。草田 4 ~ 6 期頃のものとみられる。



第 73 図 6 区⑥土器群 5 出土遺物



第74図 6区⑥ SD06出土遺物



第75図 6区⑥ SD02・出土遺物

遺構の時期と性格 出土遺物から弥生時代後期～末頃と推測される。

遺構の規模・形状から、検出時には布掘建物跡の柱掘り方になる可能性も考えたが、対になる溝は確認していないため、遺構の性格は不明である。

SD03、土器群2・3、杭列3（第76～87図）

検出状況と形状・規模 調査区の北東隅を東西に横切るかたちでのびるもので、この調査区では溝の南岸側のみを検出している。確認できた長さは約20mで、幅は少なくとも4m以上あり、検出面からの深さは0.4mある。平面形はV層上面（標高約2m）で検出したが、調査区西壁の土層（第35図B-B'）から本来の溝肩はIV層上面にあったと推測される。

この遺構を検出するより前には、南岸と重複する位置に土器群2を、ほぼ中央に土器群3を検出しており、西側の埋土には杭列3が刺さっているのを確認した。埋土中では西側と東側の2か所で土器のまとまりがあり、西側を土器群8、東側を土器群9とした。

埋土は、シルト質の土層や細砂が互層状になっており、部分によっては粗砂や植物遺体、流木を含んでおり、水流のある状況で堆積したものと考える。流木の多くは東側が高く、西側へ下がつ

た状態で出土していることから、水は東から西へ流れていたようである。

出土遺物（第77～82図） 第77～81図には、遺構検出面よりも低いレベルで出土したものを探査している。これらのうち、2～4・7は土器群8から、10・17・20は土器群9から出土したものである。

1～10は古式土師器の甕である。1は口縁部が先すぼまりになり、肩部にはヘラ描きの沈線と刺突文が巡るもので、草田4期に位置付けられる。2は口縁端部が上方に弱い面を持つもので、肩部にはヘラ状工具による刺突文が施されている。草田5～6期のものであろう。3・4は肩部に平行直線文と波状文が巡るもので、3は貝殻による刺突が部分的に入る。3は口縁端部を丸く収めており、時期は草田5期である。5は口縁端部が上方に面を持つもの、6は口縁端部が丸く収められたもので、肩部にはヘラ状工具による刺突文が巡る。5は草田6～7期、6は草田5期のものとみる。7は口縁端部が外側に面を持つもので、肩部に2段の刺突文が巡る。草田6期のものであろう。8は口縁端部が肥厚し、肩部にはハケ目原体による刺突文が施されている。器壁に厚みがあり、小谷3式以降のものである。9・10は大型の甕である。9は口縁部が直立し、端部上面に面を持っており、肩部には平行直線文と波状文が巡る。10は口縁端部が丸みを持ちながら、肥厚するもので、肩部には3段の平行直線文とその間に2段の刺突文が入る。

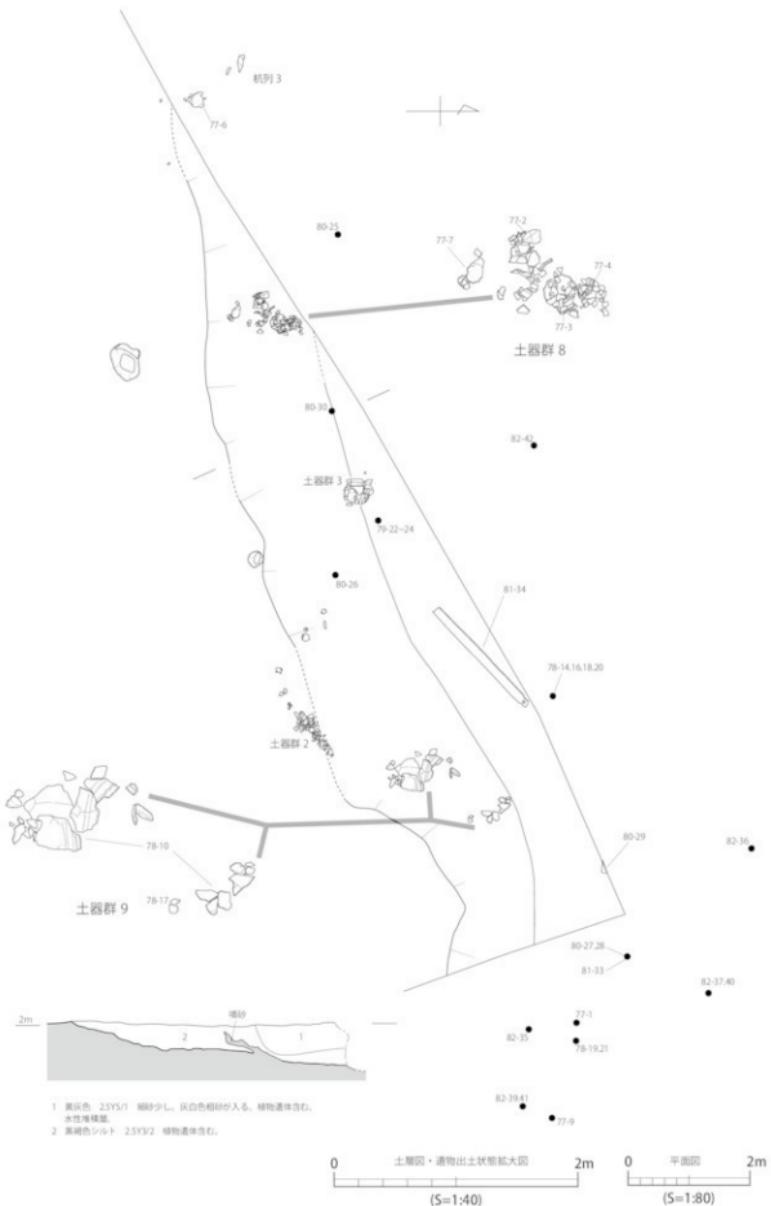
11・12は壺で、口縁部は直立し、端部は上面に向けて平坦面を持つ。11は口縁部に円形竹管文が施されている。

13・14は口縁部が外反する鉢形の土器で、外面には煤が、内面には水銀朱が付着しており、水銀朱の精製に使用したものであろう。13は平底氣味の底部を持つもので、14は口縁部に片口が付くものである。

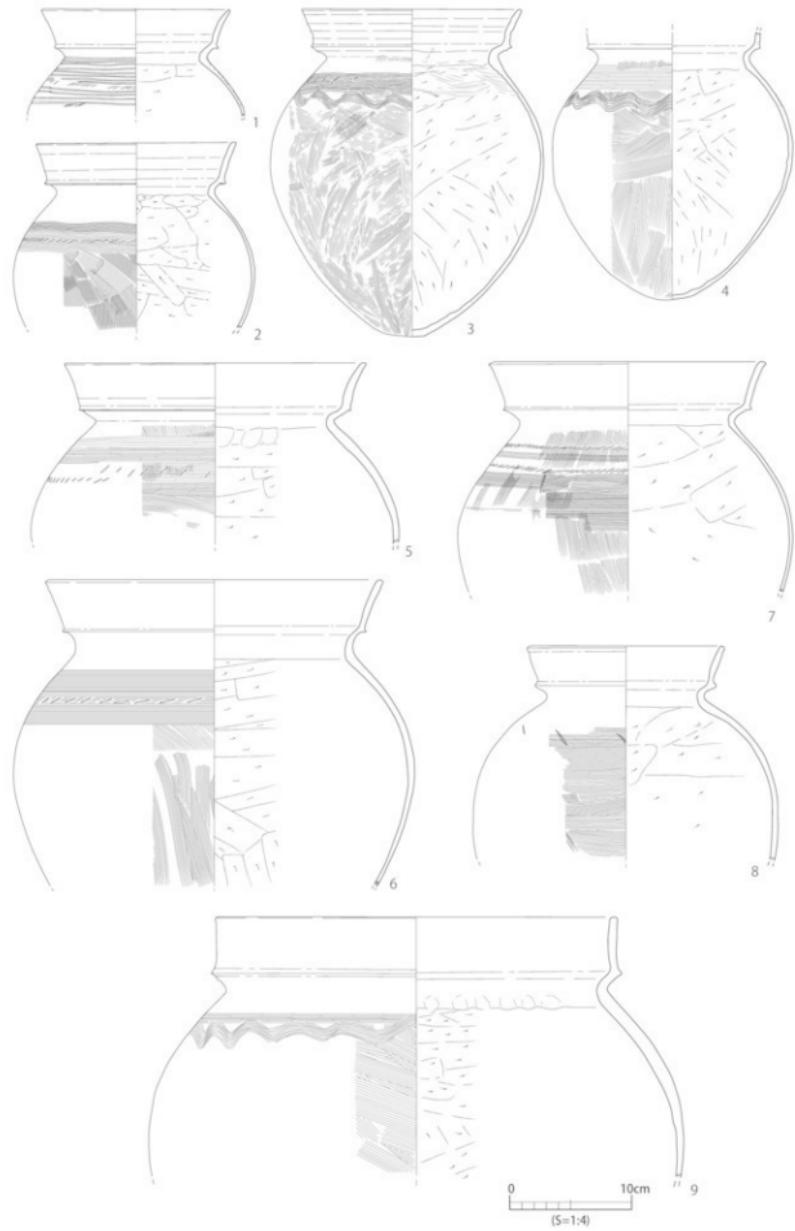
15～17は高環である。15の環部は浅い皿状で、口縁部が外反し、16・17の脚部はラッパ状に開く。18は低脚環で、環部の口径が小さいものである。19は低脚環と考えたが、環部を欠き、通常の低脚環と比べ脚裾が大きく広がるもので、他の器種になるかもしれない。20・21は鼓形器台で、草田5～6期のものと推定される。

22～34は木製品である。

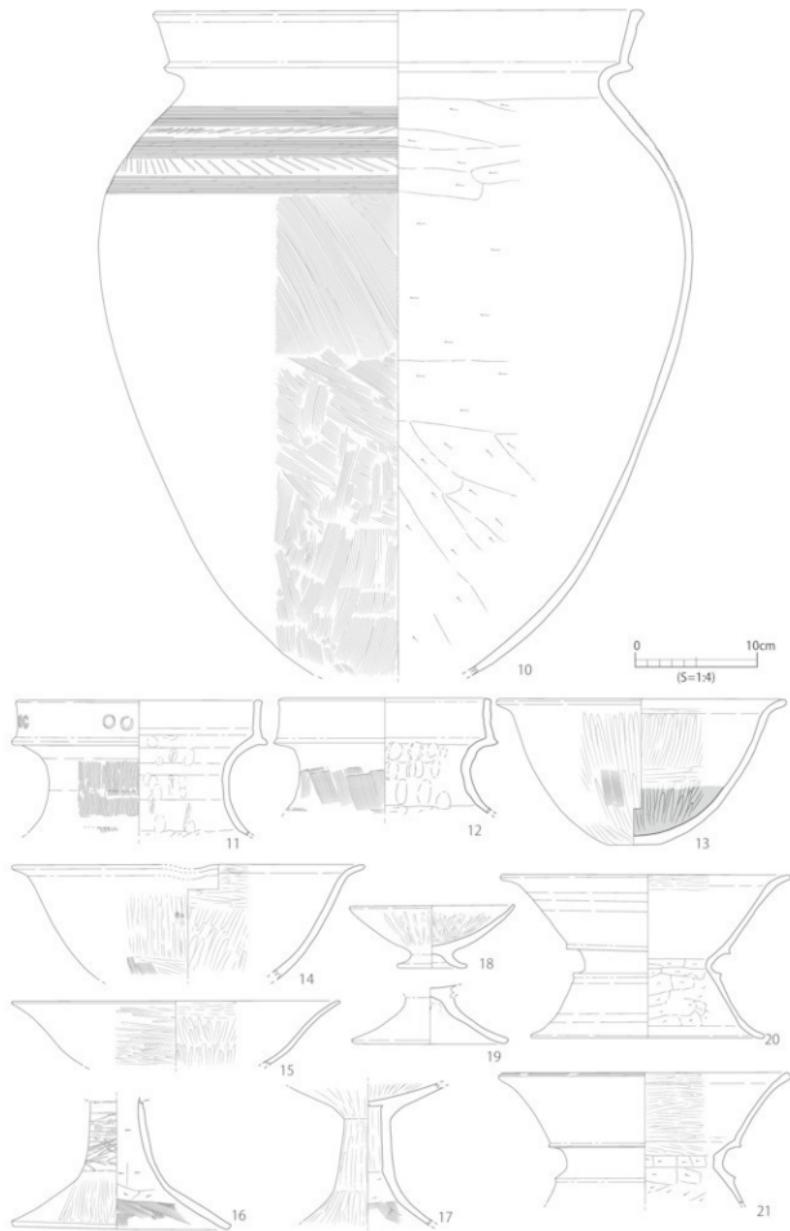
22はジョッキ形の倒物桶で、23はそれに伴う蓋、24は底板である。これらは壊れた状態であったが、ほぼ同一地点で出土している。22は台形状の側面形を持つもので、片側に上端が反り返ったかたちの把手がつく。内面には黒色の塗料が塗られ、下端には断面が台形状の突帯を持つ。突帯の下半には黒色塗料が付着していないことから、ここに底板がはまっていたことが分かる。把手の付け根には縦方向に穿孔があり、蓋を固定するための栓などがはめ込まれていたのかもしれない。把手の反対側の口縁部には、2～3mm幅で外側に折り返した部分が2か所ある。22の樹種はスギである。23は直径12.6cmの円形の蓋で、浅い皿を伏せたような断面形をしている。片側の側縁は直線的に切り取られ、方形の抉りが入っており、この反対側で圓面のやや上手寄りの部分には小さな穿孔がある。抉りを本体の把手側に合わせたとき、穿孔は本体口縁部の折り返しの1つとほぼ対応する位置に来ることから、この部分で紐を通して容器と蓋とをつないでいたものと推測する。材はヤマグワに近似したものが用いられている。24は直径10.1cmの円形の底板で、上面にのみ黒色の塗料が付着しており、こちらが内面であったことが分かる。底板や本体内面の突帯には釘痕がなく、本体にちょうど収まるかたちで底板を加工し、はめ込んでいたのである。



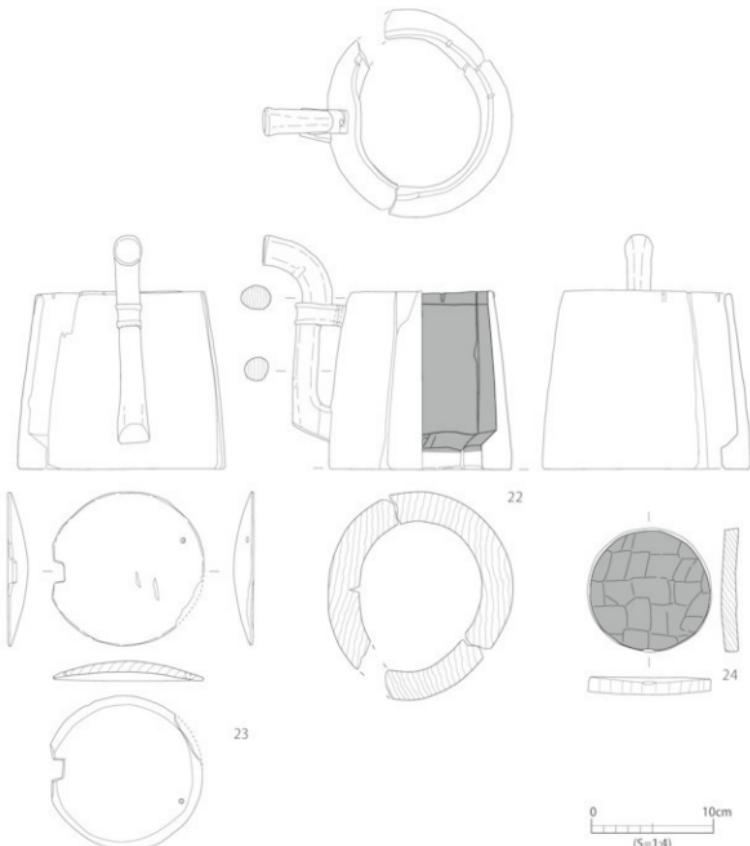
第 76 図 6 区⑥ SD03



第77図 6区⑥ SD03 出土遺物（1）



第78図 6区⑥ SD03出土遺物（2）

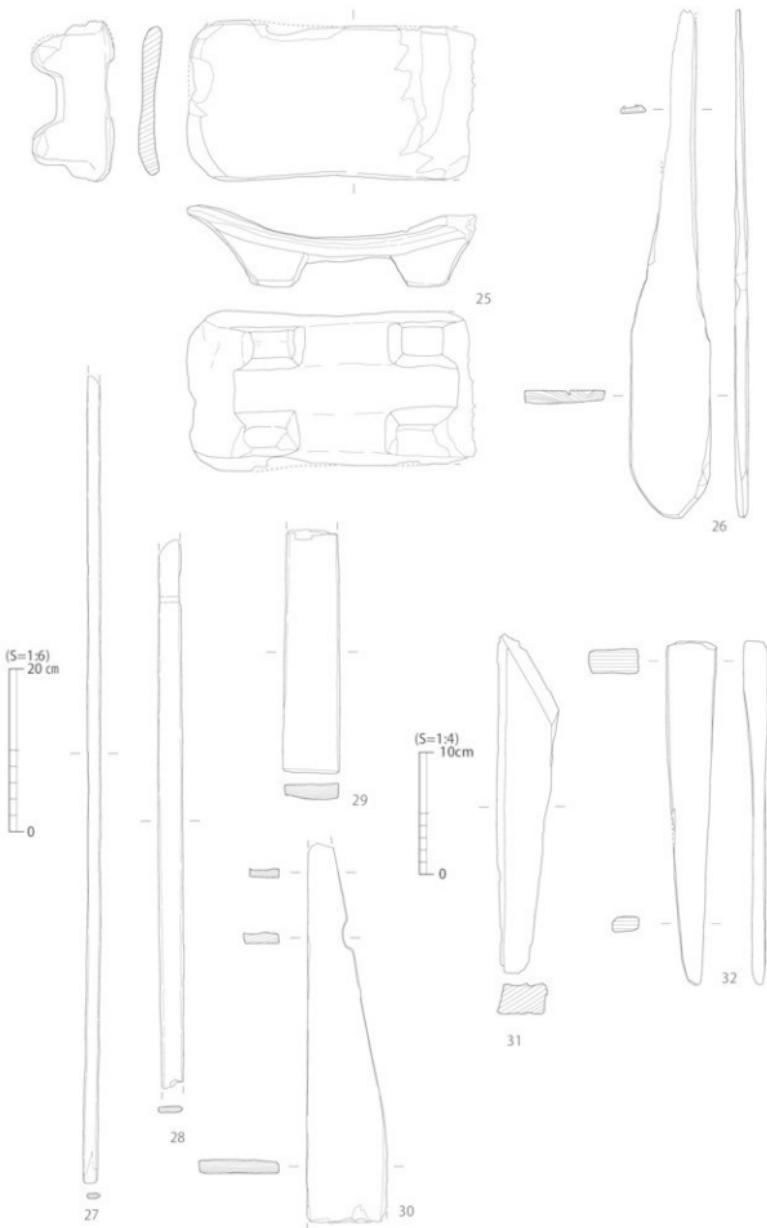


第 79 図 6 区⑥ SD03 出土遺物 (3)

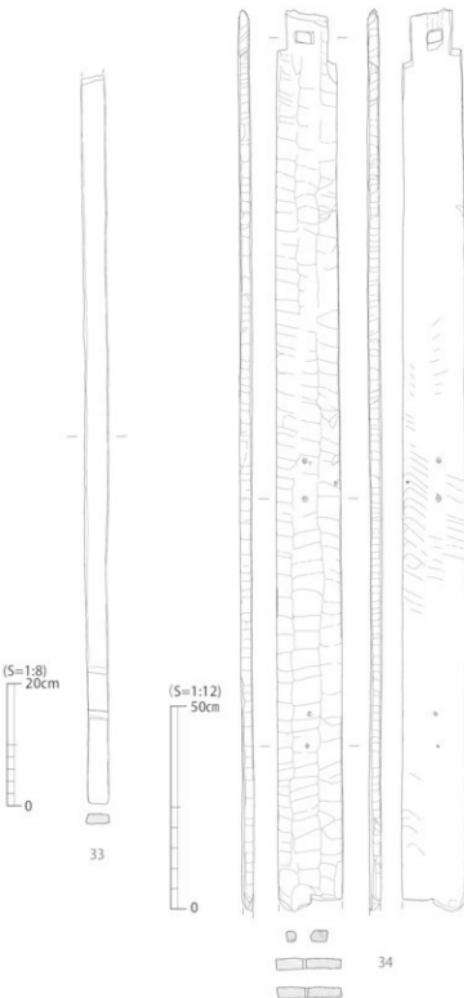
樹種はスギである。

25 は例物の腰掛で、下面には 4 か所の脚部が作り出されている。座面の中央がくぼんでおり、側面形は浅い皿状を呈している。樹種はスギである。26 は権で、板状のスギ材を加工したもので、水かき部の幅は 11.0cm である。27 ~ 30・33 は板状の木製品で、28・33 は他の材が当たっていたような痕跡があり、何らかの部材と考えられる。30 は片側の長側縁が斜め方向に切り取られたかたちになり、ここに抉りが 1 か所入っている。31・32 は楔である。34 は建物の屋根板材で、一方の端部は凸形に加工されて方形の孔が穿たれており、凸形の基部は斜め方向に切断された面を持つ。ここで反対側の屋根材と組み合わせ、方形の孔に木栓を通して固定したものと考えられる。屋根板の中央と下端寄りに 2 孔 1 対の穿孔があり、ここに紐を通して垂木と接合したのであろう。表裏面で風化の度合が異なり、工具痕の残りの良い方が建物の内側であったと判定できる。

第 82 図は、SD03 の平面プラン検出面よりも高いレベルで出土したものであるが、本来の溝肩



第 80 図 6 区⑥ SD03 出土遺物 (4)



第 81 図 6 区⑥ SD03 出土遺物 (5)

層中から出土している（第 121 図 140～149）。

土器群 2・3 (第 83～85 図) これらも SD03 の検出面よりも高いレベルで確認した。ただし、位置関係や本来の溝肩のレベルから SD03 に伴う可能性があるため、ここでふれることとする。

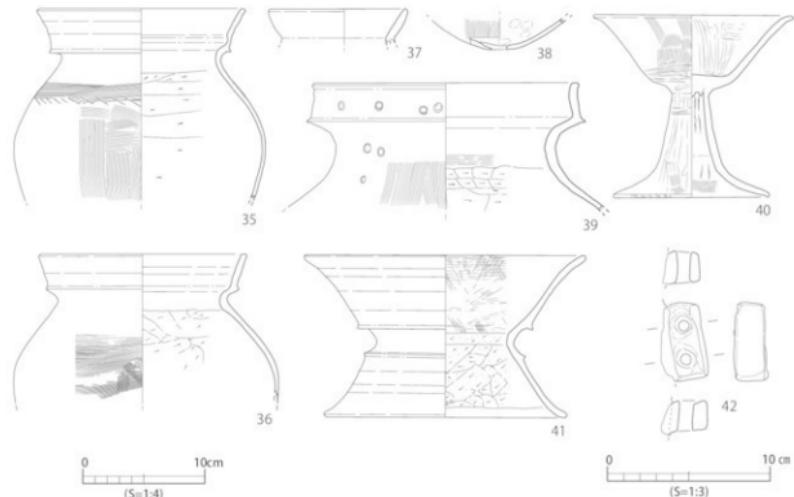
土器群 2 は、SD03 の南岸の上端にほぼ重複する位置で IV 層掘削中に検出したもので、東西 2.4m、南北 1m の範囲で遺物のまとまりを確認した。遺物のレベルは、およそ標高 2.2～2.3m である。

1～5 は土器群 2 に伴うものである。1・2 は古式土師器の甕で、1 は肩部に平行直線文や刺

の高さからこの遺構に伴う可能性を持つと考えたものである。

35・36 は古式土師器の甕である。35 は口縁端部が外側に向けて面を持ち、肩部には平行直線文や刺突文が巡るもので、草田 6 期に位置付けられ、36 は端部に面を持ち、35 よりも肩が丸みを帯び、シャープに欠けたつくりであることから草田 7 期に下るものと推測する。37 は口縁部が内湾気味の単純口縁甕で古墳時代中期まで下る可能性がある。38 は甕の底部で、焼成後に穿孔されている。内面に指頭圧痕がよく残り、底面は丸みを帯びており、草田 6 期新段階、小谷 1 式以降のものであろう。39 は古式土師器の壺で、口縁部はやや内傾して立ちあがる。口縁部・頸部には円形竹管文が施されている。40 は高壺で、壺部は口径が小さく、深みのあるもので、脚部は裾部の広がりに対して高さが大きいもので、小谷 3～4 式に位置付けられよう。41 は鼓形器台で、草田 5～6 期のものと考えられる。

42 は朝鮮半島産の三韓土器で、耳付短頸壺の耳にあたる。長方形の耳に 2 つの孔を持つもので、体部に対して縦方向に貼り付けられたものである。焼成は軟質で、これと同一個体とみられるものが IV



第82図 6区⑥ SD03 上層出土遺物

突文が巡り、口縁端部を丸く収めたもの、2は肩部に平行直線文を持ち、口縁端部がすぼまるもので、1は草田5期、2は草田4期に位置付けられよう。3は注口土器で、注口の先端が細くなるように作られている。草田4～6期におさまるものである。4は高環の脚部、5は鼓形器台の脚部である。

土器群3は、SD03のほぼ中央と重複する位置にあり、IV層掘削中に1個体分の古式土師器の甕が横倒しの状態で検出されたものである。遺物のレベルは標高2.05～2.25mである。6は口縁端部は面を持ち、肩部には平行直線文と波状文が巡る。草田6期に位置付けられよう。完形に近いが、底部は失われており、意図的に打ち欠かれた可能性も考えられる。

杭列3(第86・87図) SD03の西側に立っている杭列で、IV層の掘削中に杭の上端を検出している。杭の上端の標高は2.35mである。この杭列の時期は不明であるが、SD03の埋土に突き刺さっていることから、SD03がかなり埋没した段階で打ち込まれたのは確実であり、杭上端の残存レベルはⅢ層よりも低いことから、古代までは降らないものと考えられる。

第87図はこの杭列に用いられた杭である。1は板状のもので、幅は5.7cm、厚さ2.2cmのものである。2～4は一方の側面が弧状に加工された面を持ち、他の側面は粗く割れたままの状態であり、柱状のものを分割して、杭に転用したと考えられる。4は図面上部側がひとまわり太くなるように作られ、この部分にはほぞ穴が開けられていたようである。柱の表面はヤリガンナで丁寧に面取り加工されている。

SD03の時期と性格 本遺構は、弥生時代後期末頃～古墳時代前期初頭を中心とするものであるが、埋土上部の出土遺物から完全に埋没するのは古墳時代前期後半～中期まで下る可能性がある。

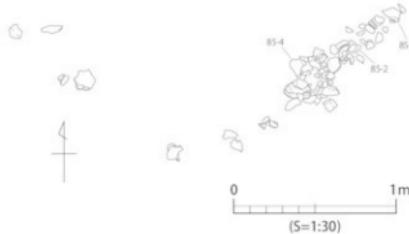
埋土の堆積状況から流路跡で、東から西への流れがあったと考えられる。北西側では、6区⑤で帶状に分布する土器群や、矢板、SD02が検出されており、これらを結ぶかたちでSD03に続く

流路跡が通っていたと考える。

SD08・09, 土器群 10 (第 88・89 図)

検出状況と形状・規模 調査区のやや西寄りで、SD08 は J 7 グリッド、SD09 と土器群 10 は I 7 グリッドに位置する。土器群 10 は IV 層掘削中に確認した。また、SD08・09 は V 層上面で検出したが、本来の掘り込み面はもっと高い位置にあった可能性がある。

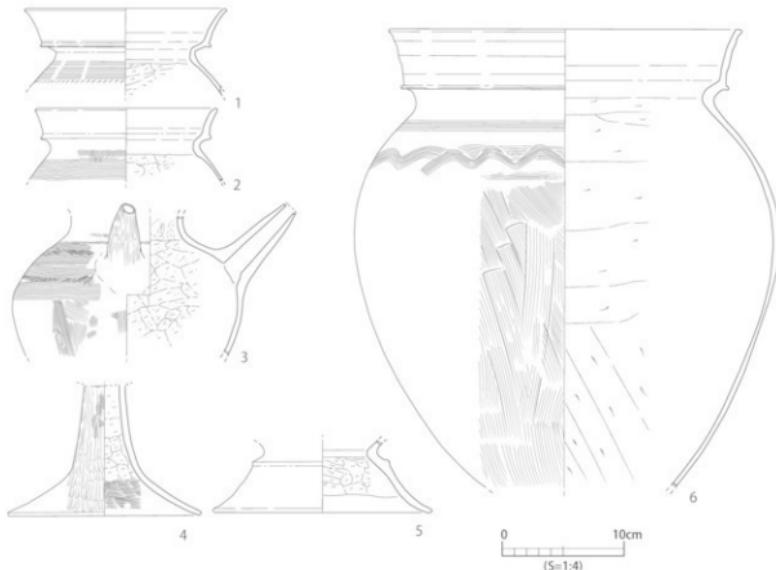
SD08 は長さ 4m 以上、幅 0.3m、深さ 0.08m の南北方向の溝で、北側は調査区外にのびる。一方、SD09 は長さ 2.4m、幅 0.2m、深さ 0.05m の溝で、SD08 とほぼ直交する方向にのびている。SD08 の南延長線と SD09 の東延長線の交点にあたる部分には土器群 10 が存在し、1.1m × 0.8m の範囲で土器片がまとまりを持って出土している。



第 83 図 6 区⑥土器群 2



第 84 図 6 区⑥土器群 3



第 85 図 6 区⑥土器群 2・3 出土遺物

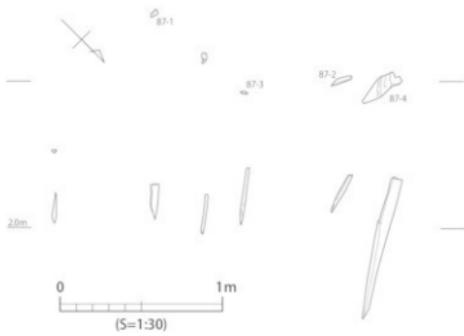
出土遺物（第 89 図） 1 ~ 6

は古式土師器の甕で、1・3は口縁端部が面を持つもの、2・5は端部を丸く取めるもの、6は端部が先すぼまりになるものである。肩部の文様は、1・3・5はハケ目原体もしくはヘラ状工具による刺突文で、2・6は波状文である。4は痕跡的な平底を持つもので、内面には指頭圧痕が残る。6は草田 4 期、2・5は草田 5 期、1・3・4は草田 6 期に位置付けられる。7は無頸壺、8は高杯、9は鼓形器台である。8は底部底に充填された円盤に多数の刺突痕が見られる。

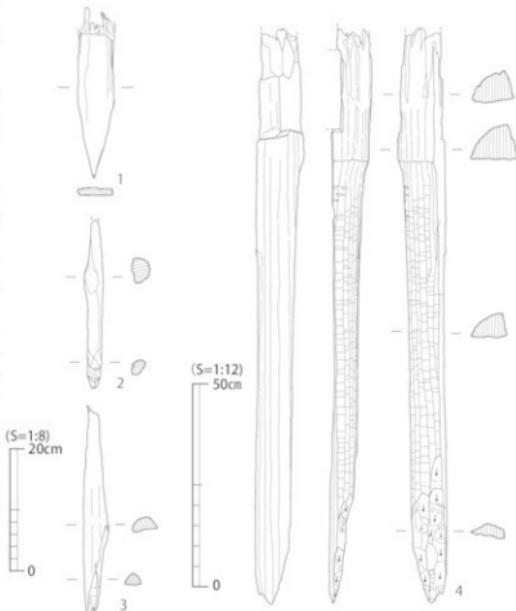
遺構の時期と性格 土器群 10 は弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に位置付けられる。SD08・09 については時期の特定できるものは出土していないが、周辺の遺物出土状況から、土器群 10 とほぼ同様の時期と推測する。これらの遺構の性格は不明で、一連のものであったのかも定かではないが、位置関係から何らかの関連を持つ可能性がある。

SD10（第 90 図）

調査区の南辺付近で、H 8



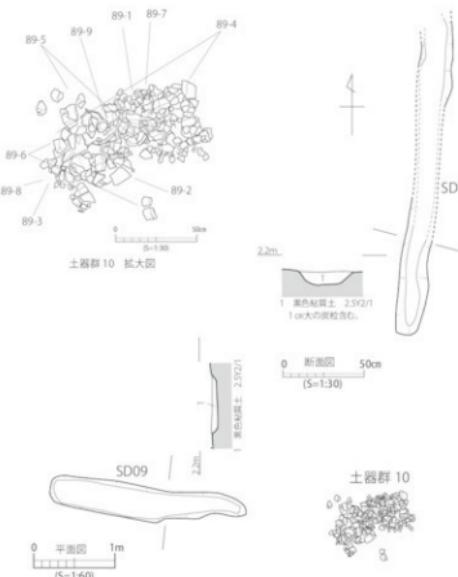
第 86 図 6 区⑥杭列 3



第 87 図 6 区⑥杭列 3 出土遺物

グリッドに位置する。VI 層上面で検出した（この部分にはもとから V 層がなかった）が、本来の掘り込み面は不明である。南北方向にのびる弧状の溝で、長さ 2.9m、幅 0.2m、深さは 0.1m である。小片のため図示していないが、弥生時代中期後葉の甕片が出土している。ただし、これは下層のものが混入したものであろう。調査区内での遺構・遺物の分布状況から、この遺構は弥生時代後期後葉～古墳時代前期に属する可能性が高いと考える。遺構の性格は不明である。

③ 性格不明遺構



第 88 図 6 区⑥ SD08・09、土器群 10

つ。5 は壺で、口縁端部は丸みを持つ。1～5 は草田 5 期のものである。6 は注口土器で、注口の先端がすぼまるものである。7 は短頸壺とみられるもので、横方向に張り出した胴部の上半に直線文や刺突文、刺突による鋸歯文が施されている。6・7 は草田 4～6 期に収まるものと考えられる。8 は胴部に 2 条の突帯を持つもので、壺の破片とみられる。西部瀬戸内系もしくは北部九州系のものであろうか。なお、VI 層では、突帯が 1 条しか残っていないがこれと形状・胎土が似たものが出土（第 127 図 39）していることから、本来は VI 層に伴うもので、水流や遺構の掘削などの攪拌によって混入した可能性も考えられる。

9 は繩文晩期の突帯土器で、突帯が口縁端部に付き、棒状工具で刺突されたものである。

10～13 は木製品である。10 は平面形が長方形の剖物容器で、内側は中央の仕切り状の高まりで 2 分されている。11 は木栓で、頭部は断面形が正方形に近いかたちに作られており、先端側は厚みが小さくなり、断面形が細長い長方形になっている。12 は板状木製品で、側面から切り込みを入れ先端を尖らせたものである。13 は杭で、丸太状の材の先端を加工して、尖らせている。

遺構の時期と性格 出土遺物から弥生時代後期末頃の時期が考えられる。遺構の性格については明らかでないが、周辺には土坑が多数検出されており、これらと同様な機能・用途を持っていた可能性がある。

SX02 (第 93・94 図)

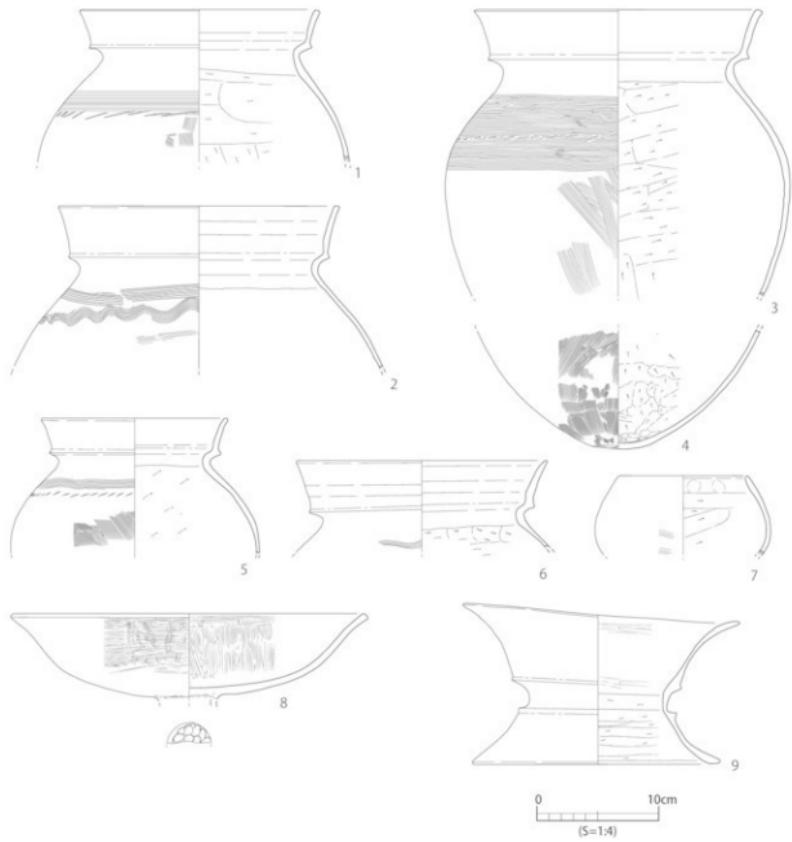
検出状況と形状・規模 調査区南辺の中央からやや西寄り、H 8 グリッドに位置しており、南側は調査区外へと続いている。VI 層上面で平面プランを検出した（ここにはもとから V 層がなかった）が、本来の掘り込み面は不明である。遺構の平面形は南側からみると四角形で、現状で東西 6.3m、

SX01 (第 91・92 図)

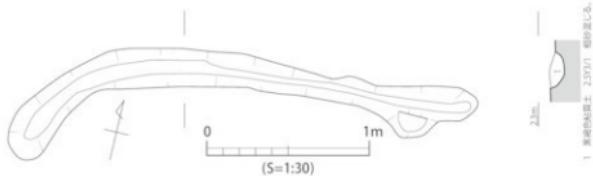
検出状況と形状・規模 調査区の南辺中央部で、I 9・I 10 グリッドに位置し、南側は調査区外に続いている。VI 層上面で検出した（ここにはもとから V 層がなかった）が、本来の掘り込み面は不明である。長さ 4.2 m、深さ 0.2 m の不定形な落ち込みで、底面も水平ではない。複数の土坑が重複しているようにも見えるが、土層では切り合い等は確認できなかった。埋土は黒色の粘質土を主体とし、1 cm 以下炭粒を多く含み、木片なども入り込んでいた。

出土遺物 (第 92 図) 1～4 は古式土師器の甕で、口縁端部を丸く收めている。3 は口縁部に波状文

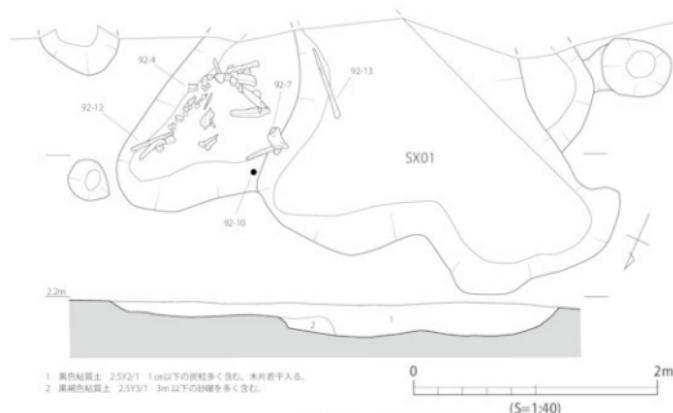
を、4 は口縁部に円形竹管文を持つ



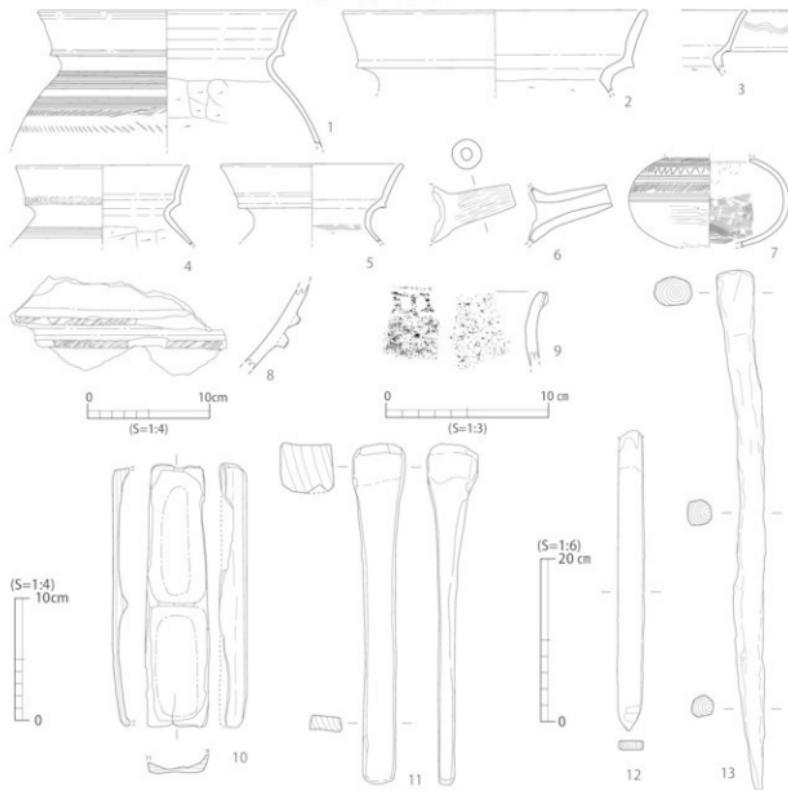
第89図 6区⑥土器群10出土遺物



第90図 6区⑥SD10



第91図 6区⑥ SX01



第92図 6区⑥ SX01 出土遺物

南北 4.3m の規模を持つ。深さは、南側では 0.1m、北東側では 0.25m、北西側では 0.35m となっており、北側へ行くほど深くなっている。埋土は、粗砂や黒色系の粘質土が混ざった状態で堆積していた。

出土遺物（第 94 図） 1・2 は弥生土器の甕で、口縁部に平行直線文が施されており、1 は肩部に波状文を持つ。3 は古式土師器の甕で口縁部はやや外反し、端部がすぼまり気味のもの、4 は甕で口縁部が直立気味に立ち上がり、端部がすぼまっている。5～7 は弥生土器の甕もしくは甕の底部で、いずれも明瞭な平底である。8 は低脚杯である。9 は器台で、受部外面には平行直線文が、筒部にはヘラ描きの沈線や、貝殻刺突による羽状文が見られる。1・2・9 は V-3 様式、草田 3 期に、4 は草田 4 期、3 は草田 4～5 期頃に属するものとみられる。10 は砾石で、上面に砥面が残り、細い線状の使用痕も多数存在する。

遺構の時期と性格 時期は、出土遺物から弥生時代後期後葉～末頃と推測される。遺構の性格については不明である。

④ 土坑・ピット（第 95～100 図）

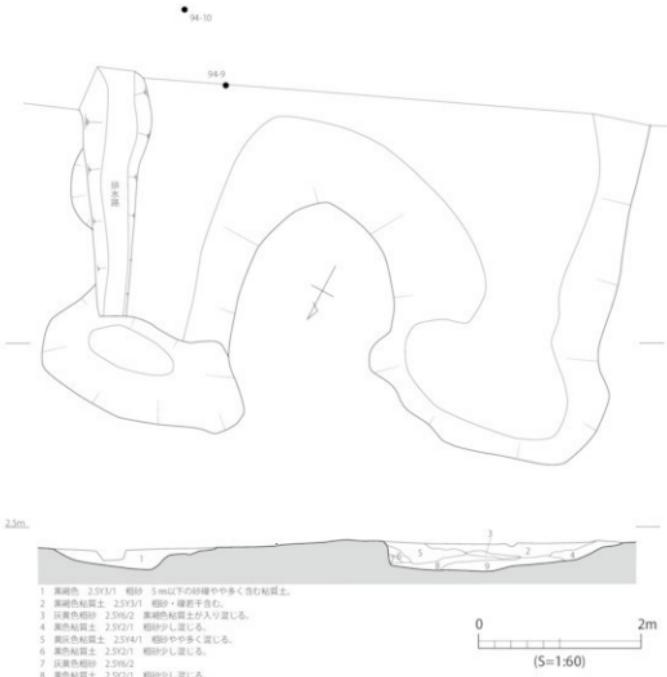
SK01・土器群 6（第 95・96 図） 調査区の東側、J 11 グリッドに位置する。SK01 は長さ 1.8m、幅 1.05m、深さ 0.1m の不整形な土坑である。V 層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。なお、IV 層掘削中にこの東側にあたる部分で土器群 6 を検出しており、両者が一連のものという可能性もある。また、両者が別のものであるとすれば、下位で検出された SK01 の方が古いことになる。

遺物は、SK01 の埋土中で出土したものはないが、上器群 6 から古式土師器の甕が出土している。1・2 はともに肩部にヘラ状工具による刺突文が 2 段巡っており、底部は痕跡的な平底のものである。1 は口縁端部が丸みを持ち、2 は面取りされている。これらは草田 5～6 期に位置付けられるものである。SK01 の時期は土器群 6 から弥生時代後期末頃と考える。

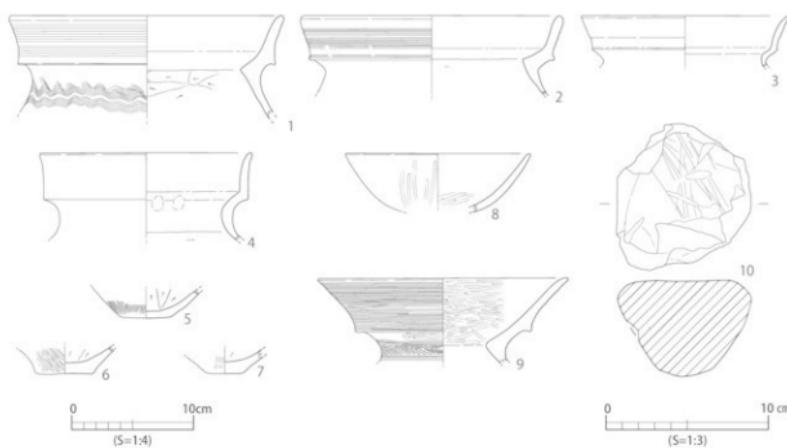
SK03（第 95 図） 調査区の東側、K11 グリッドに位置しており、南西に SBO2 の北掘り方が隣接する。V 層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。長さ 1.8m、幅 1.3m、深さ 0.2m の不整形な土坑で、西側は P 8 に切られている。遺物は、古式土師器片が出土しているが、小片のため図示していない。遺構の時期は不明確であるが、調査区内の遺物出土状況などから、弥生時代後期末頃と考える。

SK04（第 95・96 図） 調査区の東側、J12 グリッドに位置しており、西に SBO2 が隣接する。V 層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。長さ 1.6m、幅 1.3m、深さ 0.12m の隅丸方形の土坑で、埋土は黒褐色粘質土で、木片も入っていた。遺物は古式土師器片が出土している。3 は鉢で、口縁部が体部から外反して開くものである。外面には煤が付着し、外外面に部分的に水銀朱が付着しており、水銀朱の精製に用いられたものと推測する。この遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期末頃と考える。

SK05（第 95 図） 調査区の東側、K12 グリッドに位置しており、西に SDO2 が隣接する。V 層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。長さ 1.6m、幅 0.8m、深さ 0.2m の不整楕円形の土坑で、中央から北側は排水溝の掘削のため検出以前に失われている。遺物は出土していないためこの遺構の時期は不明確であるが、調査区内の遺物出土状況などから弥生時代後期末頃と考える。



第 93 図 6 区⑥ SX02



第 94 図 6 区⑥ SX02 出土遺物

SK06（第95図） 調査区の東側、J 11 グリッドに位置しており、北にはSB02 南掘り方がある。V層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。長さ 1.25m、幅 1m、深さ 0.1m の不整形の土坑である。遺物は出土していないため時期は不明確であるが、調査区内の遺物出土状況などから弥生時代後期末頃と考える。

SK10・土器群4（第95・96図） 調査区の東側、J 12 グリッドに位置しており、北にはSD03 がある。長径 1.45m、短径 1.3m、深さ 0.2m の不整円形の土坑で、中央から北側には排水溝掘削のため検出以前に失われた部分がある。V層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。なお、この遺構の北側と重複する部分で、IV層掘削中に土器群4を検出しており、両者が一連のものということも考えられる。

SK10 から第96図4が、土器群4から5～8が出土している。4～6は古式土師器の甌で4・6は口縁端部を丸く収めたもの、5は口縁端部に弱い面を持つもので、肩部には波状文が巡る。7は高环で、环部が浅く、口径の大きいものである。8は低脚环の脚部である。これらは草田5～6期の中に取まるものであろう。出土遺物からこの遺構の時期は弥生時代後期末頃と考える。

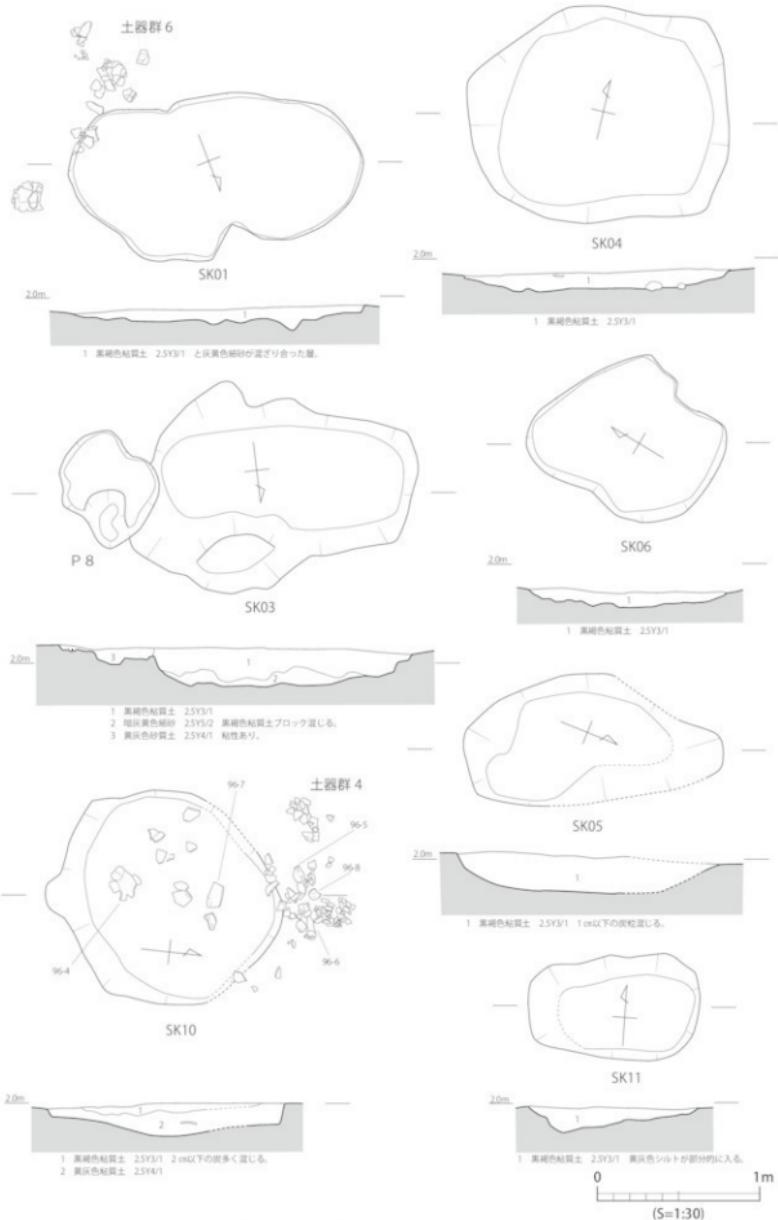
SK11（第95図） 調査区の東側、K10 グリッドに位置しており、南にはSB01 の北掘り方がある。V層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。長さ 1.05m、幅 0.65m、深さ 0.15m の隅丸長方形の土坑で、底面は西側に向けて低くなるかたちで傾斜している。小片のため図示していないが、古式土師器甌で、痕跡的な平底の破片が出土している。遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期末頃と考える。

SD04（第97図） 調査区の東側、J 12 グリッドに位置しており、周囲に近接してSK07～09が存在する。V層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。調査区周囲に掘った排水溝によって南側が切られており、現状では長さ 1.35m、幅 1.17m、深さ 0.1m の規模を持つ不整形な遺構で、調査時には一応溝になる可能性を想定し、この名称を付けた。遺物が出土していないため時期は不明確だが、調査区内の遺物出土状況などから弥生時代後期末頃と考える。

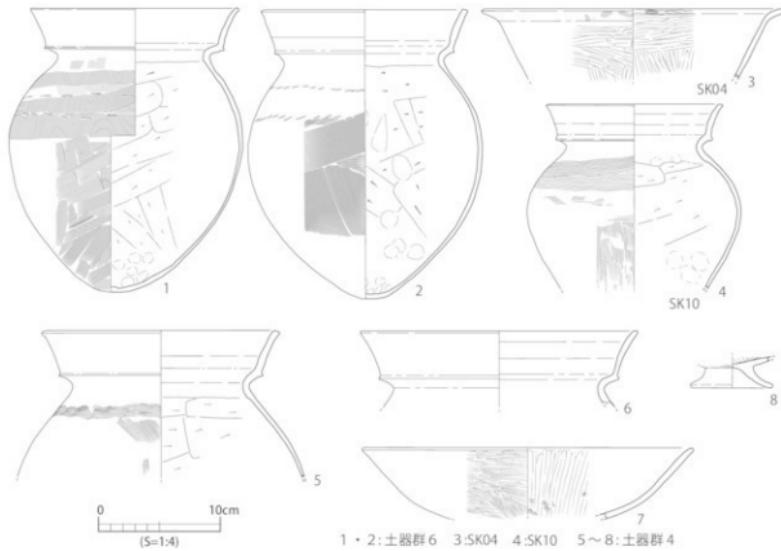
SK07・土器群7（第97・98図） 調査区の東側、J 12 グリッドに位置する。SK07は長さ 1.45m、幅 1.1m、深さ 0.35m の隅丸三角形の土坑である。底面は、東長辺側の張り出した部分でテラス状になり、西側がそれより一段深く掘られている。SK07はV層上面で検出したものであるが、IV層掘削中にこの遺構の南北両端と重複する位置で土器群7を検出している。SK07 埋土中と土器群7のそれぞれ出土した破片が第98図6に接合していることから、両者は一連のものであり、SK07の本来の掘り込み面は検出面よりも高いレベルにあったことが分かる。

遺物は古式土師器が出土している。1～3は甌で、口縁部は全体的に薄く、緩やかに外反している。肩部には、1は1段の刺突文、3は2段の刺突文が施されており、2は一部に羽状文様に2段の刺突が入るが、下段の刺突は全周しない。4は甌で、口縁部が内傾し、円形竹管文が施されたものである。肩部には2段の刺突文が巡る。5は低脚环で、口径は 13.3cm である。6・7は鼓形器台である。これらは草田5期頃に位置付けられよう。遺構の時期は弥生時代後期末頃である。

SK08（第97・98図） 調査区の東側、J 12 グリッドに位置する。V層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。長さ 0.9m、幅 0.65m の不整橢円形の土坑で、深さは南側が 0.05m であるのに対し、北側が 0.15m と一段深くなっている。遺物は埋土中では確認していないが、IV層掘削中にこの遺構の東側縁とほぼ重複する位置で砾石が出土しており、この遺構に伴う可能性



第95図 6区⑥ SK01・03～06・10・11



第 96 図 6 区⑥ SK04・10、土器群 4・6 出土遺物

があるものとしてここに図示した。遺構の時期は不明確であるが、調査区内の遺物出土状況や遺構のあり方などから弥生時代後期末頃と考える。

SK09（第 97・98 図） 調査区の東側、J 12 グリッドに位置する。東側は調査区周囲に掘った排水溝によって切られ、もとの形状は失われている。V 層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。現状では長さ 1.4m、幅 0.7m、深さ 0.35m の規模を持つ。埋土は、黒色粘質土や黃灰色砂が入り混じって堆積しており、人為的に埋められた可能性がある。出土遺物がなく遺構の時期は不明確であるが、調査区内の遺物出土状況や遺構の様相から弥生時代後期末頃と考える。

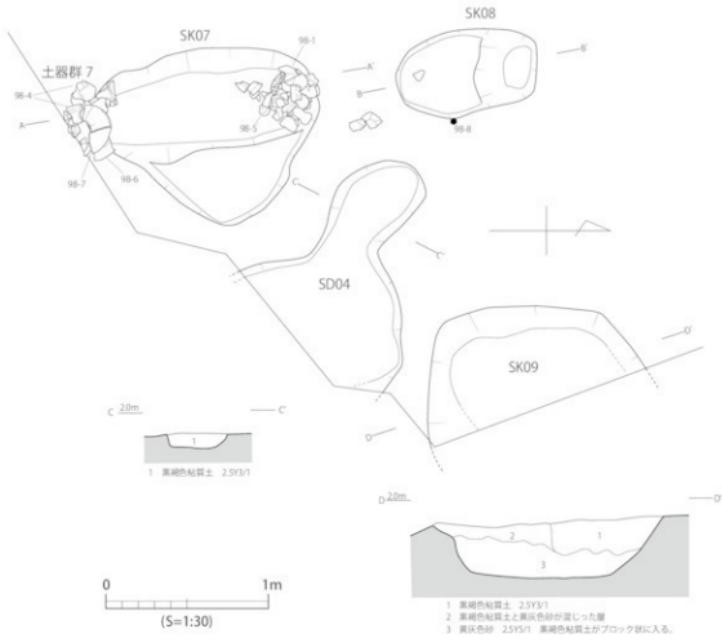
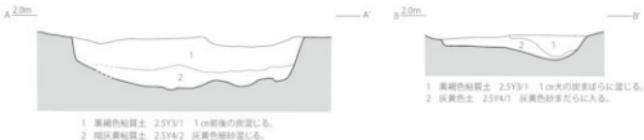
SK12（第 99・100 図） 調査区のほぼ中央で、I10 グリッドに位置する。IV 層掘削中に検出した。長さ 0.65m、幅 0.63m、深さ 0.1m の円形の土坑で、遺構内に炭化物が充填されていたため、周囲の土層との判別は容易であった。底面では焼土は認められないため、ここで火を焚いたのではなく、他所から炭を持ってきた可能性もある。遺物は埋土から 1・2 が出土した。1 は古式土師器の甕で、口縁端部は外側に小さくつまみ出されたかたちをしている。肩部はヘラ描き沈線文で区画され、その内側に刺突文が 2 段巡る。時期は、口縁端部の形状で見れば 6 期まで下りそうであるが、肩部の文様は 5 期以前の様相を示している。2 は鼓形器台の台部である。3 は SK12 の東外縁に接して出土したものである。当初はこの遺構に伴うとみたのであるが、遺構底面よりも深くもぐり込んでおり、遺構に直接伴わないことが判明したものの、参考資料としてここに掲載した。口縁部は直立気味に立ち上がり、平行直線文が施されたのちナデ消され、肩部には平行直線文や、刺突文、波状文が巡る。草田 3 期から 4 期でも古段階に位置付けられよう。遺構の時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭頃で、遺構の性格は不明である。

SK13（第 99 図） 調査区のほぼ中央、I 9 グリッドに位置する。VI 層上面で検出した（ここには

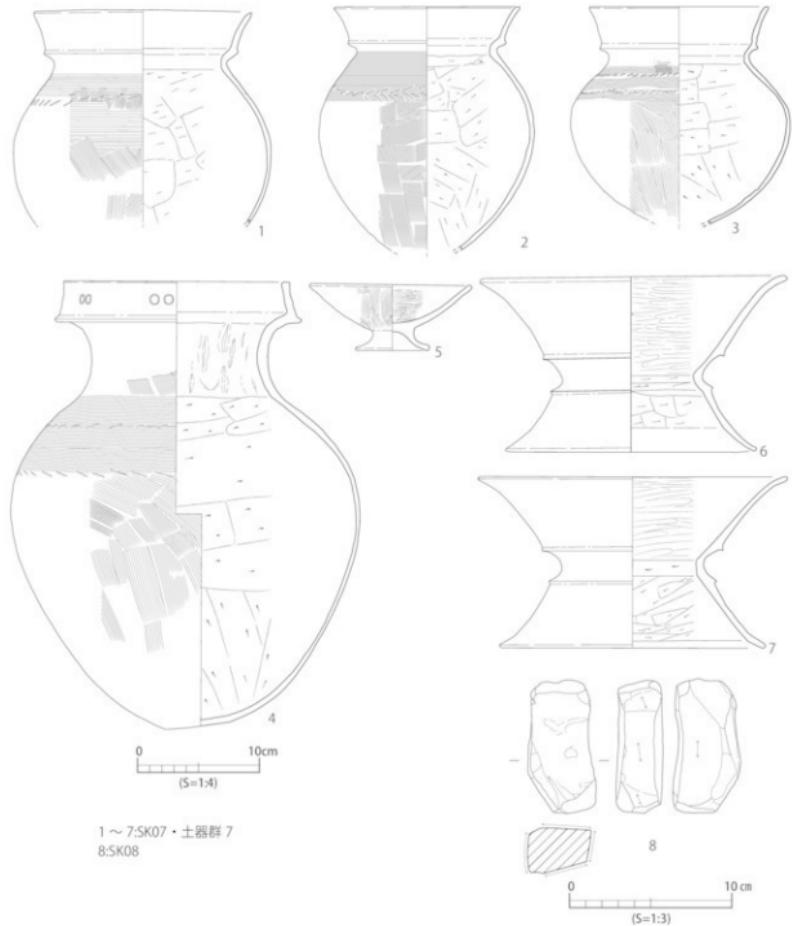
もとからV層はなかった)が、本来の掘り込み面は不明である。長さ0.9m、幅0.65m、深さ0.17mの不整格円形の土坑である。遺物は、古式土師器片が出土しているが、小片のため図示していない。遺構の時期は弥生時代後期末頃と考える。

SK14 (第99-100図) 調査区のほぼ中央、19グリッドに位置する。VI層上面で検出した(ここにはもとからV層はなかった)が、本来の掘り込み面は不明である。長さ1.4m、幅0.8m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。遺構埋土からは時期の特定できる遺物は出土していないが、IV層掘削中にこの遺構と重複する位置から4・5が出土している。4は口縁部に平行直線文があり、肩部に押し引き状の連続刺突が施されたもので、V-3様式のものとみられる。5は無文の複合口縁甕で、全体的に厚みがあり、シャープさに欠けたつくりで、口縁部内面の段は不明瞭である。中國山地系の土器とみられるもので、草田3~4期に併行するものであろうか。4・5から遺構の時期は弥生時代後期後葉~末頃と考える。

SK15 (第99-100図) 調査区のほぼ中央、19グリッドに位置する。VI層上面で検出した(ここ



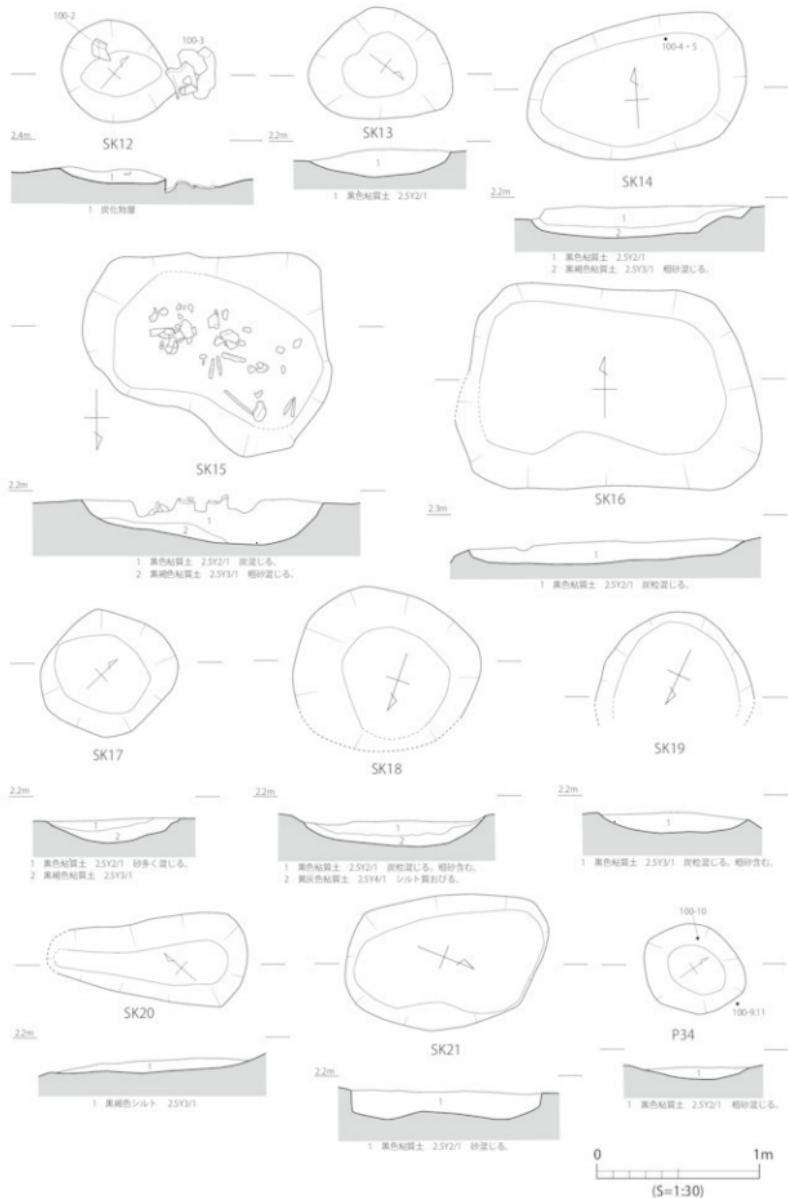
第97図 6区⑥ SD04, SK07~09



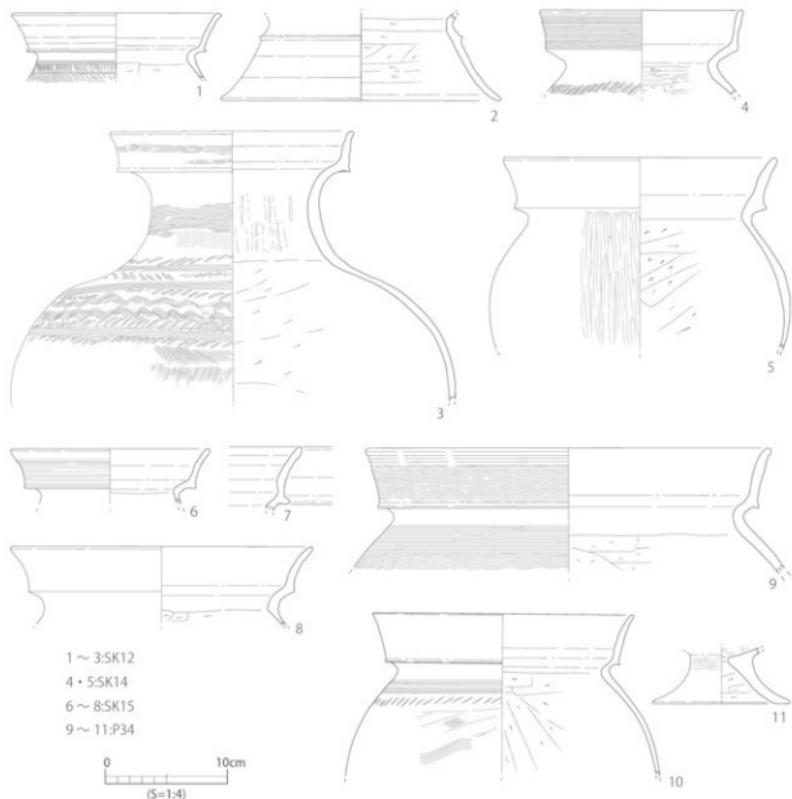
第98図 6区⑥ SK07・08、土器群7出土遺物

にはもとからV層はなかったが、本来の掘り込み面は不明である。長さ1.6m、幅1.3m、深さ0.3mの不整形な土坑で、埋土は炭粒や木片を含んでいた。埋土中から弥生土器・古式土師器が出土している。6は弥生土器の甌で口縁部に平行直線文が入るもの、7・8は古式土師器の甌で、口縁部は厚みがあり、大きく外反している。6は草田3期、7・8は草田4期に位置付けられる。これらから遺構の時期は弥生時代後期後葉～末頃と考える。

SK16(第99図) 調査区の中央からやや西寄りで、I-8グリッドに位置する。VI層上面で検出した(ここにもとからV層はなかった)が、本来の掘り込み面は不明である。長さ1.9m、幅1.25m、深さ0.15mの隅丸台形状の土坑で、埋土は黒色粘質土で、炭粒を含んでいた。埋土中から弥生土器・



第99図 6区⑥ SK12～SK21、P34



第100図 6区⑥SK12・14・15、P34出土遺物

古式土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。埋土中の遺物や調査区内の遺物出土状況から、遺構の時期は弥生時代後期末頃と考える。

SK17（第99図） 調査区の中央からやや西寄りで、I 8 グリッドに位置する。IV層上面で検出しが、本来の掘り込み面は不明である。長さ 0.85m、幅 0.8m、深さ 0.15m の楕円形の土坑である。埋土中から弥生土器・古式土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。埋土中の遺物や調査区内の遺物出土状況などから、遺構の時期は弥生時代後期末頃と考える。

SK18（第99図） 調査区の中央からやや西寄りで、I 8 グリッドに位置する。IV層上面で検出しが、本来の掘り込み面は不明である。遺構の北側については、検出以前に掘削した排水溝のためにもとの形状が失われており、現状で長さ 1.15m、幅 0.75m、深さ 0.15m の規模を持つ。埋土中から弥生土器・古式土師器片が出土しているが、小片のため図化していない。埋土中の遺物や調査区内の遺物出土状況などから、遺構の時期は弥生時代後期末頃と考える。

SK19（第99図） 調査区の西側、H 6 グリッドに位置する。IV層上面で検出したが、本来の掘り

込み面は不明である。遺構の北側については、検出以前に掘削した排水溝のためにもとの形状が失われており、現状で長さ 1m、幅 0.5m、深さ 0.12m の規模を持つ。遺物が出土していないため時期は不明確だが、調査区内の遺物出土状況などから、弥生時代後期末頃と考える。

SK20（第99図） 調査区の西側、H 6 グリッドに位置する。IV層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。長さ 1.2m、幅 0.57m、深さ 0.06m の不整梢円形の土坑である。遺物がないため時期は不明確だが、調査区内の遺物出土状況などから弥生時代後期末頃と考える。

SK21（第99図） 調査区の中央、I 9 グリッドに位置する。VI層上面で検出した（ここにはもとからV層はなかった）が、本来の掘り込み面は不明である。長さ 1.2m、幅 0.8m、深さ 0.18m の不整梢円形の土坑である。遺物が出土していないため時期は不明確だが、調査区内の遺物出土状況などから、弥生時代後期末頃と考える。

P34（第99・100図） 調査区の西寄り、H 7 グリッドに位置する。V層上面で検出したが、本来の掘り込み面は不明である。長さ 0.45m、幅 0.54m、深さ 0.08m の不整円形のピットである。遺構埋土から遺物は出土していないが、IV層掘削中にこの遺構とほぼ重複する位置で 9～11 が出土している。9・10 は古式土師器の甕である。9 は口縁部に波状文が、肩部には平行直線文と波状文が施されている。10 は口縁部がやや外反し、端部がすぼまり気味のもので、肩部には平行直線文と刺突文が巡る。これらは草田 4～5 期に位置付けられよう。11 は低脚環で、环部底面は焼成後に穿孔されている。出土遺物から、この遺構の時期は弥生時代後期末頃と考える。

⑤土器群

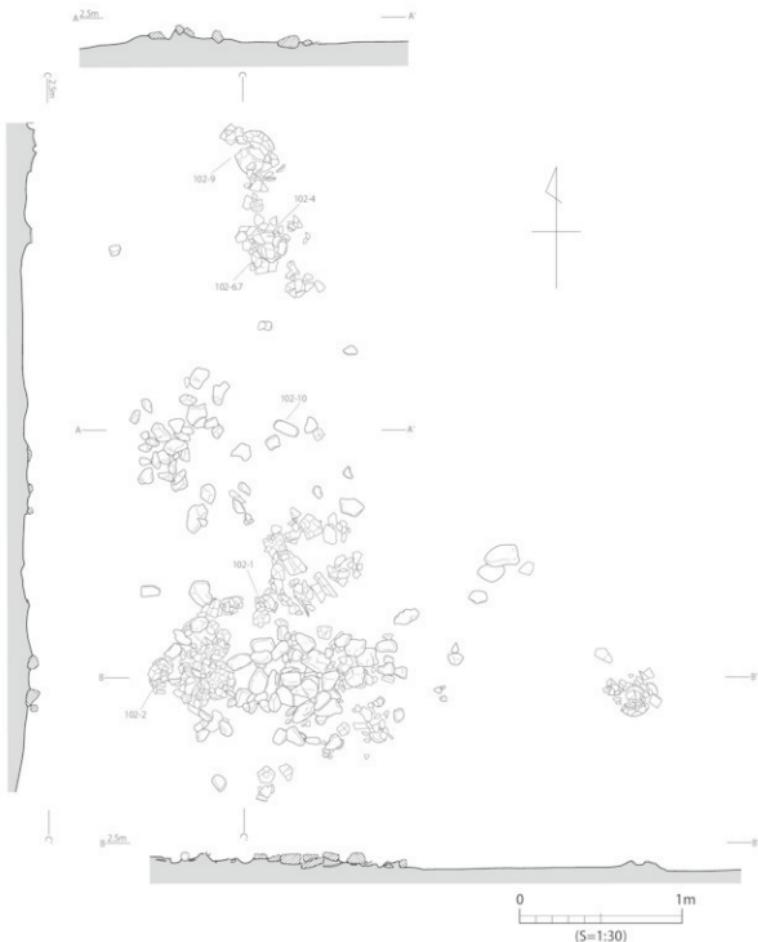
ここでは土器群のうち、溝や土坑と共に存、重複していないものについて述べることとする。

土器群 1（第101・102図）

検出状況 調査区の中央からやや東寄りで、J 10・K 10 グリッドに位置し、南側で SB01 の北掘り方と接続している。IV層掘削中に南北 4.2m、東西 3.1m の範囲で土器や拳大から人頭大の礫が密集している様子が確認できた。遺物の検出レベルは標高約 2.35～2.4m で、高低差はあまりなく、水平に近い。土器群の南寄りで礫を敷き並べたような部分が認められた。土器は細片化しているものが多く、遺物の出土量の割には器形が復元できたものは少なかった。

出土遺物 1・2 は古式土師器の甕で、口縁端部が若干外側につまみ出されたかたちになっている。2 は口縁端部が丸みを持つもので、肩部には平行直線文や波状文が巡る。肩部が横方向に強く張り出しているため、注口土器であったかもしれない。3 は注口土器で、注口先端がすぼまるものである。4 は口縁部が内傾する壺で、端部が若干外側に開く。5 は甕もしくは壺の底部で、痕跡的な平底を持つ。6・7 は高環で、6 は身が浅く、口縁部が大きく開く環部で、环底部に充填された円盤に刺突は見られない。7 は脚部で、裾がラッパ状に広がる。8 は、口縁部に 2 条の凹線を持つ、底部が平底の鉢で、在地ではあまり見られない器形をしている。9 は鼓形器台である。これらの土器は、草田 5～6 期のものと考えられる。

10・11 は石製品である。10 は石杵状のもので、両端部は使用により磨り減って平坦面が形成され、部分的には敲打に伴う小さな剝離痕も見られる。使用面は薄く赤みを帯び、窪んだ部分には朱のようなものが観察されたため、蛍光 X 線分析を行ったところ、水銀の元素が検出された。このことから、水銀朱の精製で鉛石の粉砕等に使用されたと考えられる。11 は叩石で、各面で敲打による平坦面や窪みが存在する。

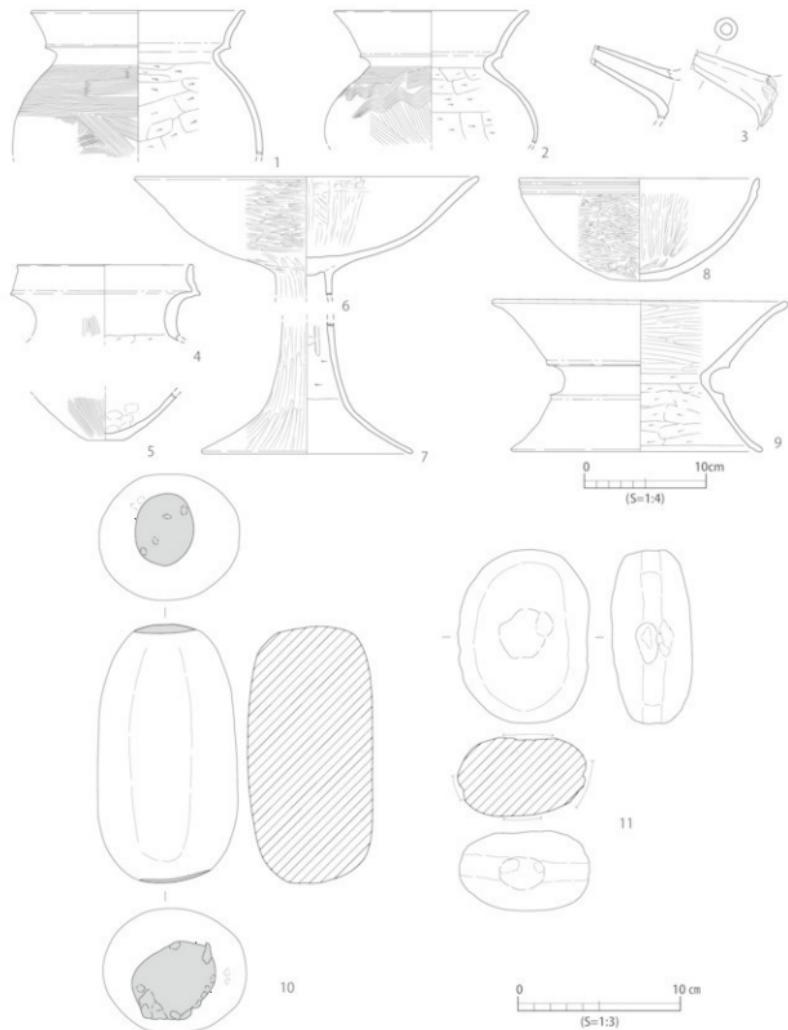


第 101 図 6 区⑥土器群 1

時期と性格 出土遺物から弥生時代後期末頃の土器群で、遺物のレベル差があまりないことや、土器群の南寄りで礫を敷き並べたような部分が認められたことから、これらはある時期の生活面で遺棄されたものと考えられる。検出面の標高は、第 47 図の土層から推測される SB01 の掘り込みよりもやや高く、柱根残存部上端と近いことから、土器群の形成時期は建物構築後で、建物存立時から建物廃絶後でもあまり時間を置かない段階であったと推測する。

土器群 11（第 103 ~ 110 図）

検出状況 調査区の西端、G 6・H 6 グリッドに位置している。IV 層掘削中に、南北約 8 m、東



第102図 6区⑥土器群1出土遺物

西約5mの範囲で土器が集中しており、さらにこの西側の調査区外にも土器の分布は続いているようである。遺物が出土したレベルは標高2.35～2.5mであった。V層上面の地形をみると、調査区西側は南北が高く、中央が東西方向に低くくぼんだかたちになっており、ここに土器群が位置することが分かる。

出土遺物（第104～110図）1～38は在地で一般的に見られる器形の古式土師器の表である。

1～5は肩部にヘラ描き沈線文と刺突文が巡り、6～19・22は肩部に平行直線文と刺突文が施されている。1～3・13・17は刺突が2段のもので、14は刺突が3段のものである。4・14・18は、刺突文に右下がりと左下がりの切り返しが行われている。21・23～30は肩部に波状文が施されたもので、27には刺突文が、24～26には平行直線文が、21・23・29・30は刺突文と平行直線文の両方が加わる。24・27は波状文の間隔が密で、振幅が大きく見える。31・32・37は肩部の文様が平行直線文のみのものである。37は5条1単位の櫛状工具で4段に施文したもので、沈線の幅は広い。33・34は口縁部に波状文が施されている。

口縁部の形態は、①外反しながら端部に向かってそぼまるもの（1・2・12・24・34）、②端部を丸く収めるもの（3・5～7・9～11・13～15・18・19・21・25・26・30～33）、③端部が外側につまみ出されたり、上方に向けて面を持ったりするもの（17・22・28・35・）、④端部が肥厚し、外側に向けて面を持つもの（16）があり、特に②が多い傾向にある。①が草田4期、②が草田5期、③が草田6期、④が草田7期に相当するものと考える。

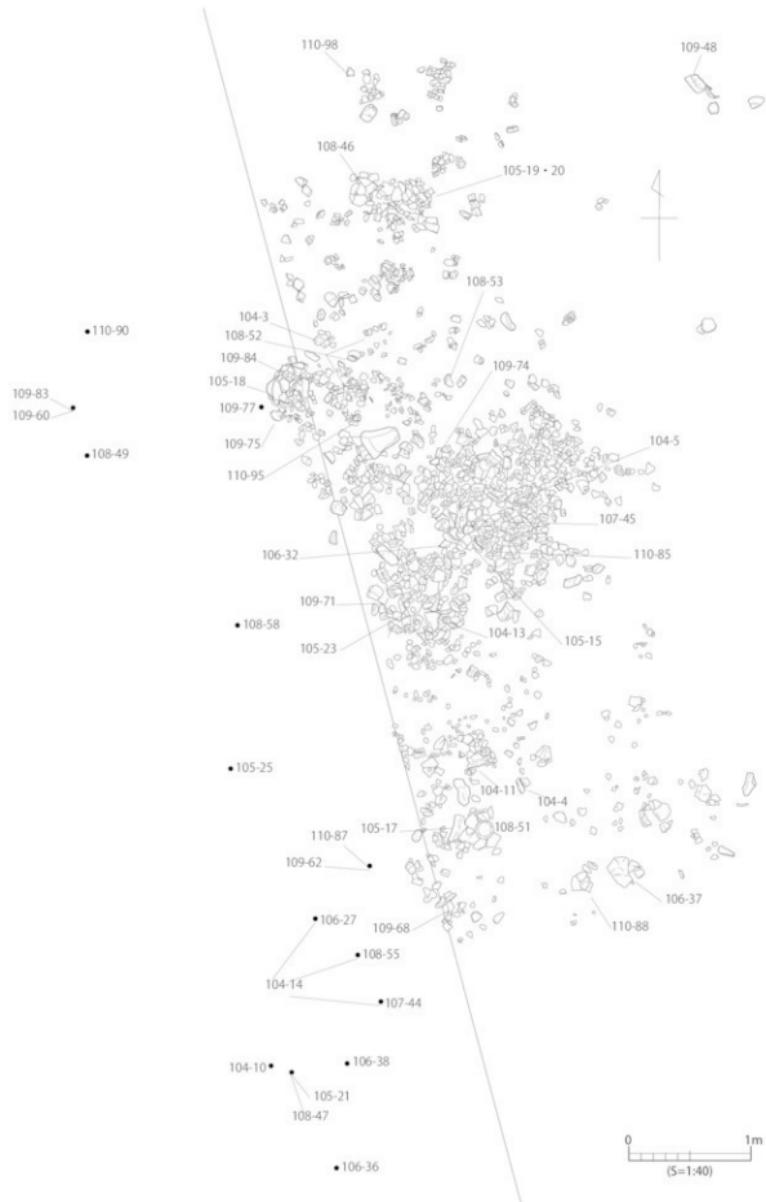
38は胴部中位から底部が残り、底部には痕跡的な平底を持つ。草田5～6期のものであろう。

19は焼成後、胴部中位に1cm大の穿孔がなされていた。20は19と同じ地点で出土したもので、接点は見られなかったが19と同一個体の可能性がある。底部を欠いているが、意図的に破損されたものかもしれない。

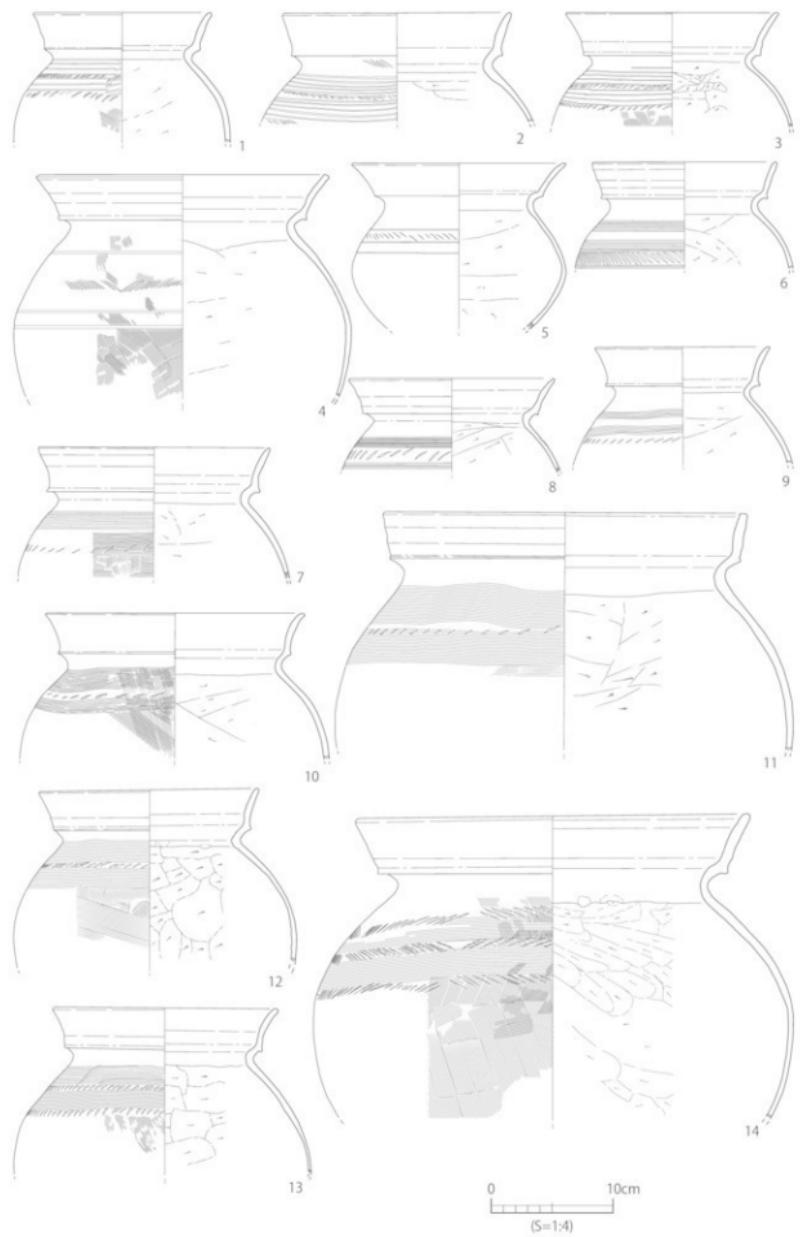
39～45は在地ではあまり見られない器形をした甕で、外来系の可能性がある。39は、口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、弱い凹線文を持つもので、吉備系土器の才の町II式（岡山県教育委員会 1977）に相当するものとみる。40は口縁部がやや短く外反するもので、口縁部には間隔の狭い波状文が、頸部には平行直線文が施されている。41は短く立ち上がる口縁部の外面に強いナデが入り、凹面を持つもの、42は口縁部が途中で屈折して外側へ開くものである。これらは在地の土器と比べて厚みがあり、シャープさに欠けたもので、中国山地系の土器とみられる。43～45は単純口縁の甕で、西部瀬戸内系のものと考えられる。器壁は厚手で、胎土は在地のものと比べて粗い傾向にある。底部の形態は、44は平底で、45は丸底である。

46～53は古式土師器の壺である。46～48は口縁部が外傾して開くもので、口縁端部は丸く収めており、草田5期に位置付けられよう。46・47・49は頸部に無軸の羽状文を持つ。肩部の文様は、46・47は平行直線文と波状文が、49にはヘラ状工具による刺突文が巡る。50・51は口縁部が内傾するものである。51は口縁部の内傾度が大きく、外面には凹線文やヘラ状工具による刺突文が施されており、在地ではあまり見られないものである。ただし、肩部の文様や胎土は在地の壺と同様のものであり、他地域の影響を受けながら在地で製作されたものと考える。52～55は西部瀬戸内系のものである。52は口縁部が短く立ち上がり、頸部には刺突文を持つ断面三角形の突帯が巡る。体部は球胴状で、底部は平底である。53・54も頸部に突帯を持つもので、54の突帯は丸みを帯びた断面形をしている。52～54は胴部内外面をハケ目調整している。55は外反しながら開く口縁部で、端部には刺突文が施されている。これらの土器は、在地のものと比較して赤みを帯びた色調で、胎土に砂粒を多く含んでいる。

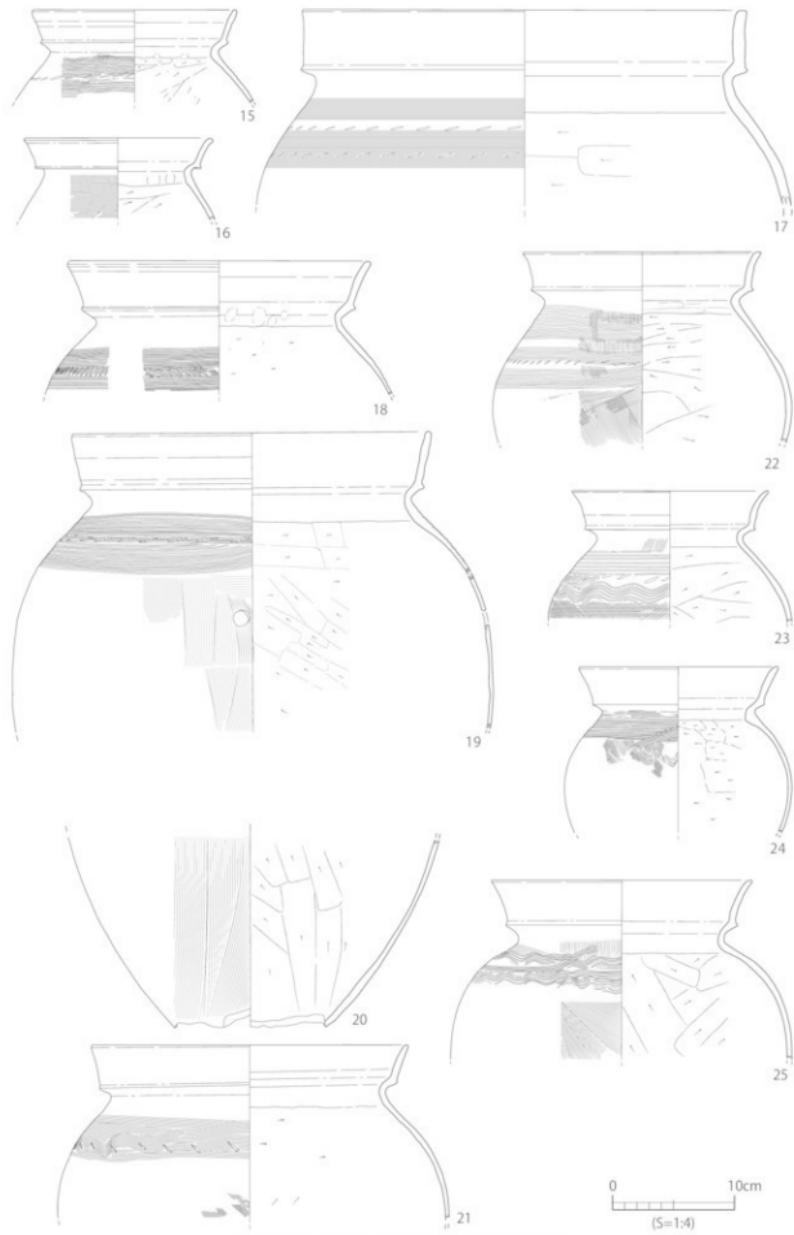
56～58は底部の破片である。56は外面に煤が付着し、小さな平底を持つもので、弥生時代後期末頃の甕であろう。57はやや大きな平底で、煤が付着しておらず、弥生時代後期後葉～末頃の壺の底部とみても差し支えなさそうである。58は厚みのある底部で、底面はややくぼみ、外面に



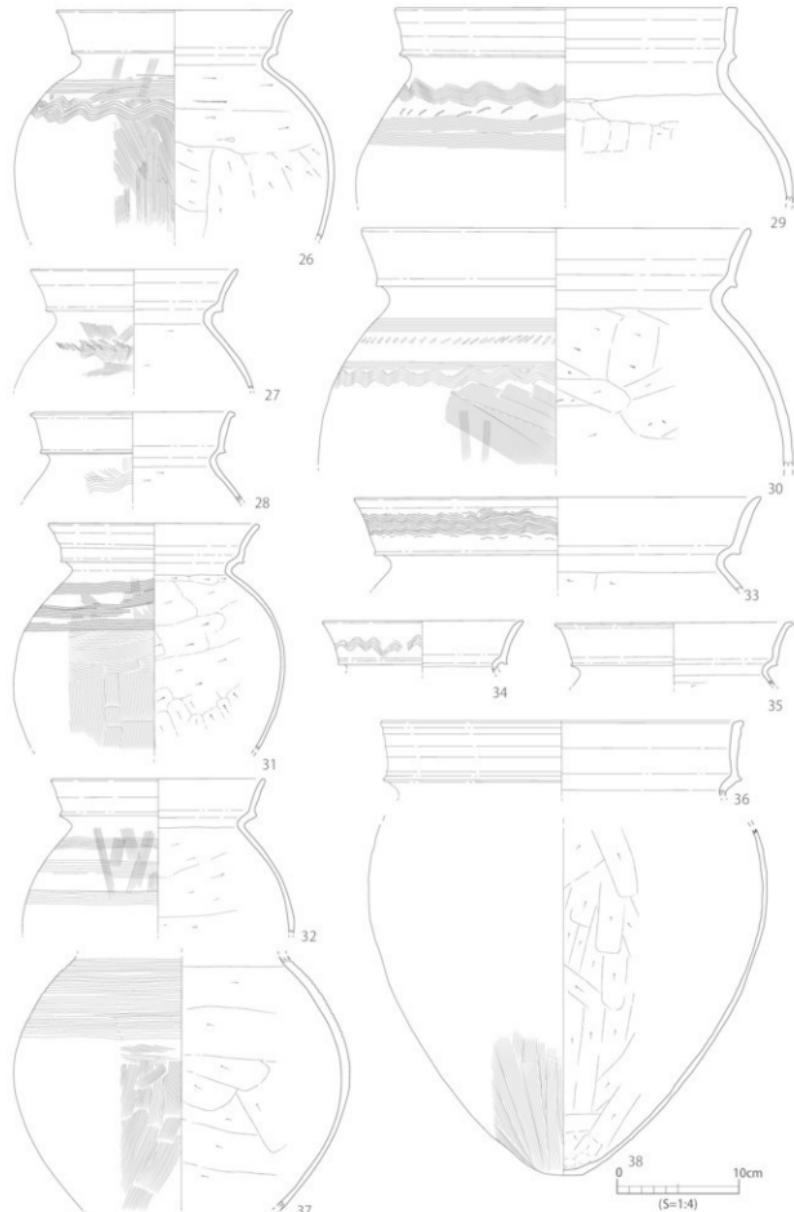
第103図 6区⑥土器群11



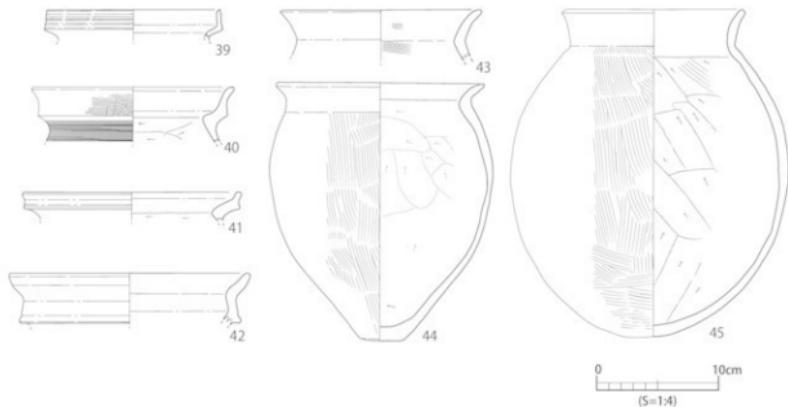
第 104 図 6 区⑥土器群 11 出土遺物 (1)



第105図 6区⑥土器群11出土遺物（2）



第106図 6区⑥土器群11出土遺物（3）



第107図 6区⑥土器群11出土遺物（4）

は煤が付着する。56・57より時期が古そうであり、上器群に混入したのかもしれない。

59～65は小型の壺である。器形から59・60・62は脚付短頸壺、64は脚付無頸壺と考えられる。59は沈線間に貝殻刺突文と鋸歯文が、60は沈線間に3段の刺突文が施されている。61は平行直線文の間に貝殻刺突文が、63は体部上半に波状文が入る。62は無文で、口縁部には2孔1対の孔を持つ。65は脚部が短く直立気味に立ち上がるもので、内面に指頭圧痕があることから壺の脚部と判断した。66は半球形の蓋で、62のような壺とセットで用いられたものと考える。

67は口縁部上半が短く立ち上がる鉢で、外面には煤が付着している。当地域では見られない土器で、但馬・丹後地方の土器と考えられる。

68～80は高坏である。68～71は坏部が浅く、口縁部が外反しながら大きく聞くものである。坏部の上側が残っていないが、74・75も同様の器形であろう。68・69・74・75の坏部底面に円盤が充填されており、円盤の中央には刺突痕が見られる。72・73は口径に対して坏部に深みがあるので、72については大型の低脚坏か脚付鉢とすべきかもしれない。77～79は脚部が八の字状に聞くもので、77・78には円形の透孔を持つ。坏部上半は残っていないが、68などよりも深みがありそうである。80は筒状に直線的にのびる脚部で、在地では見られない器形をしている。

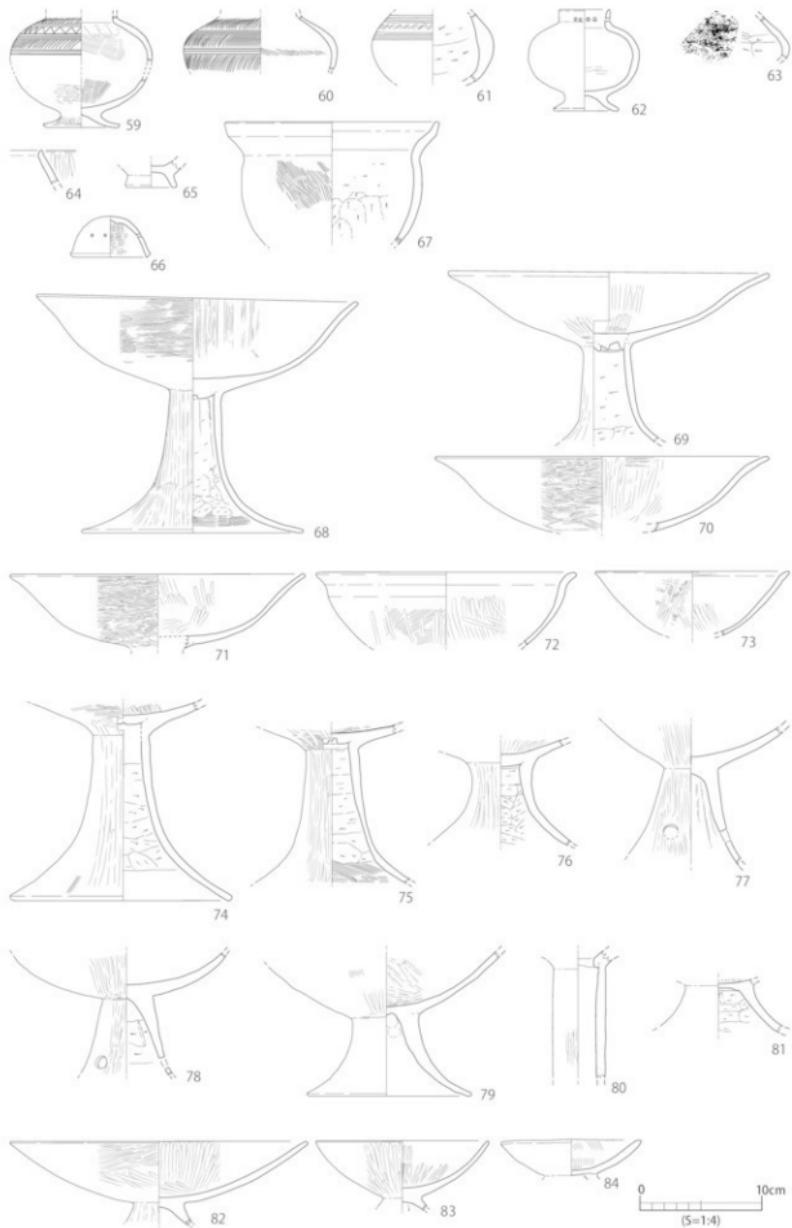
81～84は低脚坏である。81は大型の脚部を持つもの、82は身が浅く、口径が大きいもの、83・84は身の深さに対し、口径が小さいものである。

85～93は器台である。85は受部に平行直線文、筒部に羽状文が巡る脚部は無文である。86は外面に赤色顔料（水銀朱）が塗布され、脚部にヘラ描きの沈線が入る。87は筒部に沈線と羽状文が、脚部に平行直線文を持つ。89は脚部に貝殻刺突文が入る。88・90は受部・脚部に平行直線文が施されるが、なでられて文様は消されかかっている。91～93は無文である。

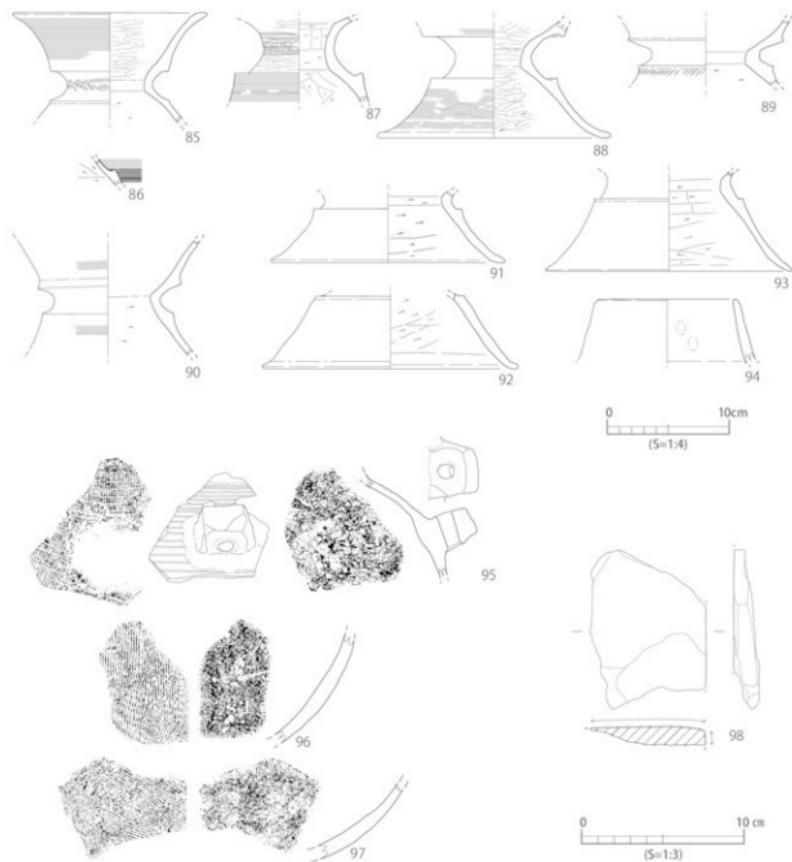
95～97は朝鮮半島系の三韓土器である。いずれも外面は細かい平行タタキで調整され、焼成、胎土がよく似ていることから同一個体の可能性が高い。なお、この土器群ではもう1点三韓土器が出土したが、小片のため写真のみ掲載した。95は耳付短頸壺の体部上半の破片で、縦方向に穿孔された台形状の耳を持つ。縦方向にタタキ目が入り、横方向に螺旋状の沈線が巡る。残存部の



第108図 6区⑥土器群 11出土遺物（5）



第109図 6区⑥土器群 11出土遺物 (6)



第110図 6区⑥土器群11出土遺物(7)

上端はタタキ目がなで消されており、ここから口縁部が立ち上がるものと考えられる。96は胴部下半の破片で、縦方向のタタキ目が入る。97は底部の破片で、いろいろな方向のタタキ目が重なり合っている。96・97の内面には無文の當て具痕が残る。

98は砥石で、欠損部位が大きいが、上面と右側面に砥面が残る

時期と性格 出土遺物から弥生時代後期末～古墳時代前期初頭頃に形成されたと考える。この地点は、V層上面では低く落ち込んだかたちになっており、こうした地形を利用して土器などを廃棄していたものと推測する。

土器群12（第111・112図）

調査区の南西隅付近、H 7 グリッドでIV層掘削中に検出した。土器は東西 1.4 m の範囲で分布しており、西側では弥生土器の壺が口縁部を伏せた状態で置かれ（1）、その付近に胴部～底部の

破片（2）が出土している。東側では古式土師器の壺（3）が口縁部を斜め下に向けており、その南では器台の破片（4）が受部と脚部をそろえた状態で検出された。この土器群に伴う遺構は確認できなかった。

1は、口縁部に平行直線文を持つ弥生土器の壺で、草田3期、V-3様式のものである。2は壺の底部で、出土位置から1と同一個体の可能性が高いが、接合できなかった。3は古式土師器の壺で、口縁端部は上に面を向け、肩部には平行直線文と刺突文が巡る。草田6期頃のものと推測される。4は鼓形器台で、筒部が短いことから、4とほぼ同時期のものであろう。

以上から、西側で検出したものは弥生時代後期後葉に、東側のものは弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に位置付けられる。時期の異なるものが偶然に近い場所で廃棄されたものであろう。

⑥その他の遺構

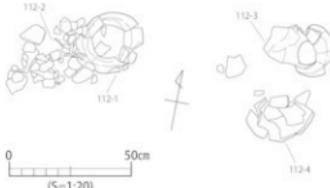
杭列9（第113図）

調査区中央部の北側、19グリッドでIV層掘削中に検出した。2本の杭が2.6mの間隔で立っているものである。杭は径8～10cmとやや太めのものであり、検出当初は建物跡などに伴う柱根の可能性も考えたが、柱穴は検出されず、先端を加工して尖らせていることから、杭として打ち込まれたことは確実であろう。これらがどのように使用されたか不明であるが、何らかの構築物に伴うものとみられる。杭列9の時期は、第113図1の放射性炭素年代測定から、補正¹⁴C年代で1,910±30（曆年較正年代で21AD～140AD、149AD～172AD、194AD～210AD）というデータが得られており、弥生時代後期～末頃の可能性がある。

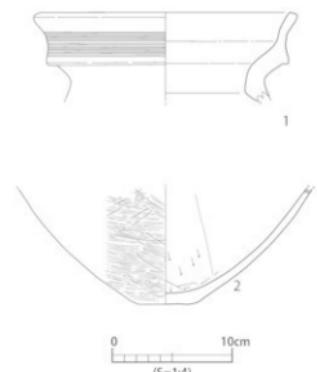
（2）遺構に伴わない遺物（第114～123図）

①弥生土器・古式土師器（第114～120図）

1～14は弥生土器の表である。1は口縁部が内傾し、6条の凹線が施されたもので、V-1様式に位置付けられる。2～4・6～10は外反する口縁部に平行直線文が入り、5は口縁部に波状文が施されたも



第111図 6区⑥土器群12



第112図 6区⑥土器群12出土遺物

ので、これらはV-3様式、草田3期に属する。2~7・9は肩部に貝殻刺突文や、貝殻刺突による羽状文を持ち、8は肩部に平行直線文と波状文を巡らせている。11~14は口縁部が無文であるが、やや短く厚みがあるもので、これらはV-3様式~V-4様式でも古い様相を示すものと考える。

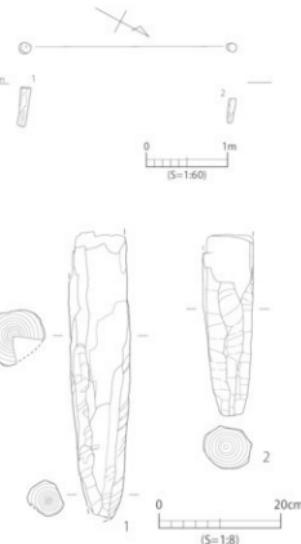
15~36は古式土器の複合口縁甕である。口縁部の形態は、①外反しながらのびて、端部が小さくすぼまるもの(15~22)、②端部を丸く收めるもの(23~30)、③端部がつまみ出されたり、面を持つもの(31~35)、④短く直線的に立ち上がり、面を持つもの(36)が見られる。①は草田4期、②は草田5期、③は草田6~7期、④は小谷3式以降に相当すると考える。肩部の文様は、肩部にヘラ描き沈線と貝殻刺突文や貝殻羽状文が巡るもの(15・18・22)、刺突文や羽状文が巡るもの(23・24・26・27・32・34・35)、波状文が巡るもの(16・17・21・25・28・31・33・36)がある。24は右下がりの刺突と左下がりの刺突の切り返しがされており、36は波状文が1本の沈線で表現されている。35は痕跡的な平底を持つもので、外面は底部までハケ目が及んでいる。30は口径8cmの小型品である。

37~39は単純口縁の甕である。37は口縁部がやや内湾し、端部に面を持っており、肩部にはヘラ状工具による刺突文が巡るもの、38は口縁部がやや内湾し、端部が内側に肥厚するもので、これらは布留系の影響を受けたものである。39は口縁部が外反し、体部内面はケズリ調整されたもので、古墳時代中期まで下るかもしれない。40~42は体部にタタキ目が施されたものである。

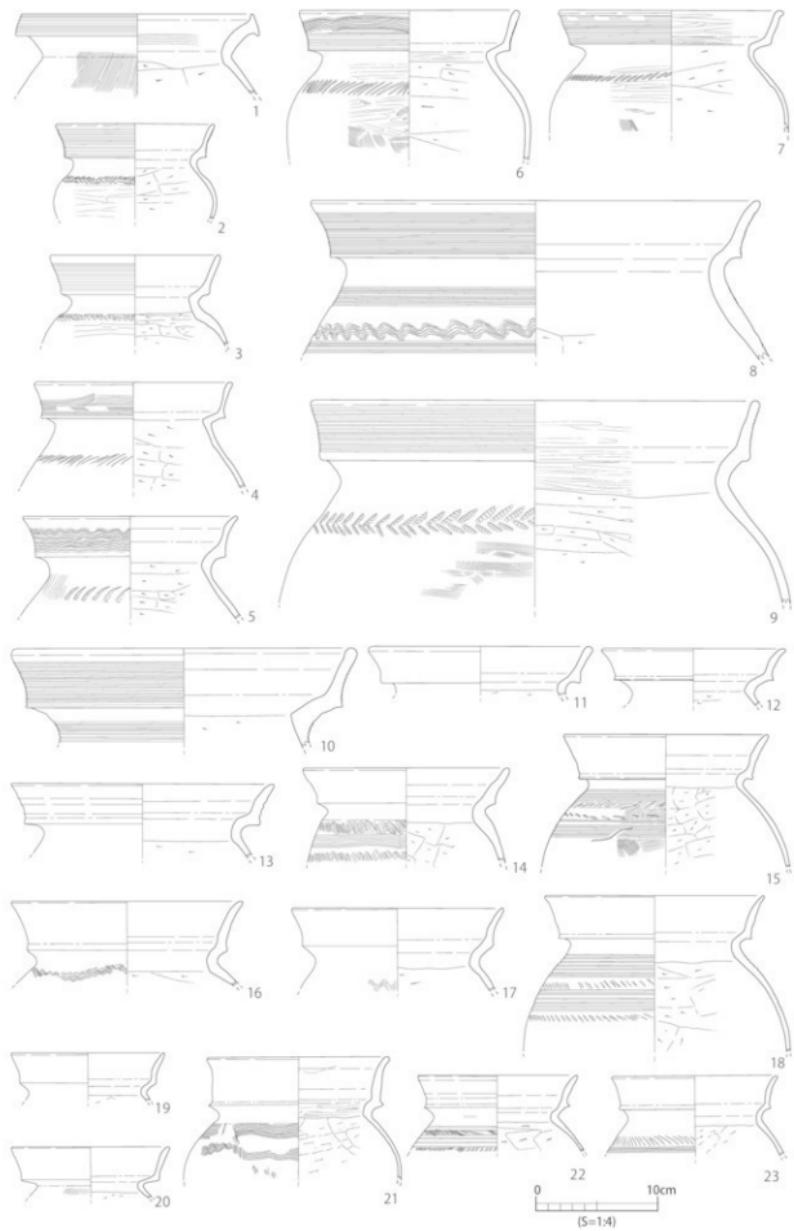
43~47是中国山地系の可能性がある甕で、在地のものと比べて全体的に粗い印象を受ける。43は口縁部が短く立ち上がり、外面に強いナデが入り、凹面状になるもので、口縁部内面下半部までケズリが入る。肩部にはヘラ状工具による刺突が巡る。44・45は複合口縁の甕であるが、内面に段を持たず直線的になり、ハケ目調整がされている。44は口縁部に平行直線文があり、45は無文のものである。46は口縁部内面の段が不明瞭で、肩部が張らない器形のもので、体部外面は縦方向のハケ目で調整されている。47は口縁部上半が屈折し内湾気味に開いている。

48~51は単純口縁の甕で、西部瀬戸内系と考えられるものである。48は肩部が丸みを持ち、口縁部が外反するもの、50・51は肩部が張らず、口縁部が短く立ち上がるもので、これらの体部内面はハケ目調整されている。49は、口縁部がやや内湾気味に開き、体部が倒卵形で、平底を持つものである。

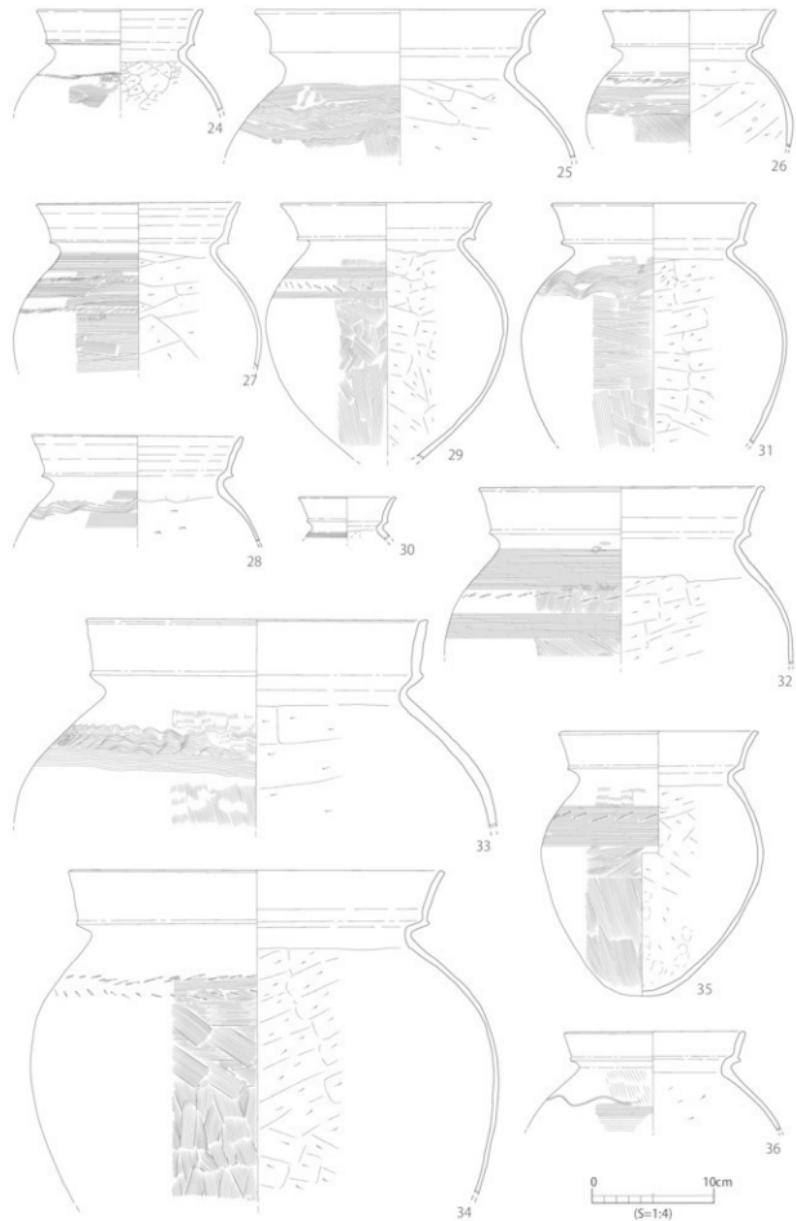
52~54は弥生土器の甕である。52は口縁端部の平坦面に櫛状工具による鋸歯文が施されている。III-1様式にあたるもので、VI層に含まれていたものが混入したのであろう。53・54はV-3様式の甕で、53は口縁部に波状文を、54は平行直線文を持つ。



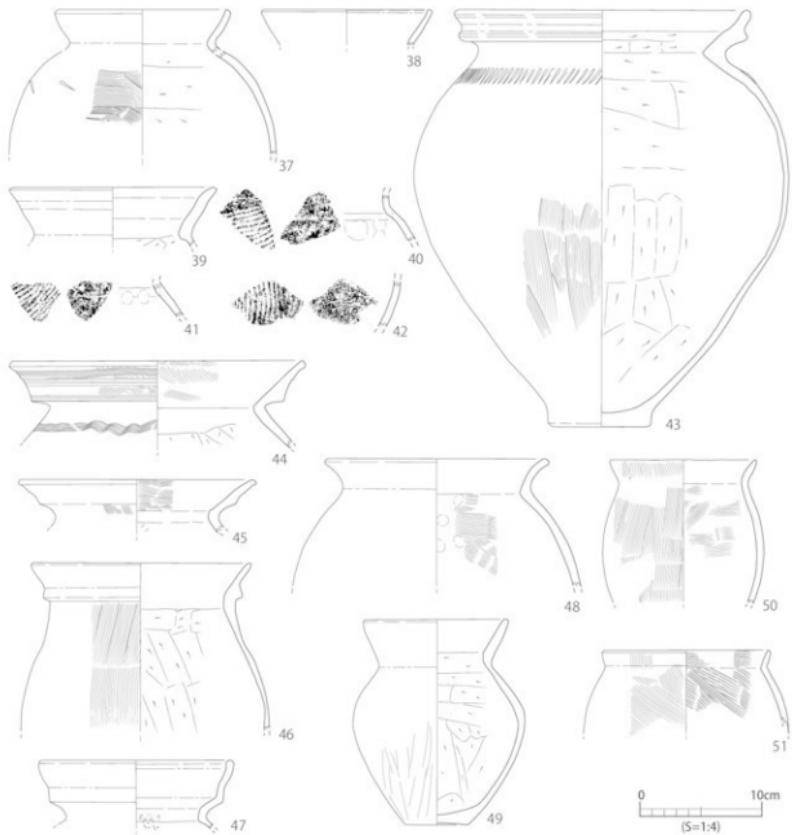
第113図 6区⑥杭列9



第114図 6区⑥IV層出土遺物(1)



第 115 図 6 区⑥IV 層出土遺物 (2)



第116図 6区⑥IV層出土遺物（3）

55～63は古式土師器の壺で、複合口縁のものである。55～58は口縁部が外反するもので、57は口縁部の外反度が大きく、口縁部下端が下方に突出するもので草田4期に、55・56は口縁端部が丸みを持つもので草田5期に、58は口縁端部が面を持つもので草田6～7期に位置付けられよう。59・60は口縁部が内傾している。59は端部が面を持ち、肥厚するもので、草田7期に相当する。60の口縁部は立ち上がりが短い。61は、肩部に2条の沈線で区画された内側を3段の貝殻羽状文が巡る。62は口縁部下端が垂下し、頸部は体部から屈折して短くのびるもの、63は口縁端部に刺突文を持ち、外面に櫛状工具による直線文が縦横に施されたものである。

64・65は西部瀬戸内系の壺である。64は口縁部下端～頸部の破片で、口縁部下端の突出部に刺突文を持ち、口縁部上半は剥離している。65は頸部の付け根に断面三角形の突帯が巡る。

66～71は壺もしくは甕の底部である。67・68は比較的明瞭な平底を持つもので、草田4期以前のものとみられる。68は焼成後に底部が穿孔されている。69は丸底のもので、小谷式段階

のものである。70は底部が凸レンズ状に膨らむもので、底部外面には繊維状の圧痕が見られ、内面はヘラ状工具でなでられている。71・72は内面にミガキ調整が見られることから、鉢の可能性もある。71は底部が上げ底状になっている。66・73は底部が厚手のものである。73は内外面に粗いハケ目調整がされており、西部瀬戸内系土器の可能性がある。

74～79は直口縁の壺である。74は頸部の付け根に刺突文が、75は口縁部に波状文が施されている。79は、口縁端部を外側に折り返して肥厚させている。

80・81は脚付装飾壺で、体部は算盤玉形で、多条のヘラ描沈線や平行直線文が施された複合口縁を持つ。体部の文様は沈線によって区画されており、80には爪形の刺突文や、鋸歯文、三角形の刺突文が、81には爪形の刺突文や、渦巻状のスタンプ文が施されている。両者の外面及び80の口縁部内面には水銀朱が塗布されている。

82～84は短頸壺、85は小型の壺胴部片、86は無頸壺で、いずれも脚部を持つ可能性がある。82は沈線で区画された内側に綾杉状の刺突が施されている。83は外面に水銀朱が塗布されたもの、84は体部が小さく、口縁部が短く立ち上がるもの、85は体部中位に稜を持ち、算盤玉形になるものである。

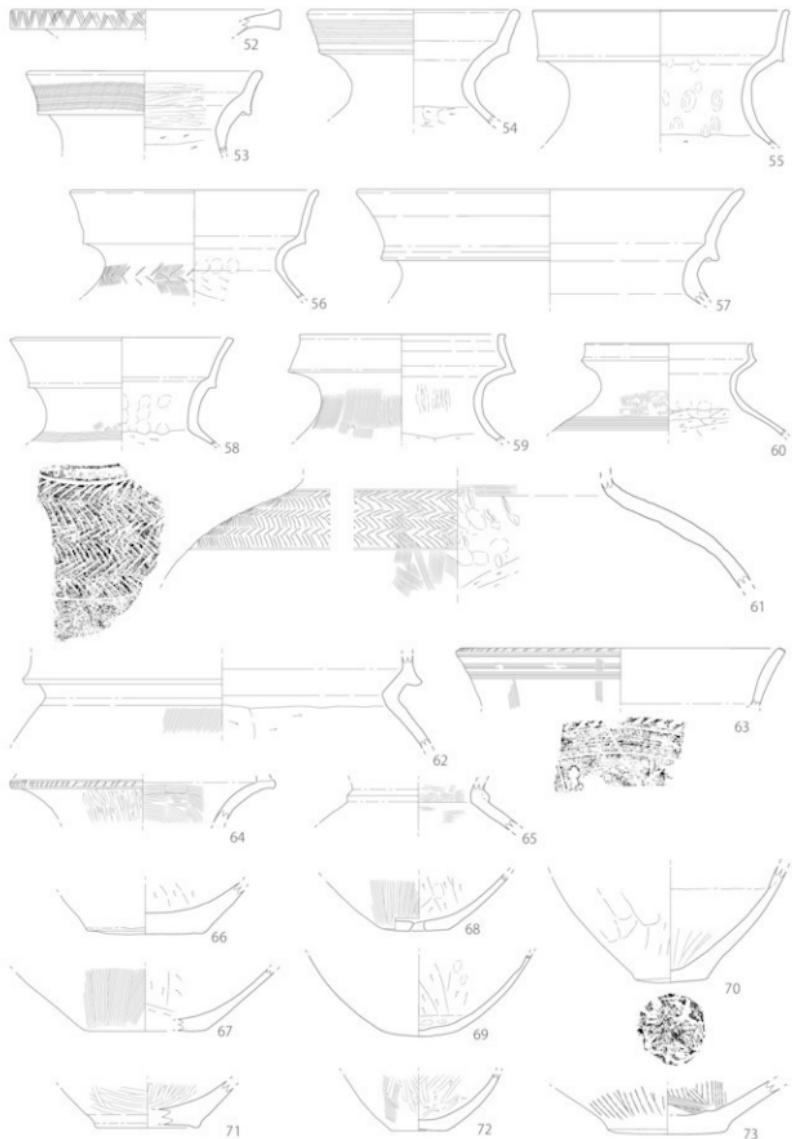
87～92は蓋で、87は盃を伏せたかたちをしており、88～92は半球形のものである。92は外面は沈線で区画した内側に綾杉状の刺突が施され、内面は丁寧に磨かれて黒色処理されている。

93～99は鉢形の上器である。93は複合口縁で平行直線文が施されたもので、V-3様式に位置付けられる。94は口縁部の下が強くなられて体部との境に稜を持つもの、95～97は口縁部が外反するもの、98はボウル形の器形をしたもので、96には片口が付く。97～99は、外面には煤が、内面に水銀朱の付着が見られることから水銀朱精製に用いられた容器と考えられる。95・96も器形から同様の用途を持つ可能性を考えたが、蛍光X線分析では水銀元素は検出されなかった。100は腹底部の形状であるが、内面には水銀朱が付着しており、外面にはわずかに煤が付着する。水銀朱の精製、もしくは保管に使用された可能性がある。

101～112は高杯である。101は口縁部が環部から水平に折れ曲がるもので、端部には刺突が施され、口縁部付け根に2つの穿孔が見られる。III様式のもので、VI層に含まれたものが土層の攪拌により混入したと考えられる。102は口縁部が屈折気味のもので、草田4期に相当のものと考える。103～106は环部は浅い皿状で、口径が大きいもので、108も同様の环部を持つものと考える。环部の底面は円盤充填技法で作られており、円盤の中心に刺突痕が1つ入る。これらは草田5～6期頃に位置付けられよう。106は外面に煤、内面には水銀朱の付着が認められ、水銀朱精製土器に転用されたものと考えられる。107は环部の大半を欠くが、103などと比べ体部が立ち上がり気味で、环部底面には多数の刺突痕が見られる。109は环身の深いもの、110は脚部が太く低いもので、これらは脚付鉢、大型の低脚杯とすべきかもしれない。112は、103などと比べ一回り小さく、やや赤みを帯びた色調をしており、古墳時代前期～中期まで下るものと考える。

113～122は低脚杯である。120は内外面とも丁寧に磨かれ、黒色処理されている。121は他と比べて脚部が大きく聞く。122は脚部と环部との間が大きく、器壁の厚いもので、脚部の内側はケズリ調整されている。通常の低脚杯とは異なるもので、他の器種の可能性もある。

123～127は弥生上器の器台である。123は外面に凹線や爪形の刺突による羽状文が施されており、IV様式に遡るものである。本来VI層に含まれたものが混入したと考えられる。脚部が筒抜

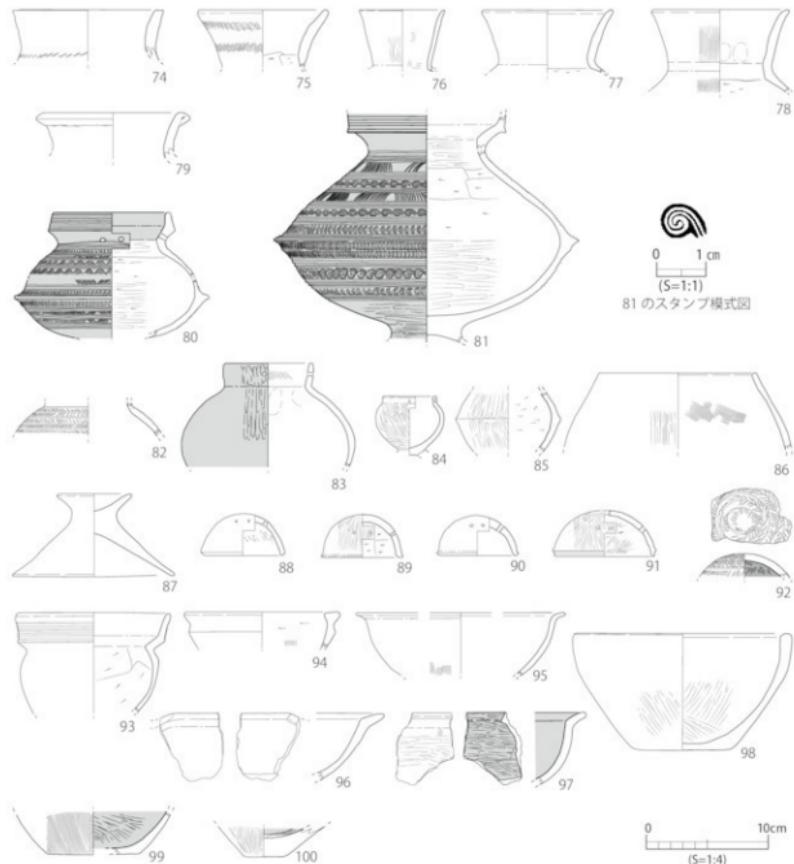


第117図 6区⑥IV層出土遺物 (4)

0 10cm
(S=1:4)

けになっているため器台としたが、高坏の脚部で坏部底の粘土が剥落したものかもしれない。124～127は、受部や脚部、筒部に文様を持つものでV-3様式に位置付けられる。125の外面全体と受部内面、127外面の筒部下位から脚裾部には水銀朱が塗布されている。127は脚裾部に文様がなく、筒部に対して短いもので、あまり見られない器形である。128～134は古式土師器の器台である。128・129は受部径が25cm以上、基底部径が23cm前後の大型のもの、130～132は基底部径が19.6～21.5cmの中型のもの、134は基底部径が10.8cmの極小型品である。132は脚部の稜が丸みを帯び、シャープさを欠いている。133は内面に段がなく、ミガキが施されていることから器台としたが、受部が極端に短く、異質なものである。

135～138は瓶形土器である。135は口縁部がすぼまり、体部との境には緩やかな段をなすもの、136・137は体部との境に突帶を持つものである。137は突帶の上部に接して横方向に把手が付く。



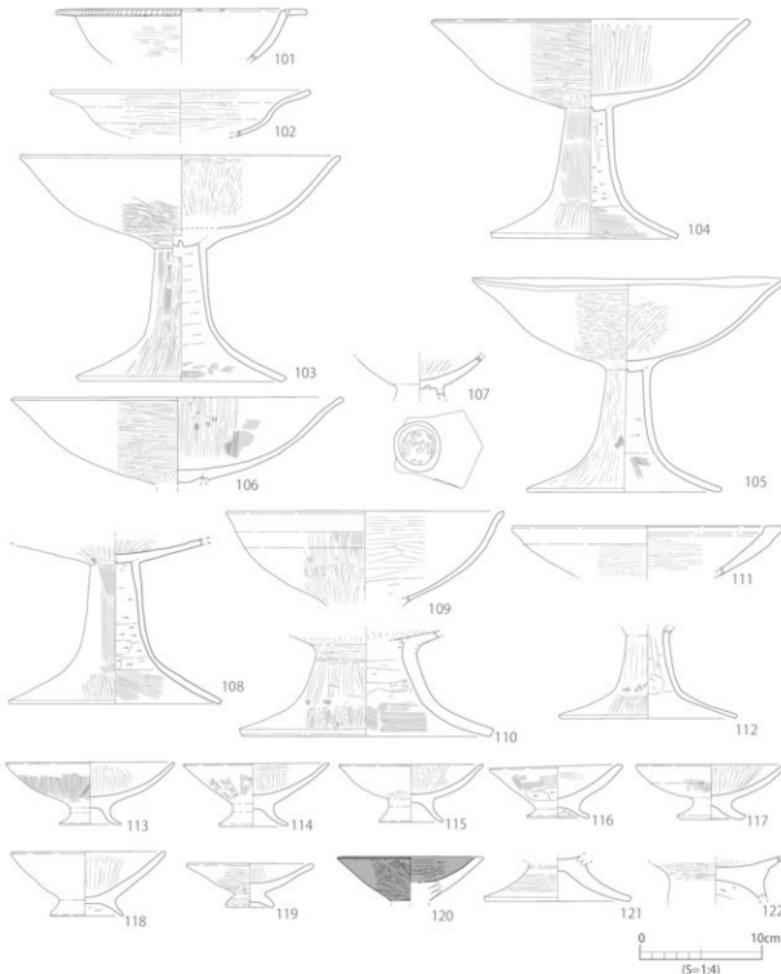
第118図 6区⑥IV層出土遺物（5）

138は基底部で、縦方向に把手が付くものである。

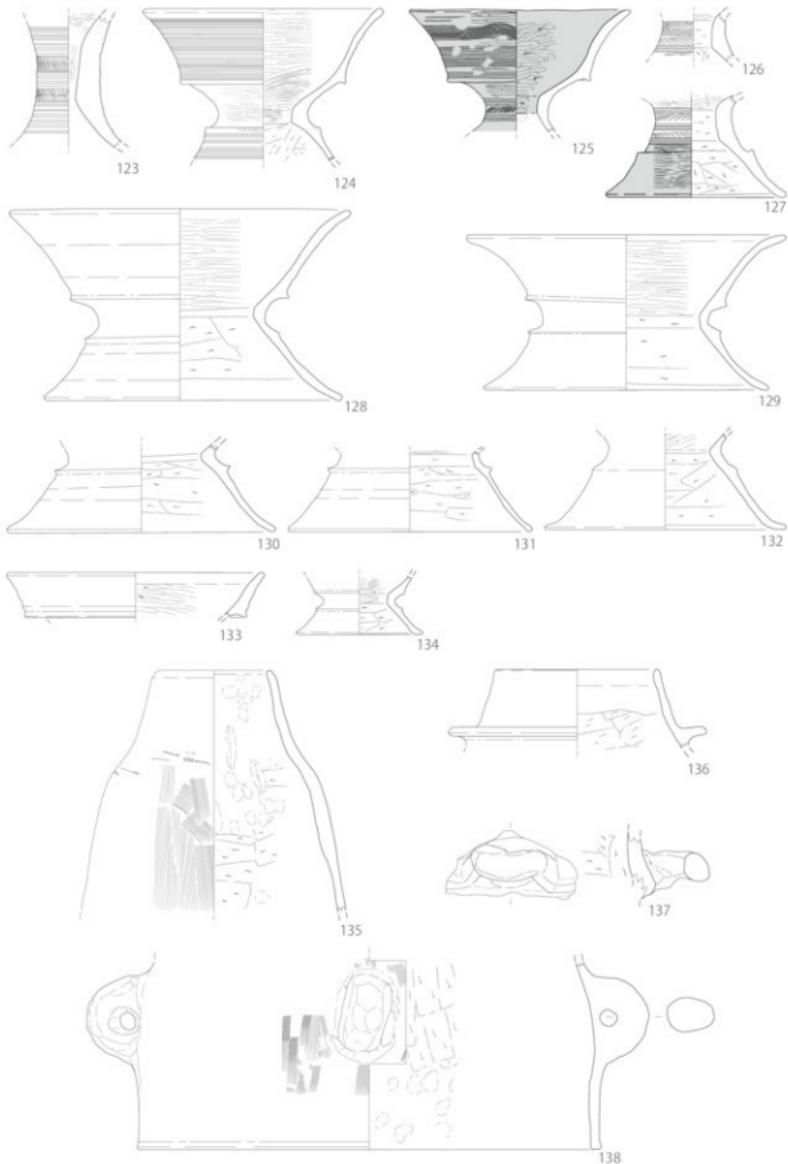
②朝鮮半島系の土器（第121図）

139は楽浪土器の短頸壺口縁部片で、外面には縦方向の縄目タタキが、内面には横方向に縄席状の当具痕が1次成形時に施され、それらが横方向のナデで消されかかっている。胎土は泥質で、緻密である。

140～149は三韓土器で、これらはいずれも第82図42と焼成・胎土が類似しており、同一



第119図 6区⑥IV層出土遺物（6）



第120図 6区⑥IV層出土遺物（7）

個体の可能性が高い。器種は耳付短頸壺である。140は直立気味に立ち上がる口縁部で、口径9.4cmと推定される。141～143は体部上半の破片で、外面には細かい斜格子目タタキが施され、横方向に螺旋状の沈線が巡る。144～148は体部中位から下位にかけての破片で、上部に細かい斜格子目タタキがされたのち、下部には粗い格子目タタキが入る。149は、把手が付けられた体部上半の破片で、外面は把手が剥がれ落ちて本来の器表面は残存しておらず、剥落部に斜格子目タタキ痕が部分的に観察できる。把手は器壁に孔をあけて差し込んだもので、断面形は円形に近い。長崎県原の辻遺跡では、体部に2孔の耳2つと環状の把手1つを取り付けた三韓土器の耳付短頸壺が出土しており（長崎県教育委員会2002）、これらもそうした器形になると考えられる。

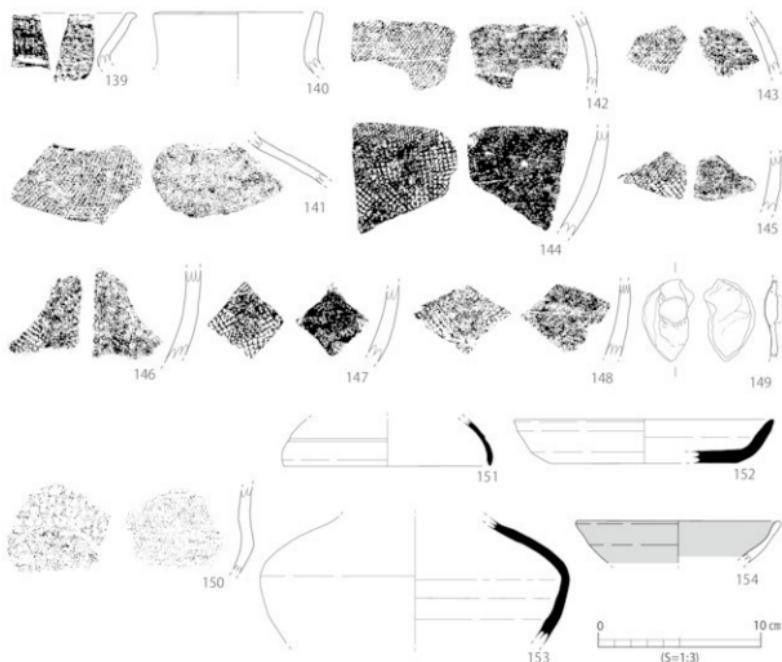
③その他の土器（第121図）

150は繩文土器の深鉢で、体部外面に押引刺突文が施されている。前期初頭の西川津式に相当する。本来はVI層に含まれたものが、土層の攪拌によりIV層に混入したのであろう。

151～153は須恵器である。151は坏蓋で、外面の体部と口縁部との境には1条の沈線が入る。152は皿で、体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。153は壺で、肩部は丸みを持つ。154は古代の土師器环で、内外面にはベンガラが塗布されている。

④土製品（第122図）

155～158は円盤状土製品である。表裏面はハケ目等で調整され、外縁は面取りされて整った



第121図 6区⑥IV層出土遺物（8）

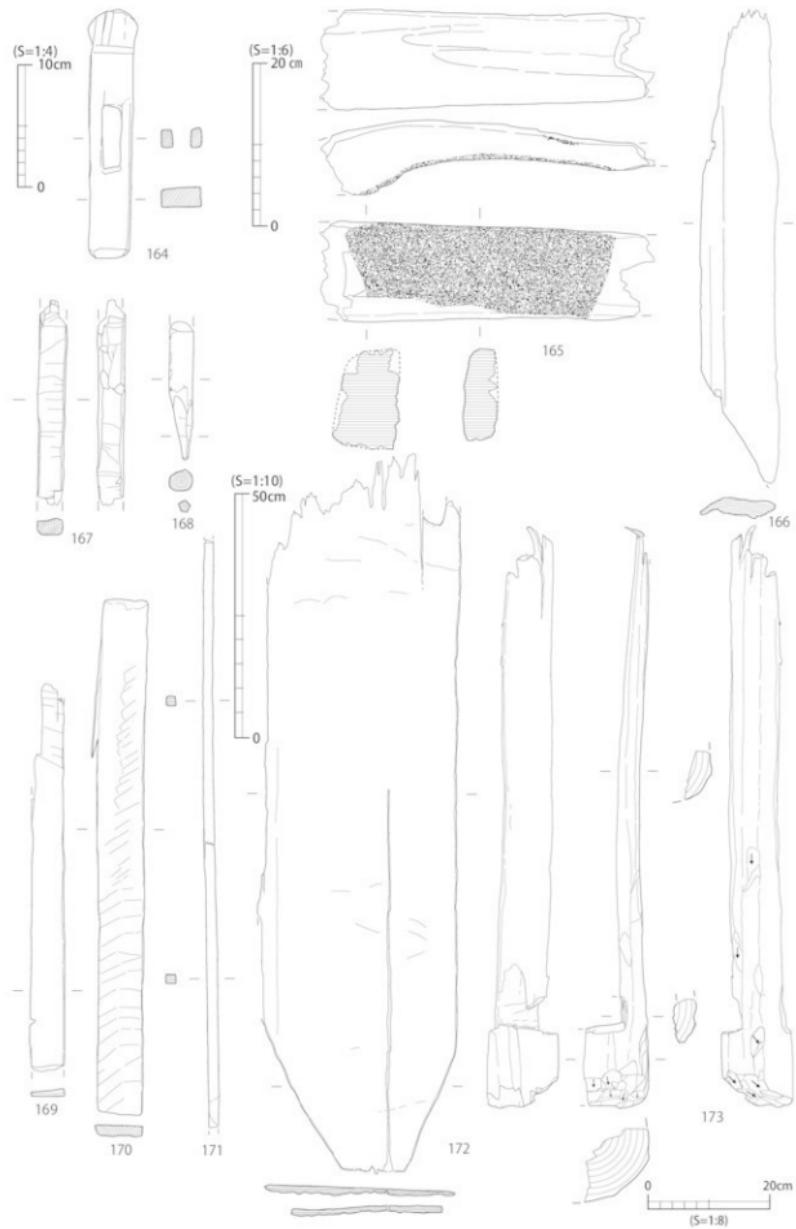


第122図 6区⑥IV層出土遺物（9）

円形をしている。これらの用途は不明である。159は土器片を打ち欠いて、円盤状に加工したものである。

⑤石製品（第122図）

160は叩石で、図の上下面には敲打痕や剥離があり、表裏面及び左右側面にも敲打によるくぼみが見られる。ただし、全体としては磨かれたかのように滑らかな面を持ち、下面是磨面として使用され平坦な面が形成されている。161・162は砥石である。161は砂岩質のもので、断面形は扁平な五角形を呈している。163は碧玉製の剥片で、管玉の未成品の可能性がある。



第123図 6区⑥IV層出土遺物 (10)

⑥木製品（第123図）

164は木栓である。スギ近似の板状の木材を加工したもので、頭部は丸みを持ち、身には方形の穴が穿たれている。165は下面が横から見ると弧状に加工されたもので、下面に焼け焦げた面が広く見られる。両端2か所に脚部を持つ腰掛の可能性もあるが、定かではない。166は板状木製品で、図手前側の側面は長辺に対し斜め方向に切り取られたかたちになっている。167は丸太材の表裏面を削り、面取りしたもの、168は杭状に先端を尖らせたものである。169・170は板状木製品で、169は左長側縁の下端寄りに抉りが入る。170は木目に対し斜め方向に削った加工痕が連続している。171は細長い角材状のものである。

172は矢板で、横たわった状態で出土した。幅40cm以上の板材の先端を斜めに切断して加工したもので、建物の壁板材などを転用した可能性もある。木取りは板目取りであり、この板材の原本はかなりの太さを持っていましたと推測される。173は一方の側面は弧状に加工された面を持ち、他の側面は粗く削られたままのもので、柱材を割って再加工したものと考える。図手前側の端部は周囲から切り込みが入れられており、その上部には縄掛け穴、もしくは柄穴と考えられる方形の穿孔があったようである。



第124図 6区⑥V・VI層掘削範囲

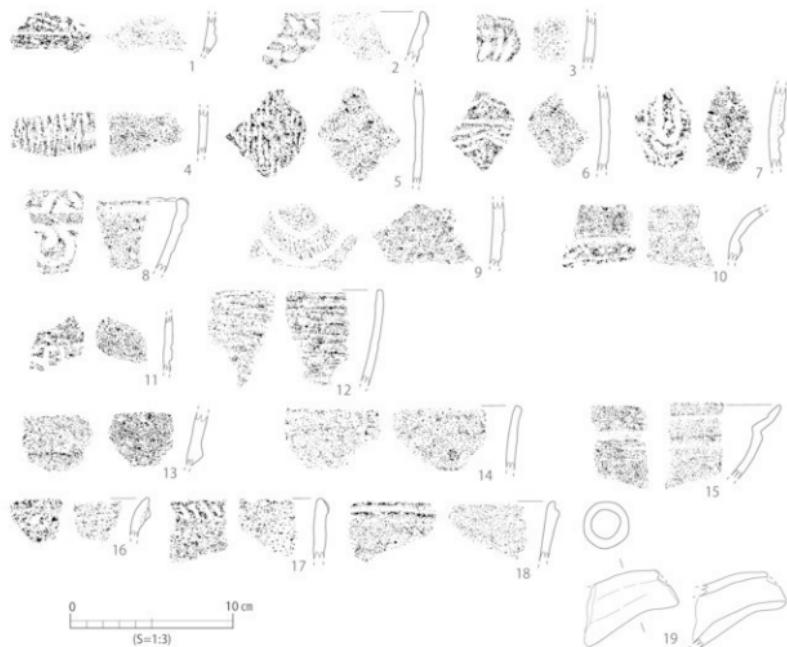
5. V・VI層の調査（第124～128図）

(1) 調査状況

既報の6区①・③・⑤・⑦では、V層の下に弥生時代後期中葉以前の遺物を含む砂礫層が確認されている。本調査区でも同様の層が存在するのか、どのような遺物の出土状況を示すのか、ということを確認するために、調査区西側の220m²でV層以下を掘削した。

V層ではほとんど遺物は出土しておらず、標高約2.2mで花崗岩質の砂礫層からなるVI層の上面を検出した。VI層上部では遺物はあまり見られなかったが、やや掘り下げたところで砂粒が粗く、礫を含むようになり、そこから下で遺物が出土するようになった。標高0m前後まで掘削したが、砂礫層は尽きることはなく、おそらくさらに数mは厚く堆積しているものと推測される。砂礫層は、その組成や範囲、深さから、斐伊川の堆積作用によるものと考えられる。

遺物は、今回の調査では縄文時代前期～弥生時代後期中葉のものが出土している。縄文土器は全般的に表面の摩耗が著しいが、弥生土器はあまり摩耗しておらず、特に後期のものについては良好な残存状態であった。こうした傾向は既往の調査とほぼ同様である。VI層の堆積時期は、それに含まれる最も新しい遺物から弥生時代後期中葉と判断できる。



第125図 6区⑥VI層出土縄文土器

(2) 出土遺物

① 縄文土器（第125図）⁵

図示したものはいずれもVI層から出土した。

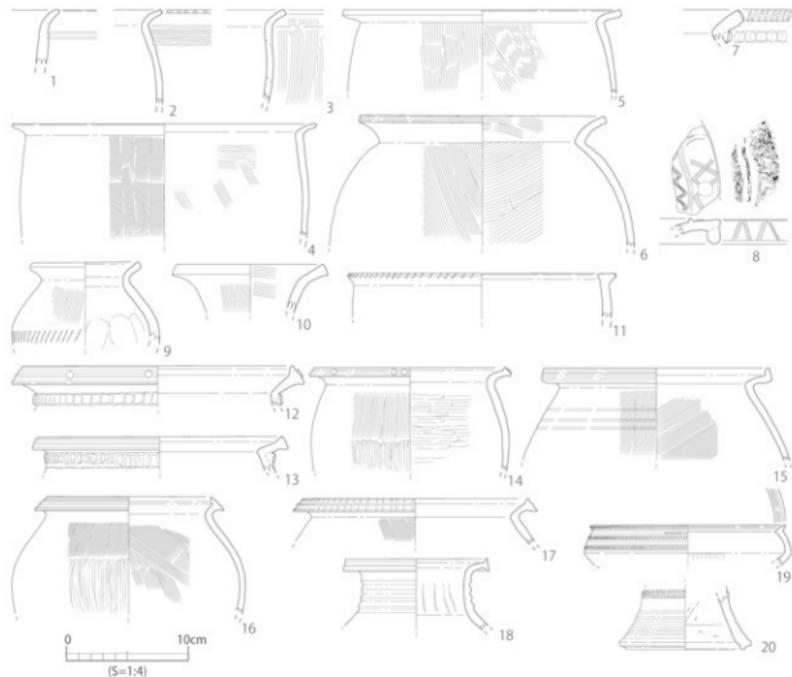
1～3は前期のものである。1は押引刺突文が施されたもので、縄文時代前期の西川津式に相当する。2は刺突文や押引文が施された深鉢で、月崎下層式、縄文時代前期後葉に位置付けられる。3は、前期中葉の羽鳥下層II式のもので、体部に爪形文が入る。

4～7は中期ものと考えられる。4は縄文が施されたもので、中期前半の船元式の可能性がある。5は撚糸文が入るもの、6は横方向の沈線とその下に連続して弧状の沈線を持つもので、これらは中期後半の里木II～III式のものとみられる。7は縦方向の隆帯とそれを取り巻くように3条の沈線が施されている。

8～12は後期のものと考えられる。8は口縁部に渦巻状の沈線、端部に刺突文を持つもの、9は渦巻状の磨消糸文が施されたもので、五明田～暮地式のものとみられる。10は頸部に刺突された突帯を持つ鉢で、崎ヶ鼻式の可能性がある。11は沈線や撚糸文が施されており、権現山式の新段階のものであろうか。12は外面に条痕の入る粗製深鉢で、体部から口縁部にかけて内湾する。

13～18は晩期のものである。13は口縁部に権原文様を持つ浅鉢、15は口縁部が体部から短

5 縄文土器の分類及び編年観は、小林達雄編 1989a・b・c、千葉 2001・2005、柳浦 2000・2003 を参考とした。分類にあたっては島根県古代文化センターの柳浦俊一氏の協力を得た。



第 126 図 6 区⑥VI 層出土土器 (1)

く屈折し、端部が内側に肥厚する浅鉢で、これらは辻賀里Ⅱ式～篠原式に位置付けられよう。14 は条痕が施された深鉢で、篠原式のものか。16～18 は突帯文土器である。16 は端部からやや下がった位置に、17 は端部にそってそれぞれ刻目のある突帯を持つ。18 は口縁端部から下がった位置に無刻の突帯を持つ壺である。

19 は注口土器で、後期から晩期のものとみられる。

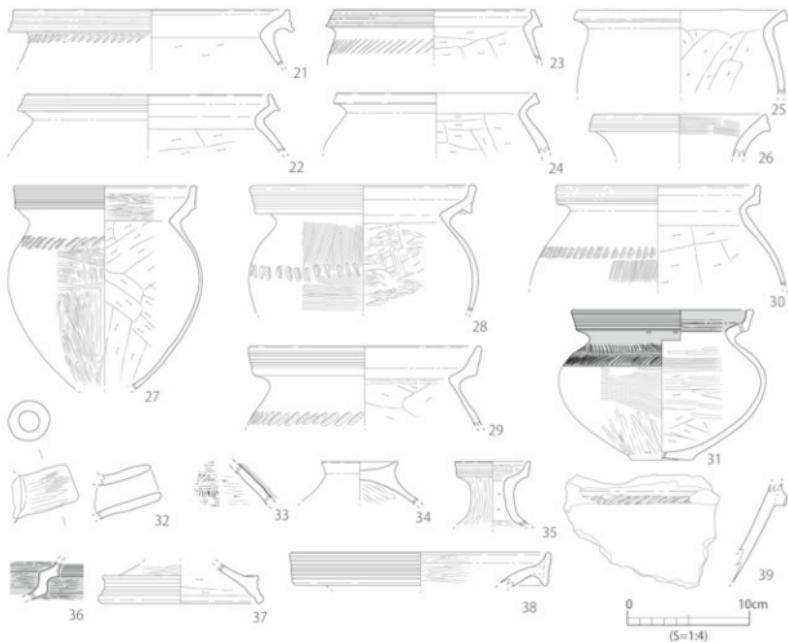
② 弥生土器 (第 126 図)

127 は V 層から出土したが、下層のものが混入した可能性がある。ほかは VI 層から出土した。

1～3 は I 様式、4 は I～II 様式の甕である。1 は肩部に 2 条のヘラ描沈線、2 には肩部に 6 条のヘラ描沈線、口縁端部に X 形の刺突文を持つ。

5～20 は中期の土器である。5～7 は III～II 様式の甕で、5 は口縁端部に面を持つもの、6 は端部に凹面を持つもので、7 は端部に刻目を持ち、頸部に刻目突帯が貼り付けられている。8～10 は III 様式の壺である。8 は広口壺で、口縁端部には粘土が貼り付けられ、垂れ下がったかたちをしている。口縁部外面には鋸歯文が、上面には格子目文や波状文、粘土紐貼り付け突帯や円形浮文が施されていた。11 は鉢で、口縁部が三角形状の断面形で、端部には刺突が入る。

12～17 は IV 様式の甕である。13 は頸部に刻目突帯を、14 は口縁部に円形浮文を持ち、12 は刻目突帯と円形浮文をそれぞれ備える。15 は肩部に 3 条の凹線が巡る。16・17 は口縁部が上下

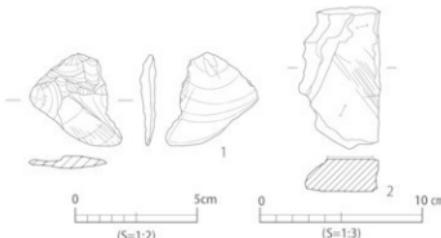


第127図 6区⑥VI層出土弥生土器(2)

に拡張されたもので、16は5条の凹線が巡り、17は2条の凹線のうち縱方向に刻目が施されている。18はIV-2様式の壺で、頸部にも凹線を持つ。19・20はIV様式の高壺である。19は口縁端面と外面に凹線が施され、外面の凹線上には刺突も見られる。20は脚部で、裾部に凹線が巡る。

21～37は後期の土器である。21

～23・30は口縁部に凹線を持つ甕で、V-1様式に位置付けられる。21～23は口縁部が内傾し、30は外傾する。21・23・30は肩部にヘラ状工具やハケ目原体による刺突文が施されている。24・25は単純口縁の甕で、端部に若干広い面を持ち、無文のものである。V-1～2様式のものと考える。26は壺で、口縁端部が若干広く作られ、凹線が巡るもので、V-1様式に相当するものであろう。27～29は、外傾する口縁部に貝殻等による平行直線文を、肩部には刺突文を施したもので、これらはV-2様式に位置付けられる。31は鉢で、口縁部には平行直線文が、肩部には沈線と綾杉状に刺突文があり、口縁部内外面及び外面の肩部にはベンガラが塗られている。これもV-2様式のものである。32は注口土器の注口で筒形をしている。33は装飾壺の体部で、爪



第128図 6区⑥VI層出土石製品

形の刺突文や鋸歯文があり、外面には水銀朱が塗布されている。34・35は蓋である。34は盃を伏せたような器形をしており、35は体部からつまみにかけて孔が貫通し、つまみには平行直線文が入る。36は、口縁部が屈折して複合口縁状になる高坏で、V-1様式のものである。37は器台の脚部で、V-2様式のものとみられる。

38・39は在地では見られない器形である。38は器台もしくは壺で、粘土貼り付けて口縁部を上下に拡張したものである。39は壺胴部の破片で、刻目を持つ突帯が貼り付けられている。第91図8と突帯の形状や胎土が似ている。北部九州系もしくは西部瀬戸内系土器の可能性がある。

③石製品（第128図）

いざれもⅥ層から出土した。1は黒曜石の剝片である。2は砥石で、上面に砥面があり、鉄製品の刃部を研いたような、細い線状痕も観察できる。

第5節 6区⑧の調査

1. 調査の経過と調査区の様相

6区⑧は、6区①の北側に位置する。平成20年度に190m²を発掘調査した。

平成20年7月28日から重機による表土掘削を開始し、近世以降の耕作土層（I層）を除去した。6区④の調査終了後、8月7日から人力による黒色腐植土層（II層）の掘削を開始した。この層は、「オモカス層」とも呼ばれるもので、中世に低湿地化した段階の堆積層である。途中盆休みを挟んだが、8月20日にはII層を掘り上げた。II層では遺物は出土しなかった。

続けて黒褐色粘質土層（III層）の掘削を行った。この層は、径1cm大の白色～黄褐色の砂質土粒塊を含むもので、古代の耕作土層と考えられる。堆積は5～10cm程度と薄く、遺物は少量の土師器・須恵器が出土したのみであった。なお、本調査区では、III層の下に弥生時代後期後葉～古墳時代の遺物包含層（6区⑥IV層に相当）は確認できなかった。

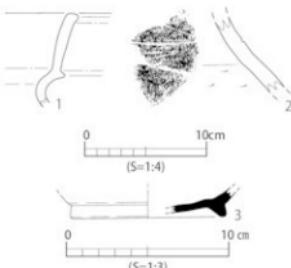
8月22日にはIII層が掘り上がり、灰色シルト層（V層）上面に到達した。V層上面の標高は2.7～2.8mである。この面で遺構の検出を試みたが、遺構は存在しなかった。調査区の完掘写真を撮影して、発掘調査を終了した。

2. 出土遺物

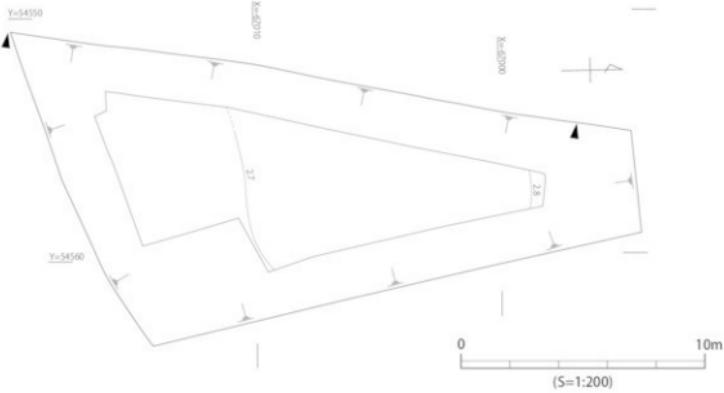
前述したように遺物は、III層から少量の土師器・須恵器片が出土したのみであった。

1・2は古式土師器の壺で、1は端部が面取りされて外側に肥厚した口縁部片、2は有軸羽状文を持つ頸部の破片である。これらは小谷2式以降に位置付けられよう。

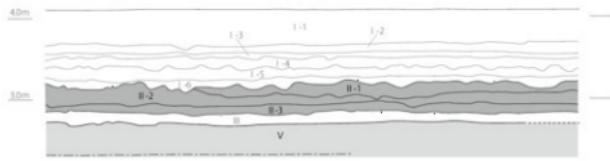
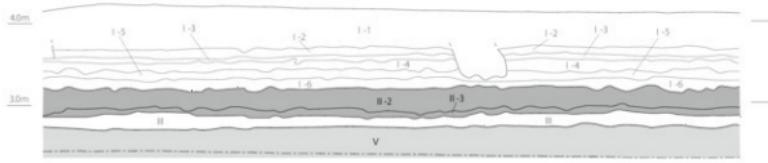
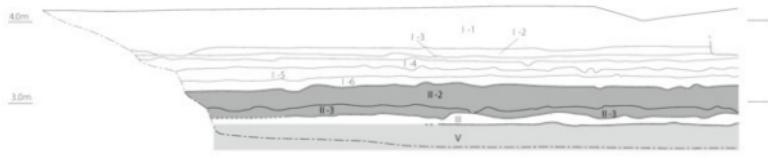
3は須恵器の壺で、底部の周縁よりやや内側に、端部が丸みを帯びた低い高台が付くもので、岡田編年のIV/A期頃のものと考えられる。



第129図 6区⑧出土遺物



第130図 6区⑧全体図



- I-1 黄褐色粘質土 2.5% / 2 現在の耕作土。
- I-2 黑褐色粘質土 2.5% / 1
- I-3 にごく薄色砂 2.5% / 3 砂緻で雲母多く含む。
- I-4 黄褐色粘質土 2.5% / 2
- I-5 黑褐色粘質土 10% / 1
- I-6 黑褐色粘質土 10% / 1 Iよりやや浅い色調。
- II-1 黑褐色粘質土 10% / 1 黒色腐殖土 (10% / 1) が入り混じった土層。
- II-2 黑褐色粘質土 10% / 1 腐植土層。
- III 黑褐色粘質土 2.5% / 2 腐植土層 (II-2と比べ深い色調)。
- IV 黑褐色粘質土 2.5% / 2 腐植土層 (II-2と比べ深い色調)。
- V 黑褐色シルト 2.5% / 1

0
2m
(S=1:60)

第131図 6区⑧西壁土層断面図